秋田県文化財調査報告書第279集

石　鳥　谷　館　跡

－県道比内大葛鹿角線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

１９９８・３

秋田県教育委員会

石鳥谷館跡

－県道比内大葛鹿角線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

1998・3

秋田県教育委員会

序

埋蔵文化財は、郷土の歴史と文化を伝える先人の足跡であり、文化の基礎を成すものであります。私達は、この埋蔵文化財を保護・保存すると共に、過去の文化を学びとり、より良き文化をつくりあげ、継承していく責務があります。

このたび、県道比内大葛鹿角線建設事業により、中世城館跡として知られている石鳥谷館跡の一部が道路用地となりましたので、記録保存を図るために発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、中世城館跡に直接結びつく遺構は検出されませんでしたが、縄文時代前期から晩期の土器・石器、平安時代、中世、近世の遺構や遺物を検出しました。

本報告書は、これらの調査記録をまとめたものであります。

本書が郷土の歴史と文化を研究する資料の一つとして、多くの方々にご利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、ご協力を賜りました秋田県土木部鹿角土木事務所、鹿角市教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

秋田県教育委員会

教育長　小 野 寺　清

例　　言

1．本書は、県道比内大葛鹿角線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書は、1997(平成９)年度に調査された鹿角市に所在する石鳥谷館跡の調査結果を収めたものである。
3．調査の内容については、すでにその一部が年報などによって公表されているが、本報告書を正式のものとする。
4．本書の執筆は、磯村　亨と髙橋　保が行った。
5．出土陶磁器の鑑定は、佐賀県教育庁文化課大橋康二氏にお願いした。
6．第５章「自然科学的分析」は、株式会社パレオ・ラボに委託した報告である。
7．本書に使用した地図は、国土地理院発行の５万分の１『花輪』・『田山』と２万５千分の１『湯瀬』、秋田県土木部鹿角土木事務所提供の１千分の１工事計画図である。
8．本報告書を作成するにあたり、以下の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝申し上げる次第である。(敬称略、五十音順)

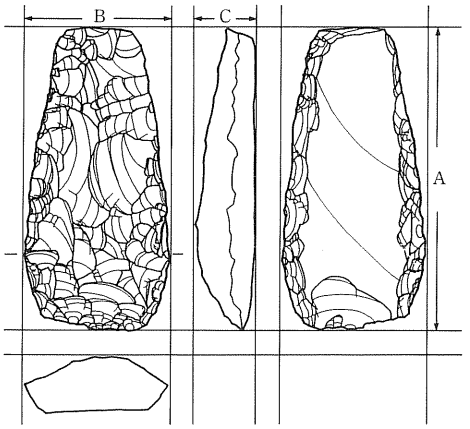
秋元信夫、工藤清泰、坂井秀弥、髙島成侑、立石泰久、花海義人、藤井安正、桝渕規彰、安村二郎

凡　　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、遺構には下記の略記号を使用した。

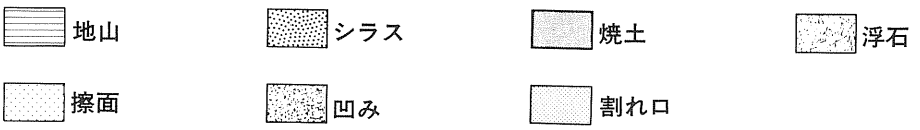
ＳＢ・・・掘立柱建物跡　　ＳＤ・・・溝跡　　ＳＮ・・・焼土遺構　　ＳＫＰ・・・柱穴様ピット

2．遺跡基本層位と遺構土層中の土色、遺物の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』(1994年版)によった。
3．挿図中の土器・石器などの遺物には番号を付してあり、その番号は図版中の遺物番号と対応している。
4．土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。
5．石器の計測部位は、下図のとおりである。また、計測値の単位は、長さ・幅・厚さが㎜、重さがｇである。



A　最大長　(㎜)
B　最大幅　(㎜)
C　最大厚　(㎜)

6．挿図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。



目　　次

序

例言・凡例

目次

表・挿図・図版目次

第１章　はじめに……1

　第１節　調査に至るまで……1

　第２節　調査要項……1

第２章　遺跡の環境……3

　第１節　遺跡の位置と立地……3

　第２節　歴史的環境……4

第３章　発掘調査の概要……7

　第１節　遺跡の概観……7

　第２節　調査の方法……13

　第３節　調査の経過……13

第４章　調査の記録……16

　第１節　検出遺構……16

　　１　柱穴様ピット……16

　　２　掘立柱建物跡……16

　　３　焼土遺構……20

　　４　溝跡……21

　第２節　出土遺物……23

　　１　縄文時代の遺物……23

　　２　平安時代の遺物……34

　　３　中世・近世の遺物……36

　　４　時期不明の遺物……47

第５章　自然科学的分析……50

　第１節　放射性炭素年代測定……50

　第２節　石鳥谷館跡出土材の樹種同定……51

　第３節　石鳥谷館跡のプラント・オパール……54

第６章　まとめ……58

表・挿図・図版目次

表目次

第1表　周辺遺跡一覧表 …… 5
第2表　石器観察表……34
第3表　陶磁器一覧表……44・45
第4表　時期不明遺物一覧表……49
第5表　石鳥谷館跡出土木材の樹種同定結果……52
第6表　試料1ｇ当たりのプラント・オパール個数 … 56

挿図目次

第1図　工事計画図と発掘調査区 …… 2
第2図　遺跡の位置 …… 3
第3図　周辺の遺跡位置図 …… 5
第4図　石鳥谷館跡及び発掘調査区周辺地形略図 …… 8
第5図　Ａ区調査区と北東隅層序 …… 9
第6図　Ｃ区調査区と土層図……10
第7図　Ｄ・Ｅ区調査区と土層図……11・12
第8図　SB01・02掘立柱建物跡と周辺ピット群……17
第9図　SB03・04掘立柱建物跡と周辺ピット群……18
第10図 SB05掘立柱建物跡と周辺ピット群……19
第11図 SN06・07・08・09・10焼土遺構……21
第12図 SD11・12溝跡……22
第13図 縄文土器（1）…… 25
第14図 縄文土器（2）…… 26
第15図 縄文土器（3）…… 27
第16図 縄文土器（4）…… 28
第17図 縄文土器（5）…… 29
第18図 縄文土器（6）・土製品……30
第19図 石器（1）…… 32
第20図 石器（2）…… 33
第21図 土師器……35
第22図 須恵器……36
第23図 陶磁器（1）…… 38
第24図 陶磁器（2）…… 39
第25図 陶磁器（3）…… 40
第26図 陶磁器（4）…… 41
第27図 陶磁器（5）…… 42
第28図 陶磁器（6）…… 43
第29図 煙管・銭貨……46
第30図 鉄製品……47
第31図 硯・漆器・坩堝・煉瓦・砥石・磚……48
第32図 石鳥谷館跡の試料採取地点付近の土層断面と
　　試料採取層準および採取位置……55
第33図 断面試料（12～15）のプラント・オパール分
　　布図……56
第34図 平面試料（16～21）のプラント・オパール分
　　布図……56

図版目次

図版1　陶磁器（1）　外面
　　同　　上 内面
図版2　陶磁器（2）　外面
　　同　　上 内面
図版3　陶磁器（3）　内面
　　同　　上 外面
図版4　陶磁器（4）　内面
　　同　　上 外面
図版5　遺跡遠景（1）　航空写真
　　同　　上（2）　航空写真
図版6　遺跡近景
　　Ａ区近景
　　Ｃ・Ｄ・Ｅ区近景
図版7　調査区北西側空堀
　　調査区西側平坦面
　　Ａ区柱穴検出状況
図版8　SN06確認状況
　　SN07確認状況
　　SN08断面
　　SN08断面
　　SN09断面
　　SN09遺物出土状況
　　SN10確認状況
　　SN10調査状況
図版9　Ａ区北東隅土層堆積状況
　　同上縄文土器出土状況
　　Ｃ区調査状況
図版10　Ｃ区土層堆積状況
　　Ｄ区土層堆積状況（1）
　　Ｅ区遺構検出作業状況
図版11　Ｅ区柱穴検出状況
　　Ｄ区土層堆積状況（2）
　　同　　上（3）
図版12　Ｄ区（4）・Ｅ区（1）土層堆積状況
　　Ｄ・Ｅ区柱穴完掘状況
　　Ｄ区礫層露出地域
図版13　Ｅ区柱穴検出作業状況
　　Ｅ区土層堆積状況（2）
　　同　　上（3）
図版14　Ｅ区シラス堆積部分
　　流木検出状況
　　Ｂ区調査状況
図版15　縄文土器
図版16　縄文土器
図版17　須恵器・土師器
　　中世・近世の遺物
図版18　鉄製品
　　時期不明の遺物
図版19　木材（1）
図版20　木材（2）
　　プラント・オパール

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまで

県道比内大葛鹿角線は、秋田県土木部により北秋田郡比内町側の県道比内森吉線と鹿角市側の国道341号を結ぶアクセス道路、および道幅が狭く急勾配の多い石鳥谷区域の冬期交通の円滑化をはかるためのバイパスとして計画された、北秋田郡比内町新館字真館から鹿角市八幡平字長峰に至る全長26.884kmの路線である。

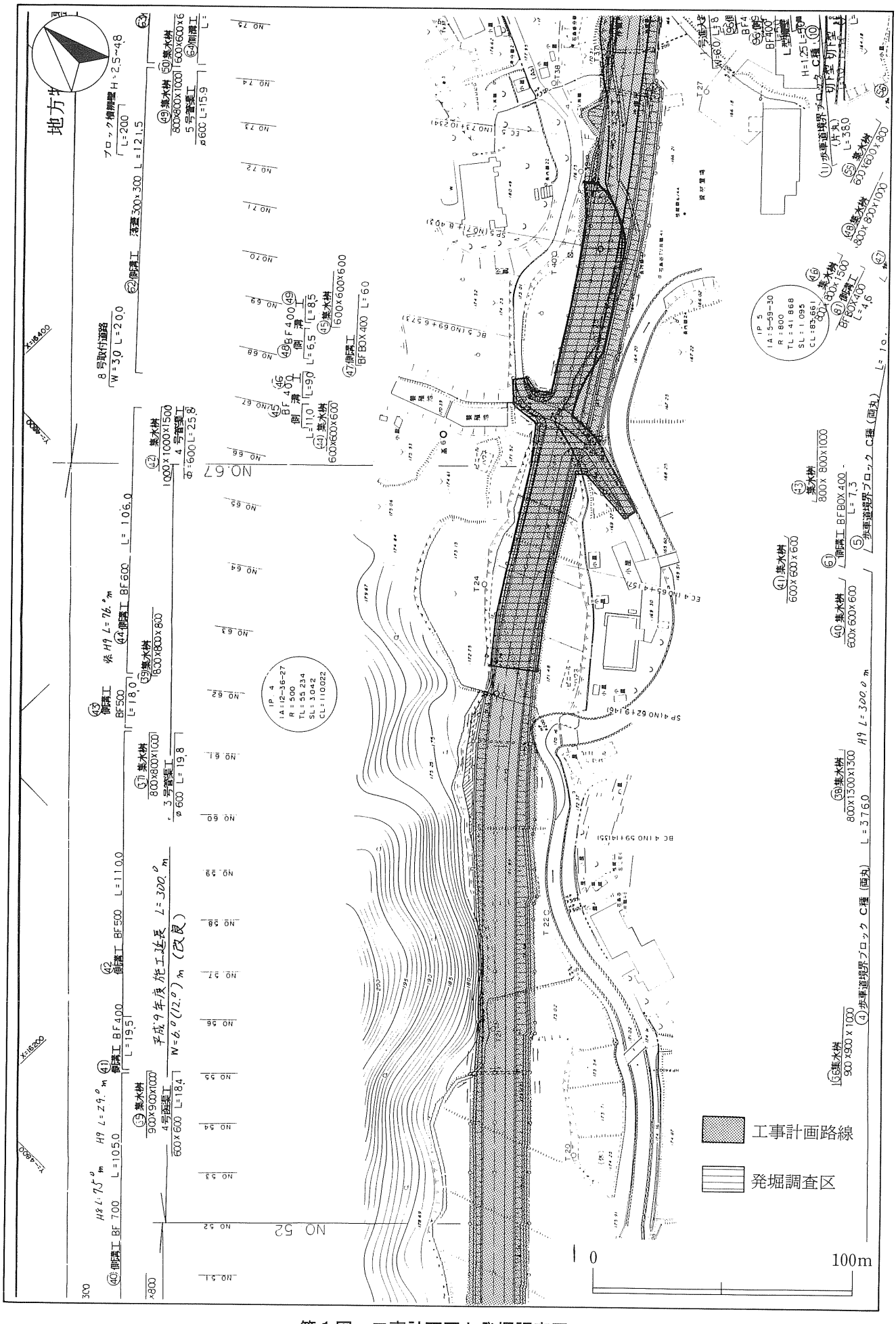
鹿角市側の工事計画路線周辺には、周知の遺跡が数ケ所あり、この一部を通過することが予測されるため、秋田県教育委員会では、平成７年度に計画路線内における埋蔵文化財の分布調査を行ったところ、周知の遺跡である石鳥谷館跡が路線に掛かる可能性のあることを確認した。このため、平成８年11月５日から11月20日まで遺跡範囲確認調査を行い、計画路線に周知の遺跡である石鳥谷館跡の一部が掛かることが判明した。この結果に基づいて、秋田県教育委員会では、遺跡の保存・保護について工事主体者の秋田県土木部と協議し、工事着工に先立って発掘調査を行い記録保存を図ることとした。石鳥谷館跡の発掘調査は、平成９年５月19日から４ケ月間にわたって実施した。

第２節　調査要項

遺　跡　名	石鳥谷館跡（いしどりやたてあと）　（遺跡略号１ＩＤＹＴ）
所　在　地	秋田県鹿角市八幡平字石鳥谷87番地外
調査期間	平成９年５月19日～９月25日
調査目的	県道比内大葛鹿角線建設事業に係る事前調査
調査面積	3,550㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	磯村　　亨（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第３科学芸主事）
	髙橋　　保（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第３科主事）
総務担当者	藤肥　良清（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
	佐藤　幸嗣（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
	須田　輝樹（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関	秋田県土木部鹿角土木事務所
	鹿角市教育委員会

参考文献

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第267集　1996（平成８）年
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997（平成９）年



第１図　工事計画図と発掘調査区

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

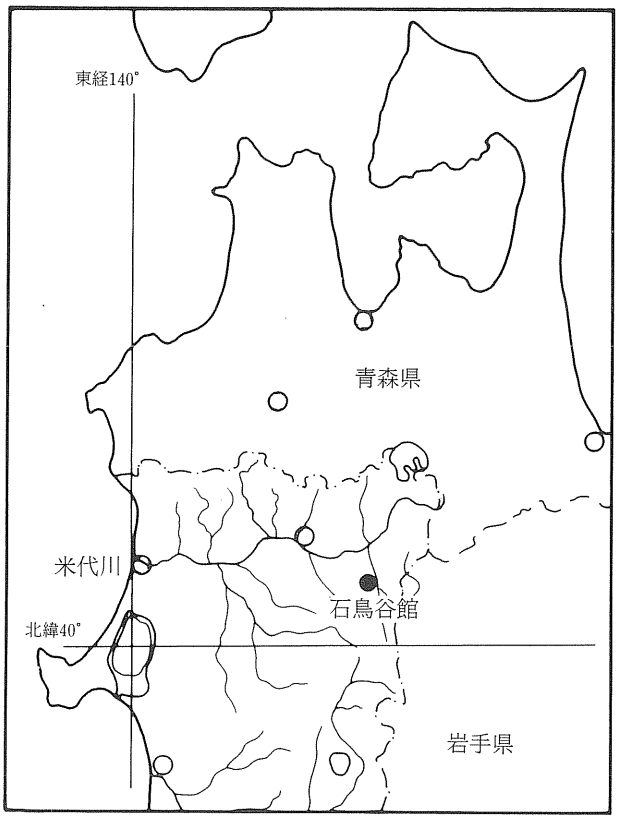
石鳥谷館跡は、鹿角市南西部の八幡平石鳥谷地区に所在し、ＪＲ東日本花輪線陸中大里駅の南西約1.7㎞、北緯40°08′46″、東経140°46′52″に位置している(第２図)。

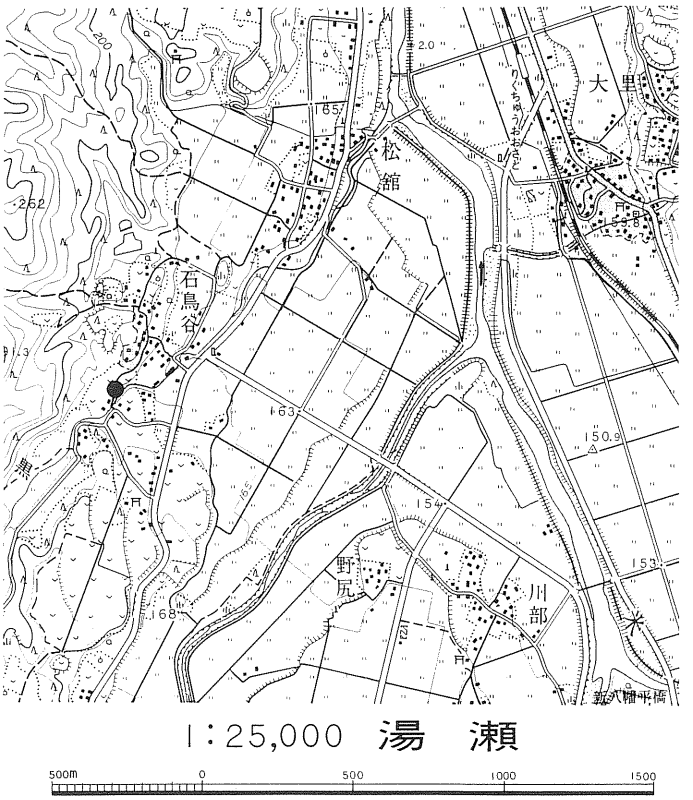
遺跡のある鹿角市は秋田県最北東端にあり、東を青森県三戸郡・岩手県二戸郡、西を鹿角郡小坂町・大館市・北秋田郡比内町・同郡森吉町、南を仙北郡田沢湖町、北を十和田湖を境に青森県上北郡と接している。

市域の地形は、花輪盆地、それを囲む山脈・山地、盆地内の段丘地と沖積低地からなっている。花輪盆地は断層によって陥没した地溝盆地であり、東側には五の宮嶽(標高1,115m)、皮投岳(標高1,122m)、中岳(標高1,024m)などの急峻な壮年期の山々が連なる。一方、西側には、三ノ岳(618m)、土筆森(263m)など比較的低い山が起伏を見せながら連なっている。このような山々に囲まれた花輪盆地は、南北に長い地形を呈している。

岩手県四角岳に源を発する米代川は、西に流れ風光明媚な湯瀬渓谷を過ぎ、盆地南端の八幡平川部に差しかかった辺りで、南から流れる熊沢川と合流し北に向きを変える。まもなく西側山地に源を発する夜明島川、八幡平松館で黒沢川を合わせて盆地西縁に沿って北流する。鹿角市北西部で十和利山付近から南西に流れる大湯川と合流し、再び西に向きを変えて日本海へと流れていく。この水系や盆地には、数段の河岸段丘が発達している。

この段丘の形成は、①隆起する脊梁山地からの莫大な砂礫の供給による段丘形成。②十和田火山による大量の軽石流の流入。③現在の河川による浸食と砂礫の供給。によるとされている。段丘面は、盆地の北部～





第２図　遺跡の位置

中部では鳥越段丘、関上段丘、中間段丘、毛馬内段丘の４段丘面に区分され、南部では高位段丘、中位段丘、鳥越段丘、関上段丘、松館段丘、大里段丘の６段丘に区分される。

このうち石鳥谷館跡は、三ノ岳東麓の黒沢川左岸の松館段丘上に立地している。館は、標高200m前後に高さを揃える大小10ほどの郭及びその裾にいくつかの段築が施されている。

調査区は、石鳥谷館跡南東端及びそれに接続する地域で、館の段築の直下に位置し、黒沢川からの距離は10m～35m、標高は168.2m～171.8mである。

第２節　歴史的環境

鹿角市内では、平成元年に行った詳細分布調査において、416ヶ所の遺跡の存在が確認されている。これらの遺跡は、標高150～270mを測る数段の段丘面に多く存在し、ほとんどが縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。

現在のところ、鹿角市で旧石器時代の遺跡は見つかっていない。

縄文時代では、草創期の爪形文土器が出土した飛鳥平遺跡が最も古く、前期は円筒土器を出土する遺跡が多い。昭和29年に行われた清水向遺跡の発掘調査では、前期後半の円筒下層式土器を出土し、当該期の竪穴住居跡が２棟検出されている。中期になると、円筒土器とともに大木式土器を出土する遺跡が多くなる。飛鳥平遺跡、北の林Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡、天戸森遺跡などでは、石組炉を持つ大木10式の竪穴住居跡が報告されている。後期では、十腰内式土器を出土した飛鳥平遺跡、案内Ⅰ遺跡があり、晩期の遺跡は、配石遺構を伴う玉内遺跡と東在家遺跡が著名である。

弥生時代では、天王山式土器を出土する猿ヶ平Ⅰ遺跡がある。

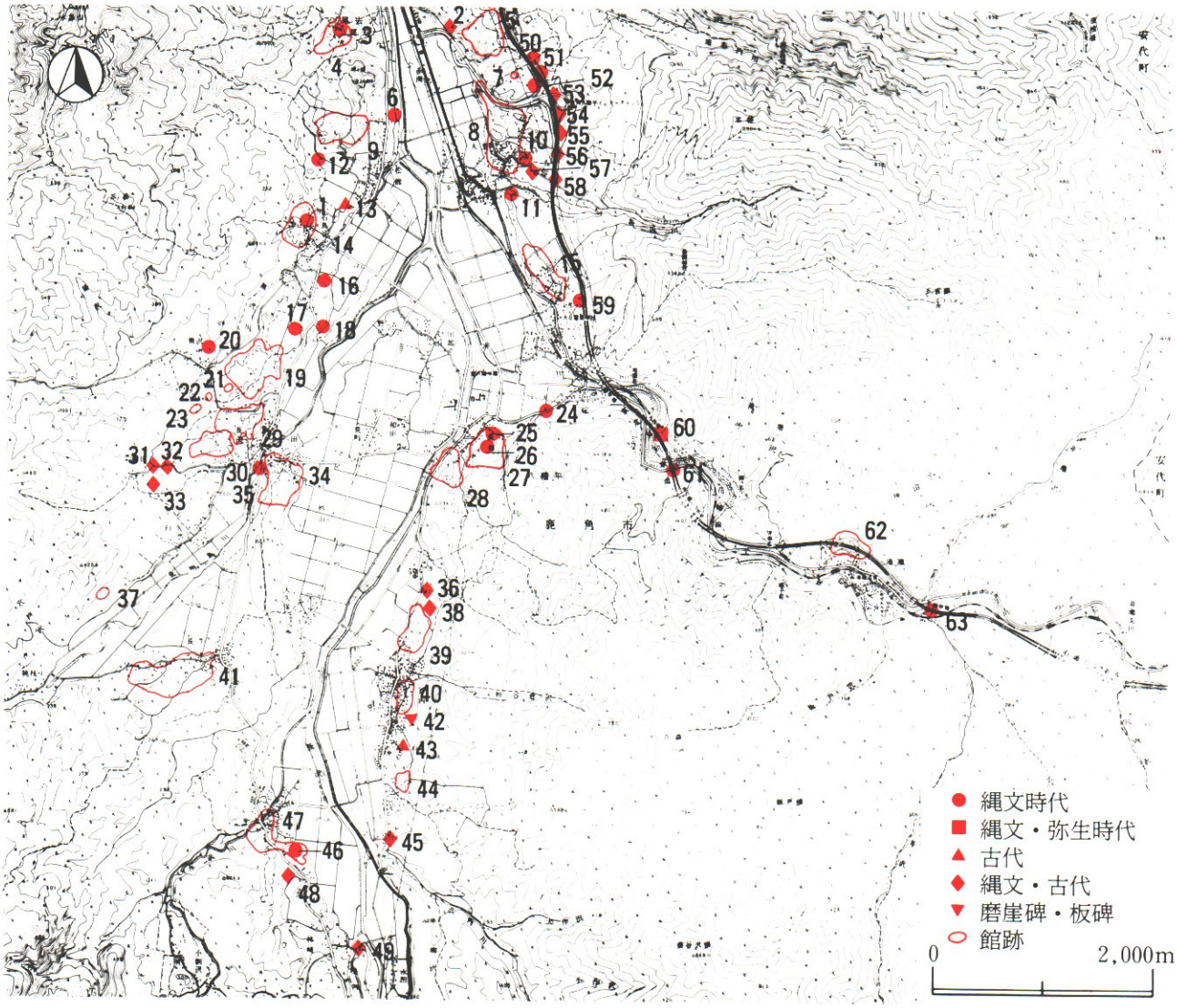
奈良・平安時代では、県内で唯一墳丘が残っている尾去地区の三光塚古墳や歌内遺跡、北の林Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡、上葛岡Ⅳ遺跡、案内Ⅱ遺跡など、数十棟の竪穴住居跡の検出されている平安時代後半の集落跡がある。

平安時代以降の中世期では、42館、もしくは48館と称される城館跡が、せまい盆地周辺に群在する。

鎌倉時代後期に関東から移住した成田、安保、奈良、秋元の４氏にはじまるとされるこの中世城館は、大里館、玉内館、石鳥谷館、長内館、三ヶ田館などの地名で村落に残る。大里館は鎌倉時代以来安保氏一族の惣領の本拠で、史料の初見は南北朝にさかのぼる。すなわち、建武３(1336)年と４(1337)年に陸奥国北朝党のため攻撃された記録（南部文書）がそれである。大里館以外の館は、戦国期における南部氏と安東氏の確執の記録に散見するが、創建期など不明な点が多い。これらの館跡は平地に臨む舌状台地を空堀等で分断し、主郭を中心にして数個の郭を配している。湯瀬館、小豆沢館の一部が発掘調査され、掘立柱建物跡、礎石建物跡、竪穴建物跡などが検出されているが、館上面の平場は、縄文、弥生、奈良、平安時代の人々の居住面でもあり、各時代各種の遺構遺物が出土した。

引用・参考文献

奈良修介・豊島昂編『秋田県の考古学』郷土考古学叢書　1967（昭和42）年
鹿角市『鹿角市史　第１巻』　1982（昭和57）年
鹿角市教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』鹿角市文化財調査資料39　1990（平成元）年
鹿角市教育委員会『天戸森遺跡』鹿角市文化財調査資料26　1984（昭和59）年
鹿角市教育委員会『鹿角の館(2)』鹿角市文化財調査資料23　1983（昭和58）年



第３図　周辺の遺跡位置図

番号	遺　跡　名	時　　代
1	石鳥谷館	縄文・古代・中世(館跡)・近世
2	駒林	縄文・古代
3	尾去Ⅱ	縄文
4	尾去館	館跡
5	下館	館跡
6	岩淵	縄文
7	中ノ沢	縄文（晩期）・古代・館跡
8	大里館	館跡
9	松館	館跡
10	大里	縄文
11	下鷲の巣	縄文（前～中期）
12	後口田Ⅱ	縄文
13	後口田Ⅰ	古代
14	石鳥谷	縄文（中期）
15	小豆沢館	縄文（前～中期）・館跡
16	下和志賀Ⅰ	縄文
17	下和志賀Ⅱ	縄文（中～後期）
18	二ツ森	縄文（晩期）
19	上三和志賀館	館跡
20	黒沢	縄文（後期）
21	上三和志賀Ⅰ	古代・館跡
22	上三和志賀Ⅱ	古代・館跡
23	上三和志賀Ⅲ	古代・館跡
24	長畑	縄文
25	新城Ａ	縄文（前期）
26	新城Ｂ	縄文（前～中期）
27	長嶺館跡Ｂ	館跡
28	長嶺館跡Ａ	館跡
29	長内館	館跡
30	長内古館	館跡
31	小館Ⅰ	縄文・古代
32	小館Ⅱ	縄文・古代
33	小館Ⅲ	縄文・古代
34	三ヶ田館	館跡
35	三ヶ田	縄文（後期）
36	八舛寺	縄文・古代
37	白懸館	館跡
38	谷内下毛平	縄文・古代
39	谷内館Ａ	館跡
40	谷内館Ｂ	館跡
41	長牛館	館跡
42	天照皇御祖神社境内	磨崖仏及び板碑
43	沼田	古代
44	谷内高館	館跡
45	小宮	縄文・古代
46	大館	縄文（前期）
47	夏井館	館跡
48	上三沢	縄文（中期）・古代
49	林崎根瀬	縄文・古代
50	上葛岡Ⅲ	縄文（中～後期）
51	上葛岡Ⅱ	縄文（中～後期）
52	上葛岡Ⅰ	縄文（中～後期）
53	北の林Ⅱ	縄文・古代
54	北の林Ⅰ	縄文・古代
55	飛鳥平	縄文・古代
56	鳥居平Ⅰ	縄文・古代
57	鳥居平Ⅱ	縄文・古代
58	歌内	縄文・古代
59	堂の上	縄文（中～晩期）
60	大地平	縄文（前期・晩期）・弥生
61	上山田	縄文（前期）
62	湯瀬館	縄文・弥生・古代・館跡
63	居熊井	縄文（前～中～後期）

第１表　周辺遺跡一覧表（番号は第３図中の数字に対応する）

鹿角市教育委員会『鹿角の館(4)』鹿角市文化財調査資料28　1985（昭和60）年
秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第24集　1972（昭和47）年
秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ－歌内遺跡－』秋田県文化財調査報告書第88集
1982（昭和57）年
秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ－鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林Ⅰ遺跡－』
秋田県文化財調査報告書第89集　1982（昭和57）年
秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ－北の林Ⅱ遺跡・上葛岡Ⅰ遺跡・上葛岡Ⅱ遺跡・小豆沢館跡－』
秋田県文化財調査報告書第90集　1982（昭和57）年
秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ－上葛岡Ⅳ遺跡・駒林遺跡・案内Ⅱ遺跡・猿ヶ平Ⅰ遺跡－』
秋田県文化財調査報告書第91集　1982（昭和57）年
秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ－猿ヶ平Ⅱ遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内Ⅲ遺跡－』
秋田県文化財調査報告書第99集　1983（昭和58）年
秋田県教育委員会『玉内遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第171集　1988（昭和63）年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

石鳥谷館は、石鳥谷集落の東側の高台に立地する大規模な多郭連続式中世城館とされている。第４図は館周辺の地形略図であり、自然地形を利用した郭状平坦面をⅠ～Ⅸとして示した。各郭は、深さ５ｍ、上幅10ｍ前後の空堀や、沢を利用した溝によってそれぞれ区画されており、帯郭や腰郭が巡るものもある。郭の中で最も南東側に位置する第Ⅰ郭は、石鳥谷館の主郭と推定され、東側には上幅約20ｍ、深さ約７ｍの空堀を巡らしている。発掘調査区は、この空堀の南西から北東側にあたる。

調査区は地形や調査工程の関係から、便宜上Ａ～Ｅ区の５地区とした。以下、各区の概要と石鳥谷館の歴史的背景について述べていきたい。

Ａ区は、標高170ｍ前後、現水田面からの比高差２ｍを測るほぼ平坦な山ブドウ園である。基本層位は、Ⅰ層表土＝耕作土５～30㎝、Ⅱ層暗褐色土＝浮石・炭化物混入土10～40㎝、Ⅲ層暗褐色土＝浮石混入土５～15㎝、Ⅳ層灰白色土＝シラス堆積土10～20㎝である。Ⅳ層以下は浮石混入土であり、堆積状況から水流によるものと予想され、基盤層を掘り込んだ遺構は存在しないものと判断し、部分的な層位の確認調査を行った。ただし、Ａ区北東隅の一部には浮石を含まない縄文前期～晩期の遺物包含層が存在していたことから、基盤層まで掘り下げて遺物の取り上げおよび層位の記録を行った。層位は、Ⅰ層表土（耕作土）20～30㎝、以下Ⅱ～Ⅲ層に分層した。縄文時代の遺物包含層は、Ⅸ～Ⅺ層の大湯浮石を含まない層にあたり、西側ほど厚く堆積し、東縁ではほとんど失われる。また、Ⅶ層の上面には、土中の鉄分の沈殿が認められたことから、同地が水没していた可能性がある。Ⅳ層からは平安時代の土師器、さらにⅢ層以上からは中近世の陶磁器が出土している。

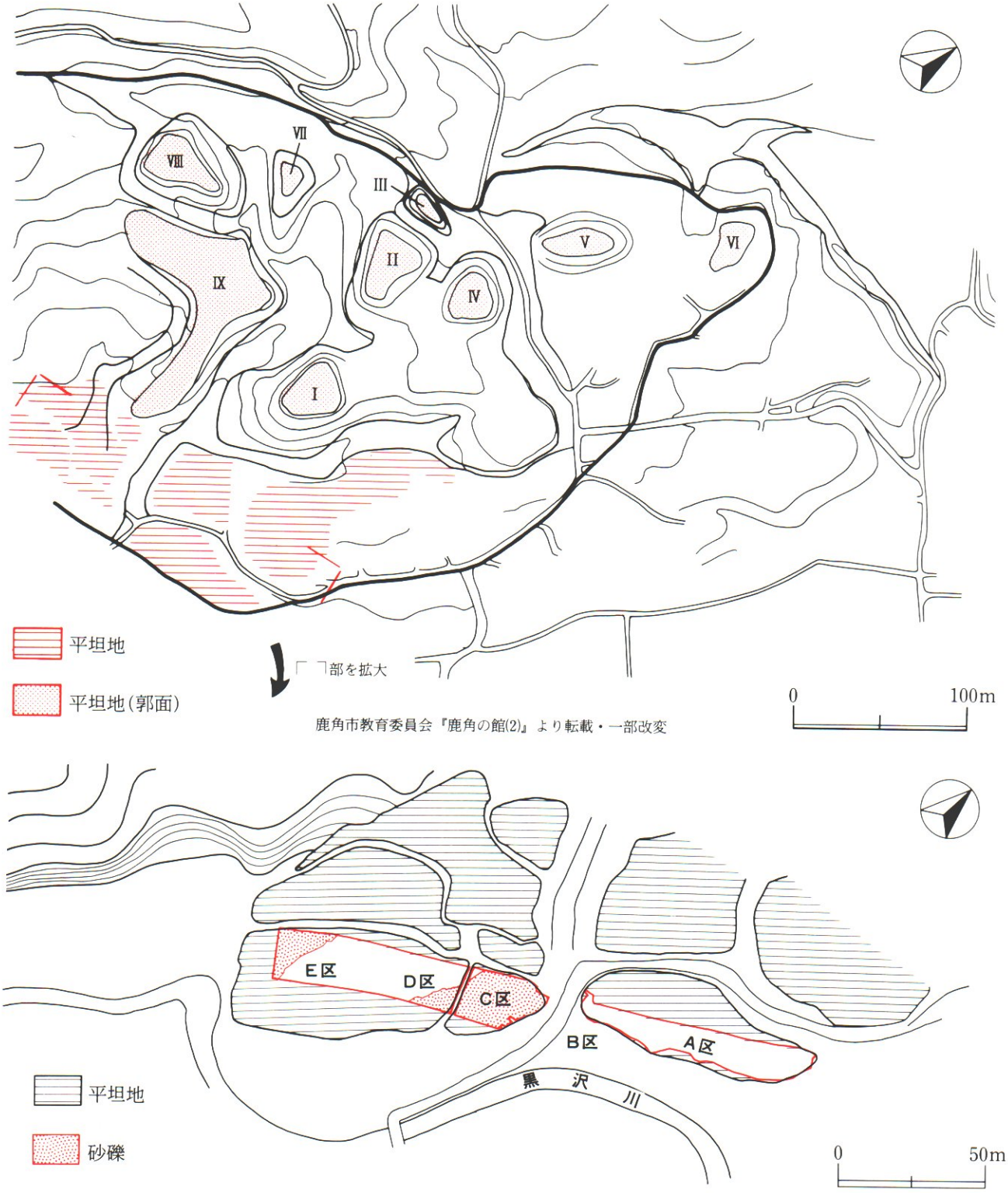
Ｂ区は、標高約168～172ｍ、北西から南東に向かって傾斜している市道である。市道の西側に養殖池があり発掘により崩壊する恐れがあったため、トレンチ調査を行った。その結果、人為的に空堀が掘られた痕跡は認められなかった。砂礫層は、Ｃ～Ｅ区で認められたものと同じで、河川ないしは沢の水流作用によって堆積したものと推測される。湧水が激しく、写真記録と略図記録で調査を終えた。

Ｃ区は、標高約170ｍ前後を測る平坦な畑地である。基本層序は、第６図のようにシラスと川砂の互層になっており、基盤層は砂礫である。遺構・遺物は検出されなかった。

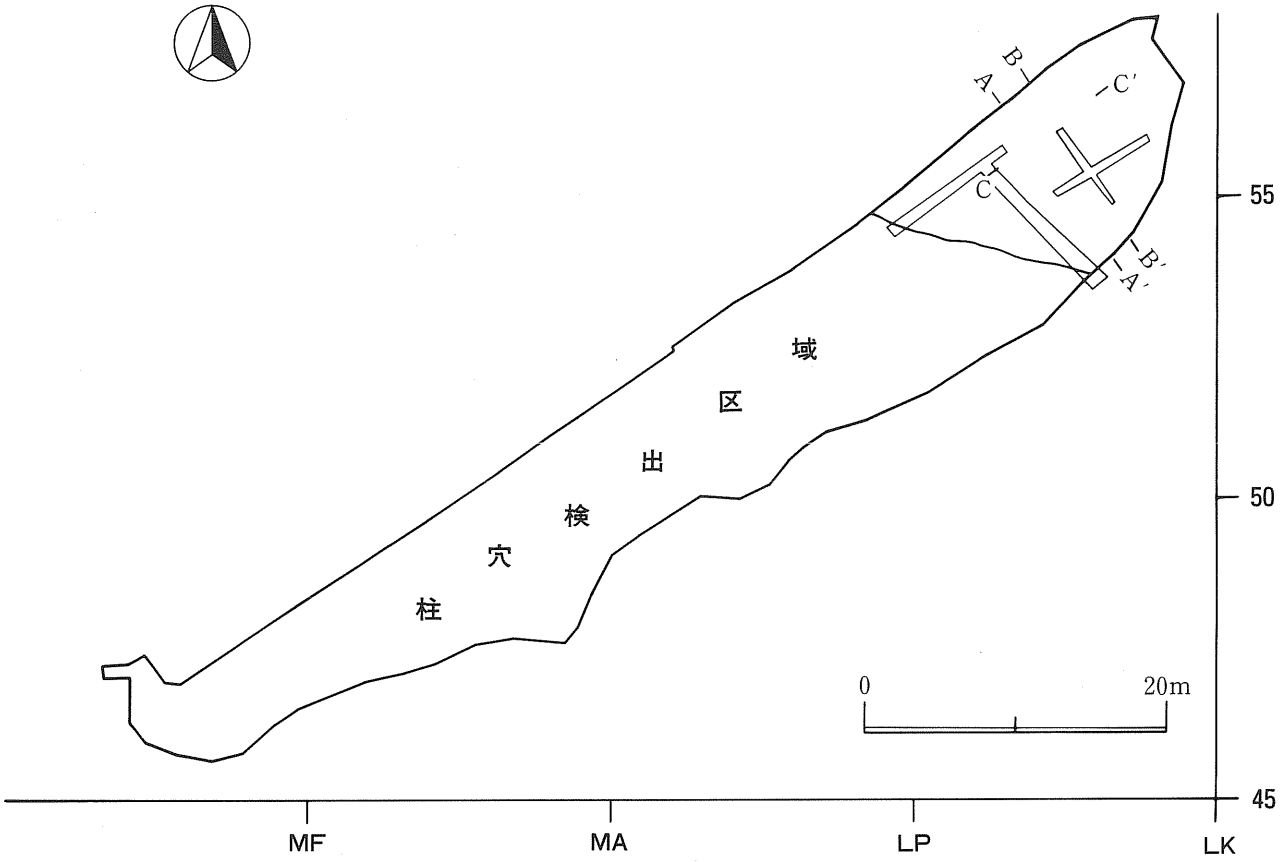
Ｄ・Ｅ区は、水路を挟んでＣ区の南側に隣接する。砂礫層は、第４・７図のように、Ｃ区では全面、Ｄ区では南東側、Ｅ区では南西側でそれぞれ認められた。Ｄ・Ｅ区では、基盤である砂礫層の凹み部分にシラス・川砂が互層となって堆積し、その上から柱穴様ピットが掘りこまれていた。また、シラス・川砂は、膨大な量であり、かつ黒色土が筋状に混入していたことや調査区の近辺に供給源が認められないことから、人為的に盛り土されたものではなく、黒沢川の上流部や近くの沢等からの水流作用による自然堆積である可能性が高い。

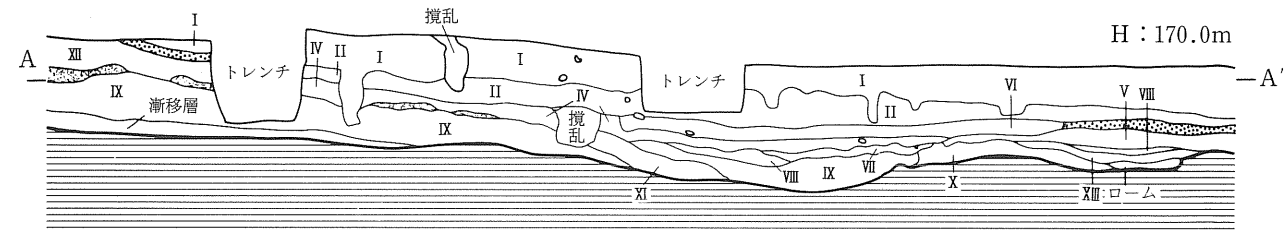
中世の石鳥谷館は、いわゆる鹿角四氏のうち安保氏の拠るところであったが、後に一戸南部氏の支流である南部九郎正友がこれに替わり、南部勢力の扶植の基地とした。これについて『鹿角由来集』では、「一、石鳥屋村　石鳥屋五郎領　名字安保　館有　後南部九郎正友　祖南部殿御一門　鹿角三百町旗頭　三戸より遣ワサレ　是に御座成サレ候」と記されている。また、永禄９(1566)年あるいは永禄８(1565)年に安東愛季の

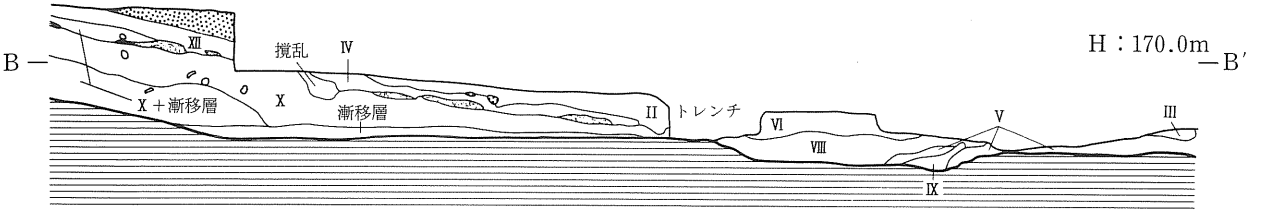
鹿角侵攻の際に、石鳥谷館がその緒戦場となったことについて、「永禄九年九月頃、（中略）石鳥屋城ニ見付ノ為　長牛縫殿助、谷内弾正、籠城仕リ戦イ候得共、寄手大勢故、数度、合戦ニテ　石鳥屋之城落居、正友も長牛ニ居リ、城ニ籠リ秋田勢待チ申ス事」と記されている。天正19(1591)年の奥州仕置の際、鹿角地方の中世城館が相次いで破却されているが、このころまで同館が存置されていたかどうかについての記録は存在しない。発掘調査区は、このような歴史的な背景を有する石鳥谷館の東縁部にあたる。

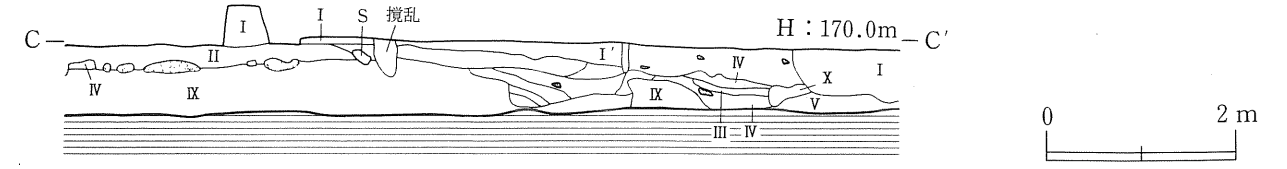


第４図　石鳥谷館跡及び発掘調査区周辺地形略図

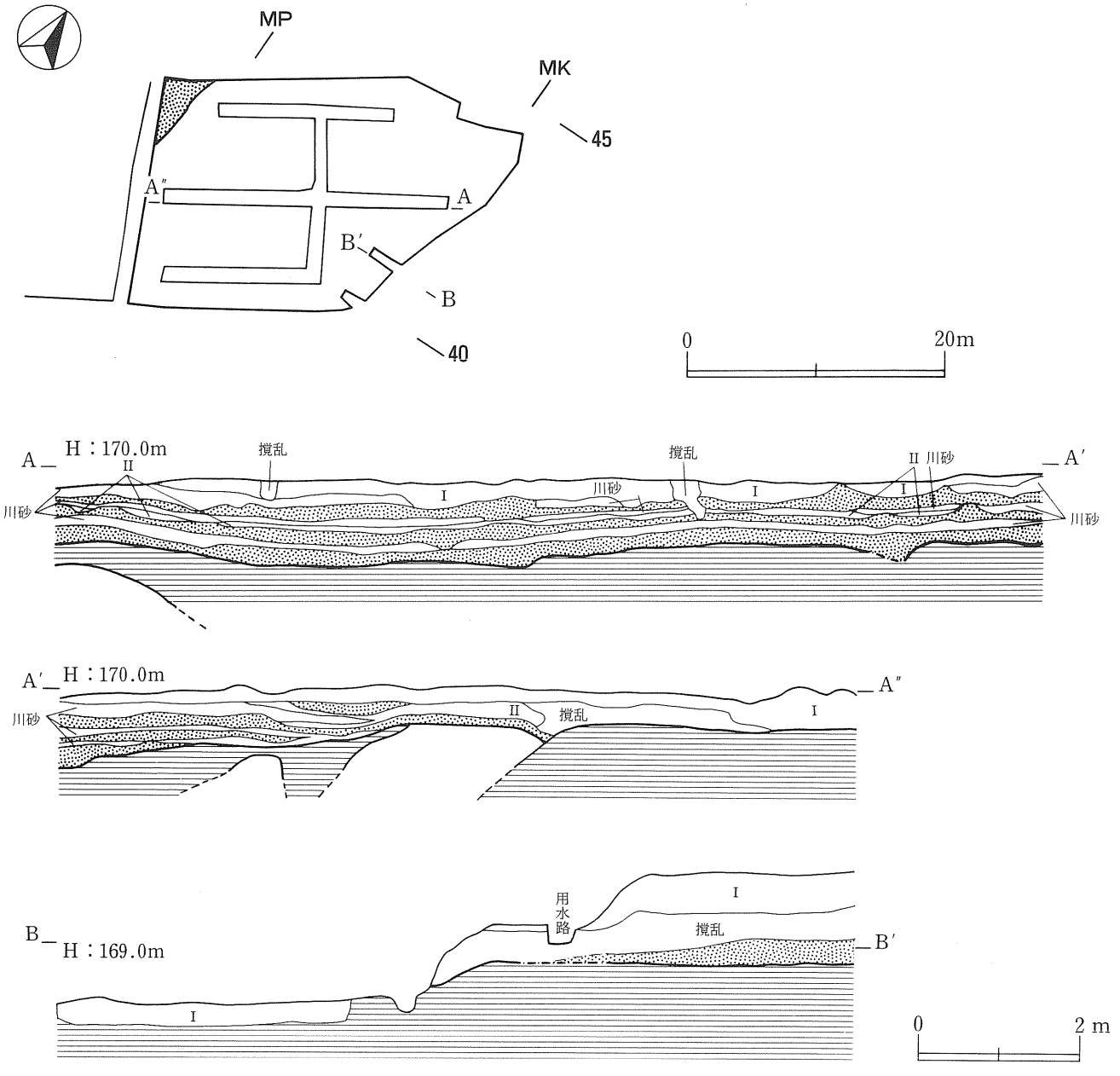




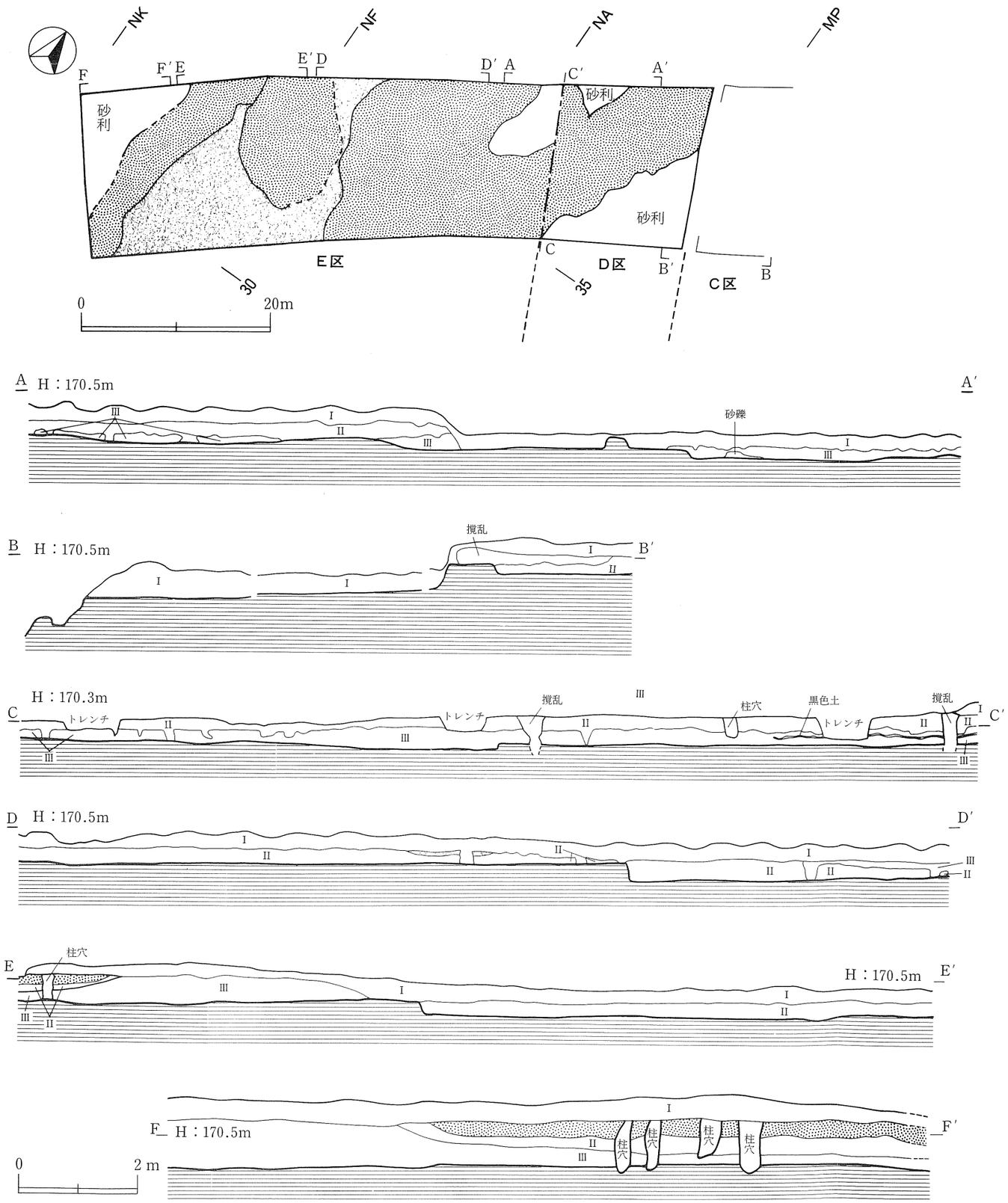




第５図　Ａ区調査区と北東隅層序



第６図　Ｃ区調査区と土層図



第７図　Ｄ・Ｅ区調査区と土層図

第２節　調査の方法

（１）調査区の設定

計画路線の基準杭STA.No.70+00中心杭を原点(MA50)とし、この原点から真北方向に基準点を選定し、この基準点に直行する４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。また９箇所の杭をレベル原点とした。グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す…ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ…というアルファベットと、南から北に向かって南北方向を示す…48・49・50・51…の２桁の数字を組み合わせた記号を記入し、４ｍ×４ｍ方形の南東端をグリッドの名称とした。

調査対象全域にグリッドを設定することにより、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握に努めた。

（２）発掘の方法

Ｃ区、Ｄ区、Ｅ区の表土除去は重機を用いて行い、他区は人力で行った。Ａ区西側は基盤層まで掘り下げると地滑り・崩壊が起こる可能性があったため、Ⅲ層以下はトレンチ及び坪掘り調査とした。Ｂ区は現道として使用されていたため、隣接するＣ区の調査終了後、同区内に付け替え工事を行いトレンチ調査を行った。

（３）遺構の調査

検出された遺構は、トータルステーションでその位置を測定し、遺構配置図作成後に精査を行った。

遺構の精査は、２分法を用いて内部に堆積する覆土の状態を観察し、平面実測図を完成させるという手順をとった。柱穴状ピットについては、確認面での土色注記後、完掘した。遺構番号は、種類毎に01から通し番号で付した。

（４）遺物の取り上げ

遺物は、遺跡名・出土グリッド・遺物番号・出土年月日を記入した袋に入れ取り上げた。遺物番号を付したものは、トータルステーションで、出土地点及び出土レベルを測定した。

（５）実測図の作成

調査区全域の平面図は1/100、遺構配置図、遺構の平面図、土層断面図は1/20を原則として遣り方測量で行った。

（６）写真の記録

記録のために撮影した写真は、35㎜判モノクロ・カラースライド、６×９㎝モノクロ・カラースライドをそれぞれ使い分けて撮影した。

第３節　調査の経過

発掘調査に先立ち、５月12日に現地を踏査及び条件整備の打ち合わせを行った。

５月19日：作業員説明会の後、Ａ区から調査を開始した。

５月23日：Ｃ・Ｄ・Ｅ区の表土除去を重機にて実施した。

５月27日：Ａ区北東側Ⅰ層中より鉄製品が出土。

５月28日：Ａ区北東端部縁より砥石、ＬＯ53区Ⅰ層中より石匙出土。

６月２日：ＬＯ54区Ⅱ層上面より寛永通寶１点出土。

６月９日：焼土遺構３基検出。Ａ区北東縁部に径20㎝前後の柱穴密集部分を確認した。

６月10日：焼土遺構の確認状況写真撮影。

６月11日：煙管雁首と寛永通寶出土。

６月12日：Ｅ区南西側土層断面図作成。

６月16日：Ａ区の柱穴数が198を数える。Ａ区より唐津皿底部出土。

６月17日：Ｃ区は基盤層（黒沢川の川床）の上に耕作土のみが堆積している模様であった。Ａ区で柱穴の半栽作業を開始した。

６月18日：Ａ区柱穴番号40覆土上面より永楽通寶出土。

６月19日：柱穴は、柱あたりに炭化物があるものや、底部に石を据えているものがみられた。Ｃ区は、シラス上面で遺構が存在しないことから、トレンチ調査で行うこととした。

６月20日：柱穴数は、Ａ区で326基、Ｄ区で100基を数えた。

６月25日：Ｅ区粗掘りがほぼ終了した。ＮＤ32区シラス下の浮石混入土より流木検出。

７月２日：Ｃ区土層断面図作成及び写真撮影。

７月７日：Ｄ・Ｅ区で検出された柱穴の土色注記とトータルステーションによる点的分布図が終了した。

７月８日：Ｄ区の柱穴完掘作業終了。

７月10日：検出した柱穴総数は、Ａ区352基、Ｄ区330基、Ｅ区839基で、合計1,521基を数えた。

７月18日：Ｄ区の柱穴完掘状況写真撮影。

７月24日：平面図作成次第レベリング作業を２班で進めた。

７月25日：柱穴数1,781基を数えた。

７月29日：ＬＬ57区北辺部にて焼土遺構１基確認。

７月31日：晴天に恵まれＣ・Ｄ・Ｅ区完掘全景写真撮影。Ｃ・Ｄ・Ｅ区の調査を終了した。

８月１日：Ａ区北東隅掘り下げ。縄文後期土器・土師器甕出土。

８月７日：スタンプ形土製品が出土。

８月８日：Ａ区Ⅱ層中・下層面の柱穴完掘状況写真撮影。

８月18日：ＬＬ57区須恵系陶器甕口縁部と思われる破片出土。黒土中より縄文土器等多く出土。本日より付け替え道路工事着手。

８月20日：Ｂ区現道部分を重機にてトレンチ調査をした。結果、遺構は存在しないことを確認し、写真記録により精査を終了した。

８月25日：Ａ区Ⅲ層まで掘り下げ開始。

８月28日：鹿角市教育委員会花海義人氏、鹿角市史編纂室安村二郎氏来跡。安村氏より石鳥谷館に関する歴史的背景等についてご教示頂いた。

８月29日：Ａ区Ⅲ層で新たに柱穴650基、焼土遺構６基を検出。

９月２日：ナンバリング後トータルステーションで点的分布測定。

９月３日：Ａ区南側で掘立柱建物跡を１棟検出。規模は梁行３間×桁行４間であった。

９月４日：Ａ区中央部で掘立柱建物跡を１棟検出。規模は３間×３間であると思われるが、今後該当する柱穴を探すことにした。

９月５日：新たに柱穴516基を検出。Ａ・Ｄ・Ｅ区の柱穴の総数は2,947基となった。

９月９日：掘立柱建物跡を３棟検出。

９月10日：Ａ区北西隅より土師器坏・甕出土。

９月11日：Ａ区完掘状況写真撮影。

９月19日：調査区全体の航空写真撮影をカメラ搭載ラジコンヘリコプターで行った。

９月24日：Ａ区北東隅縦断土層断面図作成、器材搬出準備。

９月25日：器材搬出、プレハブ解体、午後現場引き渡しを行い、調査の全工程を終了した。

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構

１　柱穴様ピット（以下柱穴と記述）（付図）

調査区内において、2,947基の柱穴群を検出した。検出箇所は、Ａ・Ｄ・Ｅ区である。柱穴の平面形は、円形・楕円形・方形・長方形・不整形とさまざまであり、規模は径20cmから30cm、深さ30cmから40cmを測るものが多かった。

Ａ区の柱穴はⅡ層中およびⅢ層上面で検出した。Ⅱ層中で検出した柱穴（付図赤）は、Ⅲ層まで掘り込まれ、Ⅲ層上面で検出した柱穴（付図黒）は、Ⅳ層まで掘り込まれていた。覆土は、暗褐色を呈し、浮石を混入するものが多かった。柱痕を確認できるものは、掘立柱建物跡を構成する柱穴に若干ある程度で、全体的に見ると少なかった。

Ｄ・Ｅ区の柱穴は、基盤である砂礫層の凹みと思われる部分に堆積したシラス・暗褐色土上面で検出した。砂礫層上面で柱穴は認められなかった。覆土は、暗褐色を呈し、シラス・浮石をわずかに含むものが多かった。柱痕を確認できるものは、Ａ区に比較すると全体的に多く認められた。

なお、柱穴の構築時期は、全般に密集して分布していることや出土した陶磁器の製作年代が12世紀から近現代までと幅広いことから、長年にわたり同じ場所に何度も繰りかえし作られたものと思われる。

２　掘立柱建物跡（第８～10図・付図）

Ａ区で検出した５棟を図示した。このうちＳＢ01とＳＢ02が切り合い関係にあり、ＳＢ01の柱穴がＳＢ02構築時に壊されていることがわかった。このことと長軸方向から推測される５棟の建物跡の新旧関係は、ＳＢ01→02・03・04・05と想定される。なお、Ｅ区については、規模・形状が類似した柱穴を結んで建物を復元し、その推定線を付図に図示した。以下に、個々の建物跡の位置、規模、柱穴の大きさ、その他特徴的なことを記していく。

ＳＢ01掘立柱建物跡（第８図）

《位置》　ＭＥ46・47、ＭＦ46～48、ＭＧ46・47区に位置する。

《規模》　西側が調査区外に入り込んでいるため全容は不明であるが、現状では梁行２間×桁行４間を確認できた。長軸方向は、Ｎ－110°－Ｅである。

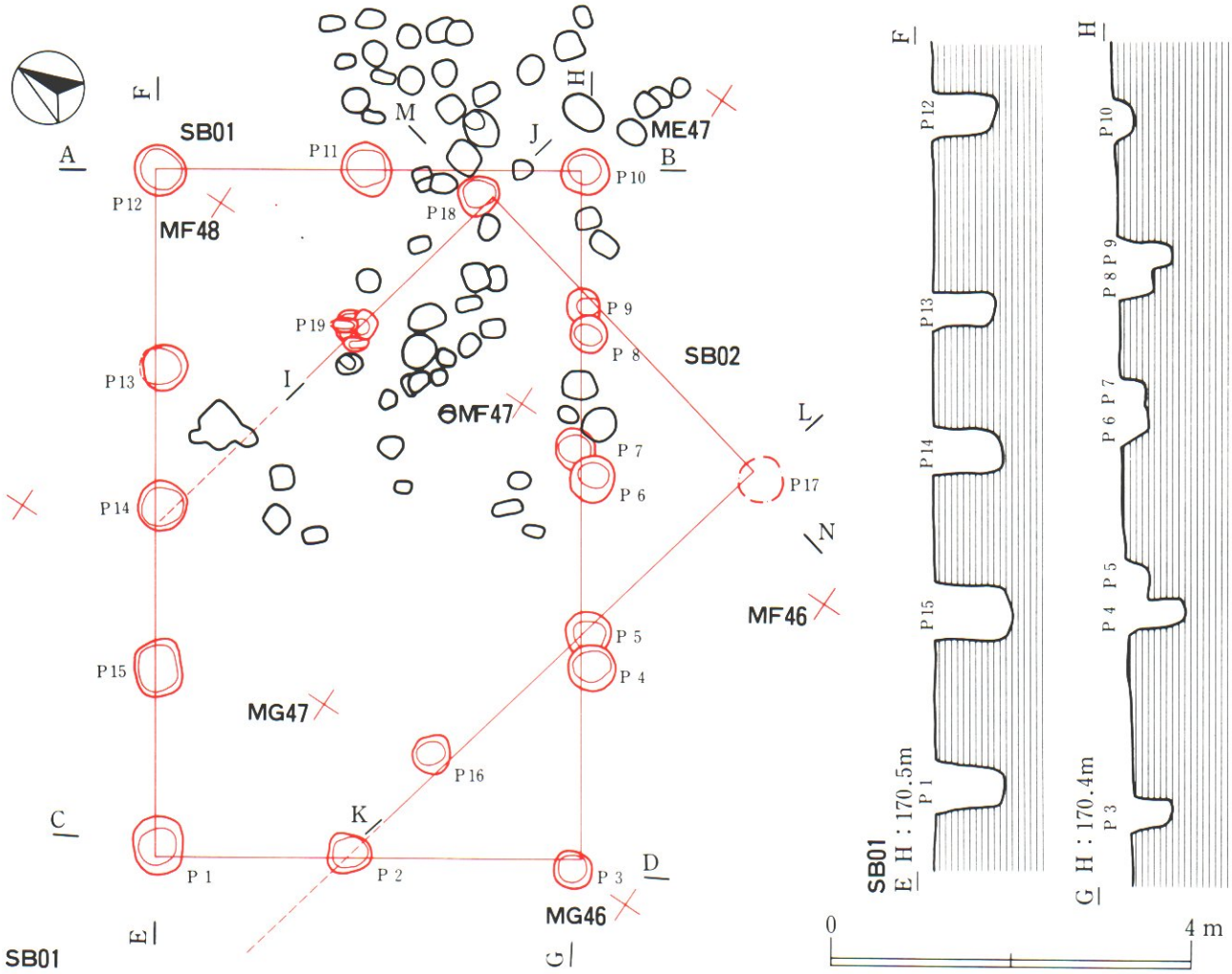
《柱穴》　直径32～64cmのほぼ円形であった。

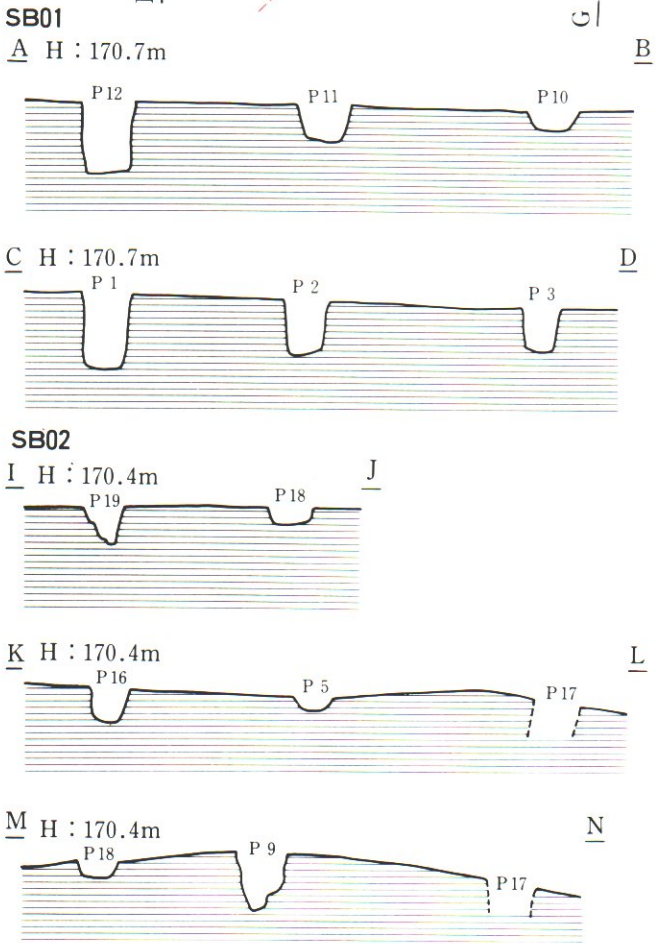
《その他》Ｐ２・14はＳＢ02の柱穴として利用されていた。南東側梁行の柱穴の一部が失われている。

ＳＢ02掘立柱建物跡（第８図）

《位置》　ＭＥ46・47、ＭＦ46・47、ＭＧ46・47区に位置する。

《規模》　梁行２間×桁行４間であり、長軸方向は、Ｎ－40°－Ｅである。





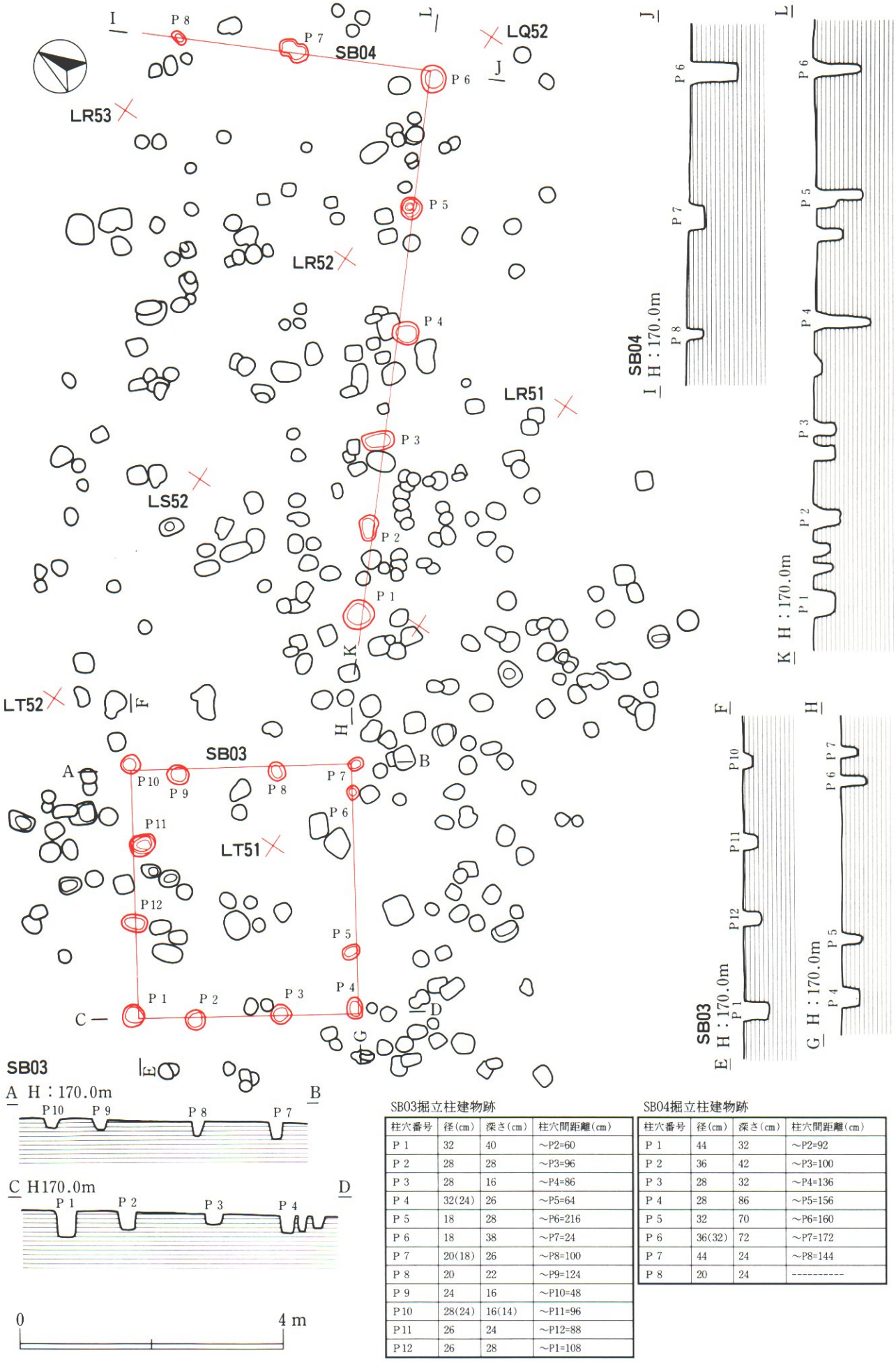
SB01掘立柱建物跡

柱穴番号	径(cm)	深さ(cm)	柱穴間距離(cm)
P 1	62(54)	80(78)	～P2=160
P 2	50	58	～P3=202
P 3	42(40)	46	～P4=184
P 4	48	62	P5と切り合い・P5が古い
P 5	44(36)	26(16)	～P6=124
P 6	44	34	P7と切り合い・P7が古い
P 7	32	28	～P8=88
P 8	40	42	P9と切り合い・P9が古い
P 9	32(28)	60	～P10=104
P 10	54(48)	22	～P11=188
P 11	56	40	～P12=172
P 12	56(54)	76(72)	～P13=164
P 13	46	70	～P14=100
P 14	54	80	～P15=120
P 15	64	88	～P1=132

SB02掘立柱建物跡

柱穴番号	径(cm)	深さ(cm)	柱穴間距離(cm)
P 2	50	58	～P16=104
P 16	42	36	～P5=180
P 5	44(36)	26(16)	～P17=208
P 17	50	--------	～P9=232
P 9	32(28)	60	～P18=132
P 18	48(44)	19	～P19=154
P 19	44	40	--------

第８図　ＳＢ01・02掘立柱建物跡と周辺ピット群



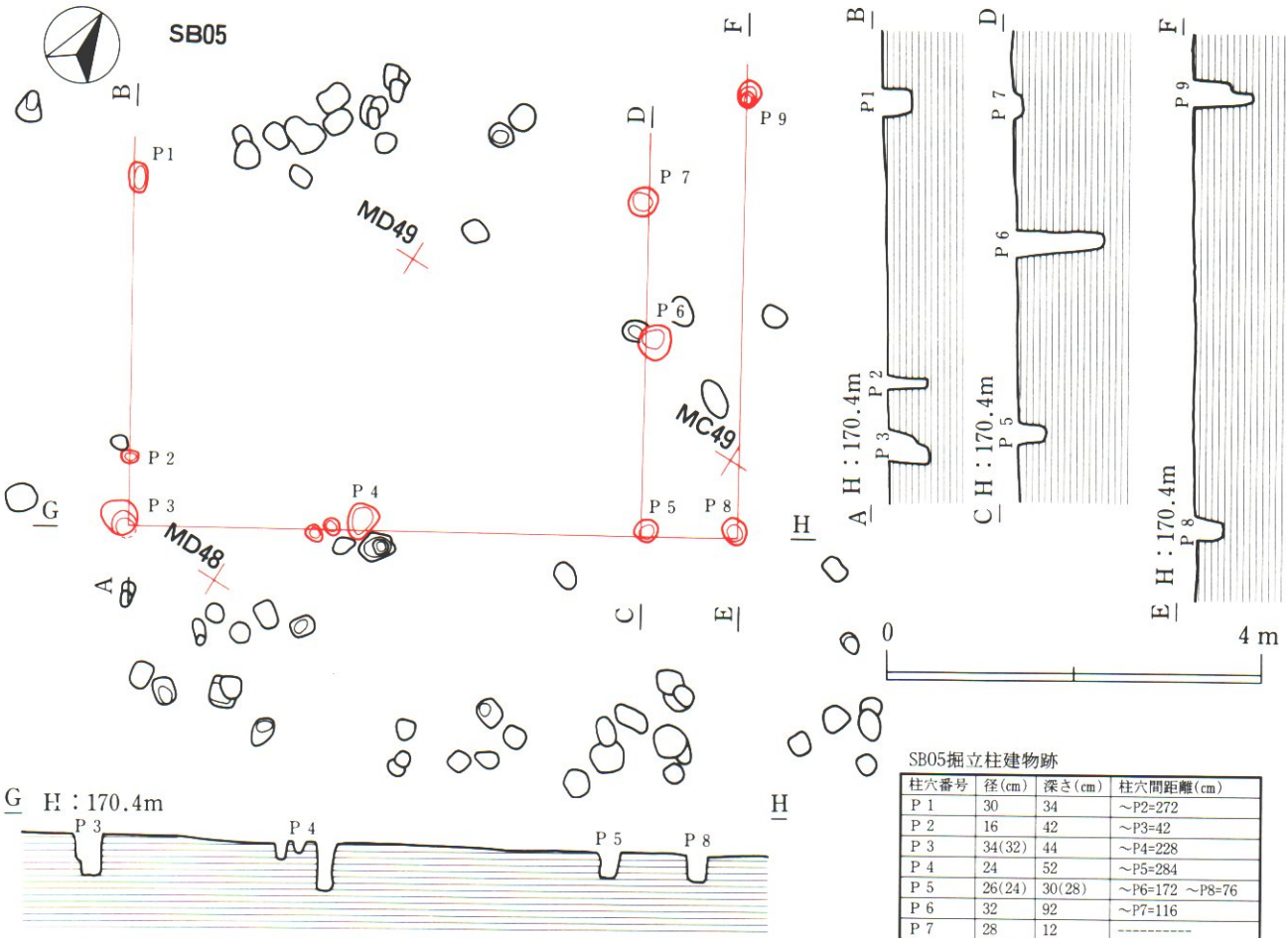
SB03掘立柱建物跡

柱穴番号	径(cm)	深さ(cm)	柱穴間距離(cm)
P 1	32	40	～P2=60
P 2	28	28	～P3=96
P 3	28	16	～P4=86
P 4	32(24)	26	～P5=64
P 5	18	28	～P6=216
P 6	18	38	～P7=24
P 7	20(18)	26	～P8=100
P 8	20	22	～P9=124
P 9	24	16	～P10=48
P10	28(24)	16(14)	～P11=96
P11	26	24	～P12=88
P12	26	28	～P1=108

SB04掘立柱建物跡

柱穴番号	径(cm)	深さ(cm)	柱穴間距離(cm)
P 1	44	32	～P2=92
P 2	36	42	～P3=100
P 3	28	32	～P4=136
P 4	28	86	～P5=156
P 5	32	70	～P6=160
P 6	36(32)	72	～P7=172
P 7	44	24	～P8=144
P 8	20	24	----------

第９図　ＳＢ03・04掘立柱建物跡と周辺ピット群



SB05掘立柱建物跡

柱穴番号	径(cm)	深さ(cm)	柱穴間距離(cm)
Ｐ１	30	34	～P2=272
Ｐ２	16	42	～P3=42
Ｐ３	34(32)	44	～P4=228
Ｐ４	24	52	～P5=284
Ｐ５	26(24)	30(28)	～P6=172　～P8=76
Ｐ６	32	92	～P7=116
Ｐ７	28	12	----------
Ｐ８	24	30(28)	～P9=432
Ｐ９	24	64	----------

第10図　ＳＢ05掘立柱建物跡と周辺ピット群

《柱穴》　直径32～50cmのほぼ円形である。

《その他》桁行は、ＳＢ01の主軸方向より約70°西に偏していた。

ＳＢ03掘立柱建物跡（第９図）

《位置》　ＬＳ50・51、ＬＴ50・51区に位置する。

《規模》　梁行、桁行とも３間×３間であり、長軸方向は、Ｎ－70°－Ｅである。

《柱穴》　直径18～32cm、深さ16～40cmの円形・楕円形である。

《その他》Ｐ４－Ｐ５距離が64cm、Ｐ６－Ｐ７距離が24cmと、他の柱穴間距離と比較するとその距離が短くなっていた。

ＳＢ04掘立柱建物跡（第９図）

《位置》　ＬＱ50・51、ＬＲ51・52、ＬＳ51区に位置する。

《規模》　北側が調査区外に入り込んでいるため全容は不明であるが、現状では梁行２間×桁行３間を確認できた。長軸方向は、Ｎ－60°－Ｅである。

《柱穴》　直径20～44cm、深さ24～86cmの円形・楕円形である。

《その他》Ｐ５では炭化した柱材が検出された。材の直径は11cmであった。

ＳＢ05掘立柱建物跡（第10図）

《位置》　ＭＢ48、ＭＣ48・49、ＭＤ47・48区に位置する。

《規模》　北側が調査区外に入り込んでいるため全容は不明であるが、現状では梁行２間×桁行２間を確認できた。北東側の梁行から約68cm離れた地点に、庇と思われる張り出し部が認められた。長軸方向は、Ｎ－60°－Ｅであった。

《柱穴》　直径16～34cm、深さ12～92cmの円形・楕円形であった。張り出し部の柱穴は、直径24cm、深さ30～64cmの円形であった。

《その他》Ｐ２、Ｐ４、Ｐ６には添柱跡と思われる小柱穴があった。

３　焼土遺構（第11図・図版８）

単なる焼土の円～楕円形の堆積と認識していた。確認作業において焼土のあり方が、暗褐色土を囲むようにほぼドーナツ状を呈していることがわかり、かまど遺構の燃焼部であることが判明した。かまど遺構の構造上の特徴は、平坦な生活面を掘削し、燃焼部、焚口部、煙道部を半地下式に造り出すものである。本遺跡のかまど遺構は、焼土遺構として周囲の掘り下げを行ったことから、焚口部、煙道部のプランを確認することができなかった。以下に、個々の遺構の位置、法量、平面形、方向、その他の特徴的なことについて記していく。

ＳＮ06焼土遺構

《位置》　ＭＡ50・ＭＢ50区に位置する。

《法量》　長径46cm、短径38cmを測る。

《平面形》　北東から南西に長い楕円形で、長軸方向は、Ｎ－　20°－Ｅであった。

《その他》　遺構北側に掌大の礫があり、一部火熱の影響により赤変していた。礫の北側には径24cmの円形の掘り込みがあった。

ＳＮ07焼土遺構

《位置》　ＭＢ50区に位置する。

《規模》　長径64cm、短径52cmを測る。

《平面形》　北東から南西に長い隅丸長方形で、長軸方向は、Ｎ－　10°－Ｅであった。

ＳＮ08焼土遺構

《位置》　ＬＳ51区に位置する。

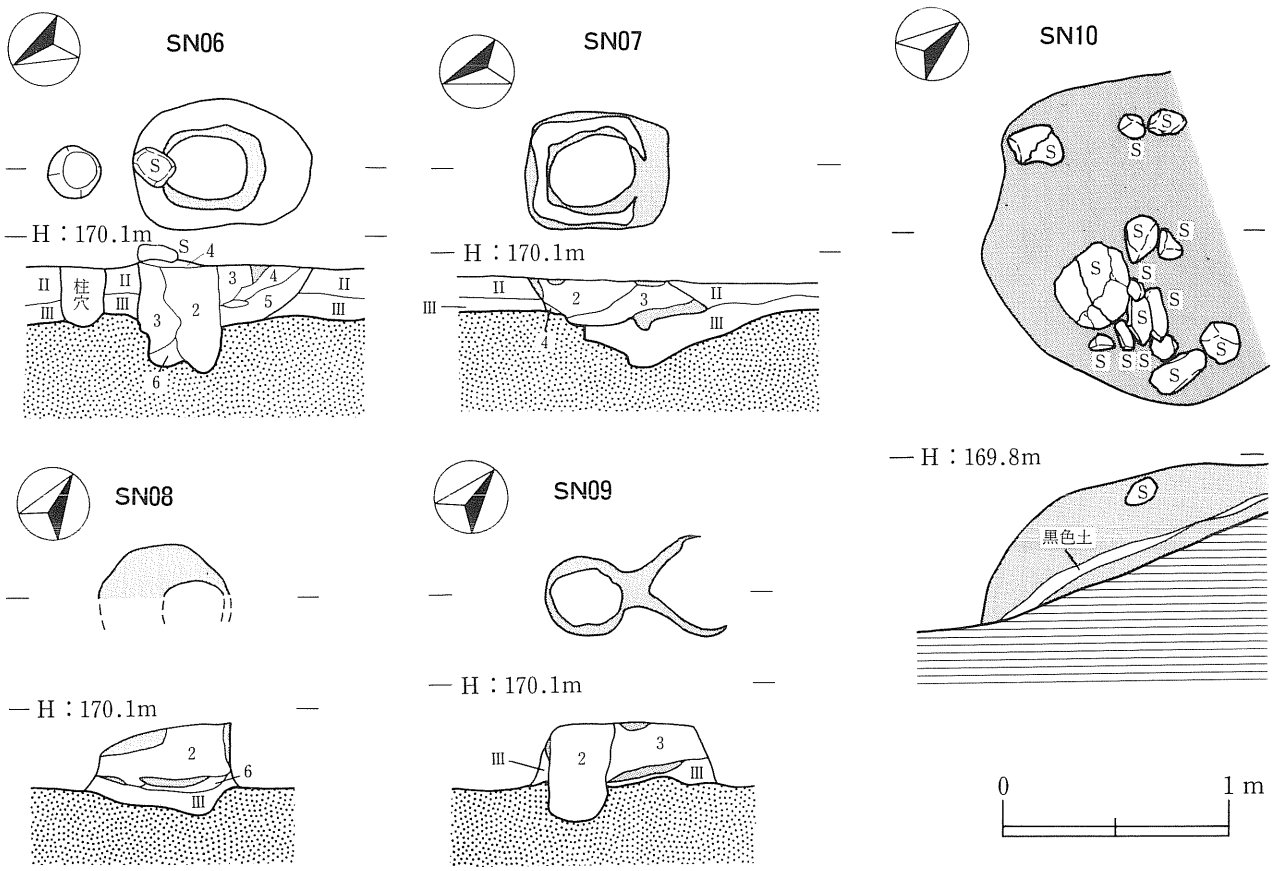
《規模》　長径58cm、短径は掘りすぎのため不明である。

《平面形》　ほぼ円形と思われ、長軸方向は、Ｎ－40°－Ｅであった。

ＳＮ09号焼土遺構

《位置》　ＬＱ51区に位置する。

《規模》　長径76cm、短径42cmを測る。



１層（スクリーントーン層）赤褐色土（5YR4/8）硬く締まっている。砂～シルト質土。焼土層。　**２層**褐色土（10YR4/4）非常に柔らかくボロボロしている。焼土・浮石微粒子が若干混入している。砂～シルト質土。　**３層**褐色土（7.5YR4/3）非常に柔らかくボロボロしている。焼土ブロック含む。全体に上面の火熱の影響を受け赤っぽい。砂～シルト質土。　**４層**褐色土（7.5YR4/3）基本的に３層と同じ。炭化物を多く含んでいる。砂～シルト質土。　**５層**にぶい黄褐色土（10YR4/3）柔らかい。焼土・炭化物は認められない。右側に６層土が混入している。浮石粒子が若干混入している。砂～シルト質土。北東隅土層のⅡ層に相当する。　**６層**暗褐色土（10YR3/3）やや硬く締まっている。シラスブロックが非常に密に混入した層である。砂～シルト質土。

第11図　ＳＮ06・07・08・09・10焼土遺構

《平面形》　不整であり、長軸方向は、Ｎ－30°－Ｅであった。

《その他》　焼土中より縄文土器片（第16図110）が１点出土した。

ＳＮ10焼土遺構

《位置》　ＬＬ57区に位置する。

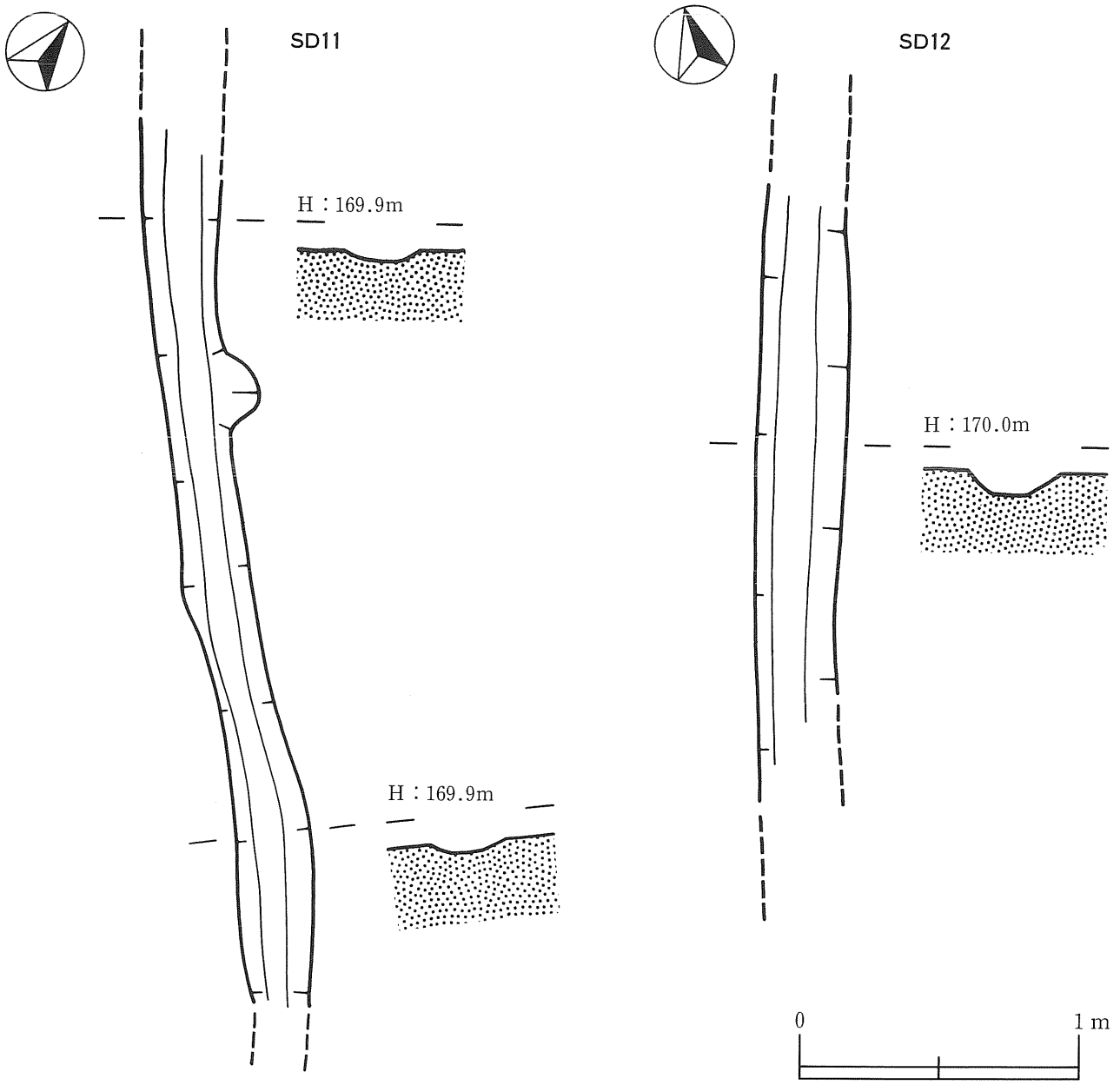
《規模》　北側が調査区外に広がっており全容は不明である。

《平面形》不整形と思われる。

《その他》径３cm前後を測る焼土ブロックが厚く堆積し、この中には大小の礫が混在し、黒褐色土が筋状に入り込んでいた。

４　溝跡（第12図）

Ⅲ層上面で２条検出し、いずれもわずかな掘り込みである。柱穴や焼土遺構との関連性については遺構の全容が明らかでないことから判然としない。



第12図　ＳＤ11・12溝跡

ＳＤ11溝跡

《位置》　ＬＮ51、ＬＭ50区に位置する。

《規模》　幅20cm、深さ5cm、現存する長さ380cmを測り、北北東－南南西に延びる。

ＳＤ12溝跡

《位置》　ＬＲ50・51区に位置する。

《規模》　幅18cm、深さ4cmを測り、北西－南東に延びる。

第２節　出土遺物

１　縄文時代の遺物

（１）土器（第13～18図・図版15・16）

出土した土器は、前期・中期・後期・晩期のものであった。

出土地区は、第16図76がＤ区からの出土であるほかは、Ａ区から出土したものである。出土した土器の量は、コンテナ（規格54cm×34cm×9.5cm）で13箱であった。

なお、出土した土器は、時期別に第Ⅰ～Ⅳ群に分け、時期を特定できなかったものを第Ⅴ群として記載した。

第Ⅰ群土器（第13図・14図・図版16）

縄文時代前期の土器群である。胎土中には繊維が含まれている。

１は口縁部にＲ撚糸文が施されている。２・３・６・７は体部から底部付近にＲ撚糸文が、５は体部にＬ撚糸文が施されている。４はＲ原体の網目状撚糸文が施されている。８は口頸部に指頭圧痕が施された隆帯が巡り、体部にはＲ撚糸文が施されている。９～13は頸部に刺突の施された隆帯が巡り、口縁部にはＲＬ原体による側面圧痕文、体部にはＬＲ・ＲＬの結束羽状縄文が施されている。14はＲＬ原体による側面圧痕文が横位・縦位に施されている。15はＬＲ・ＲＬの原体による側面圧痕文と単軸絡条体の側面圧痕文が交互に施されている。16～18は口縁部にＬＲ・ＲＬの結束羽状縄文が施されている。19・39はＲＬ縄文が施されている。20・23は口縁部に単軸絡条体の側面圧痕文が施されている。21・22は同一個体であり、口唇に縦位、口縁部に横位・斜位の単軸絡条体の側面圧痕文が施され、頸部に竹管状工具による刺突文が施されている。24～29は体部に羽状縄文が、30～34は体部から底部付近に木目状撚糸文が施されている。35・36はＬＲ縄文が施されている。37・38は多軸絡条体と思われる縄文が施されている。40は上下２段にわたり平行沈線文・波状沈線文が施されている。

第Ⅱ群土器（第14図・図版15・16）

縄文時代中期の土器群である。

41は沈線により縄文充塡部と無文部が画されている。42～44は地文としてのＬＲ縄文が施された後、沈線文が施されている。45～48は楕円あるいは垂下する沈線文の間にＲＬ縄文が充塡されている。49～53は縄文と沈線文が施されている。54は指頭圧痕が施された隆帯が巡り、口縁部にＬＲ原体の側面圧痕文が施されている。55・56は同一個体であり、口縁部にはＲＬ原体の側面圧痕文が施され、胴部には縄文と沈線文が施されている。57・58は「コ」字状の隆帯が、横位に巡らされた刺突と組み合わされて、区画帯を構成している。また、57は隆帯の中央部に穿孔が施されている。さらに隆帯の右側には棒状工具による刺突が施された径７mm程の粘土粒が貼付されている。59～61は口唇に無文帯を作り、体部にはＲＬ縄文が施されている。62は波状口縁の突起部とみられ、ＲＬ縄文が施された粘土紐が貼り付けられている。63・64は同一個体であり、口縁部が「く」字状に外反し、体部にはＬＲ縄文が施されている。65～67はＬＲ複節縄文が施されている。68はＬＲ縄文が施されている。69・70はＲ原体の撚糸文が施されている。また70は波状口縁で、口唇が平坦に作り出されている。

第Ⅲ群土器（第15・16図・図版15・16）

縄文時代後期の土器群である。

71・72は同一個体であり、ＲＬ縄文が施された隆帯が巡り、体部にはＬＲ縄文が施されている。73・74は同一個体で、ＬＲ縄文の側面圧痕文が施されている。75は「工」字状に貼付された隆帯の縁辺部に沈線文が施されている。76は垂下する隆帯が貼付されている。77・78は同一個体で、指頭圧痕が施された隆帯が巡り、口縁部・体部には沈線文が横位に施されている。体部の沈線文は、ＬＲ縄文が施文された後施されている。79は指頭圧痕が施された隆帯が２本巡る。80は沈線文の間にＲＬ縄文が充塡されている。81は縄文施文後、沈線文が施されている。82・84は沈線文が施されている。83は隆・沈線文が横位に巡り、隆帯部にＬＲ縄文が施されている。85は折り返して作り出された口縁部にＲ撚糸文が施され、体部には沈線文が施されている。86は地文として縄文が施文された後、沈線文が施されている。87・89は沈線文の間にＬＲ縄文が充塡されている。88は地文としてＬＲ縄文が施文された後、沈線文が施されている。90・91は同一個体であり、体部上半に隆帯が２条巡り、口縁部・体部には沈線文が施されている。92・93・98・99は体部上半に平行沈線文が施されている。94は体部下半に隆・沈線文が施されている。95～97は口縁部に隆・沈線文が施されている。100は垂下する平行沈線文の間に縄文が充塡され、無文部に棒状工具による刺突のある粘土粒が貼付されている。

第Ⅳ群土器（第16図・図版15）

縄文時代晩期の土器群である。

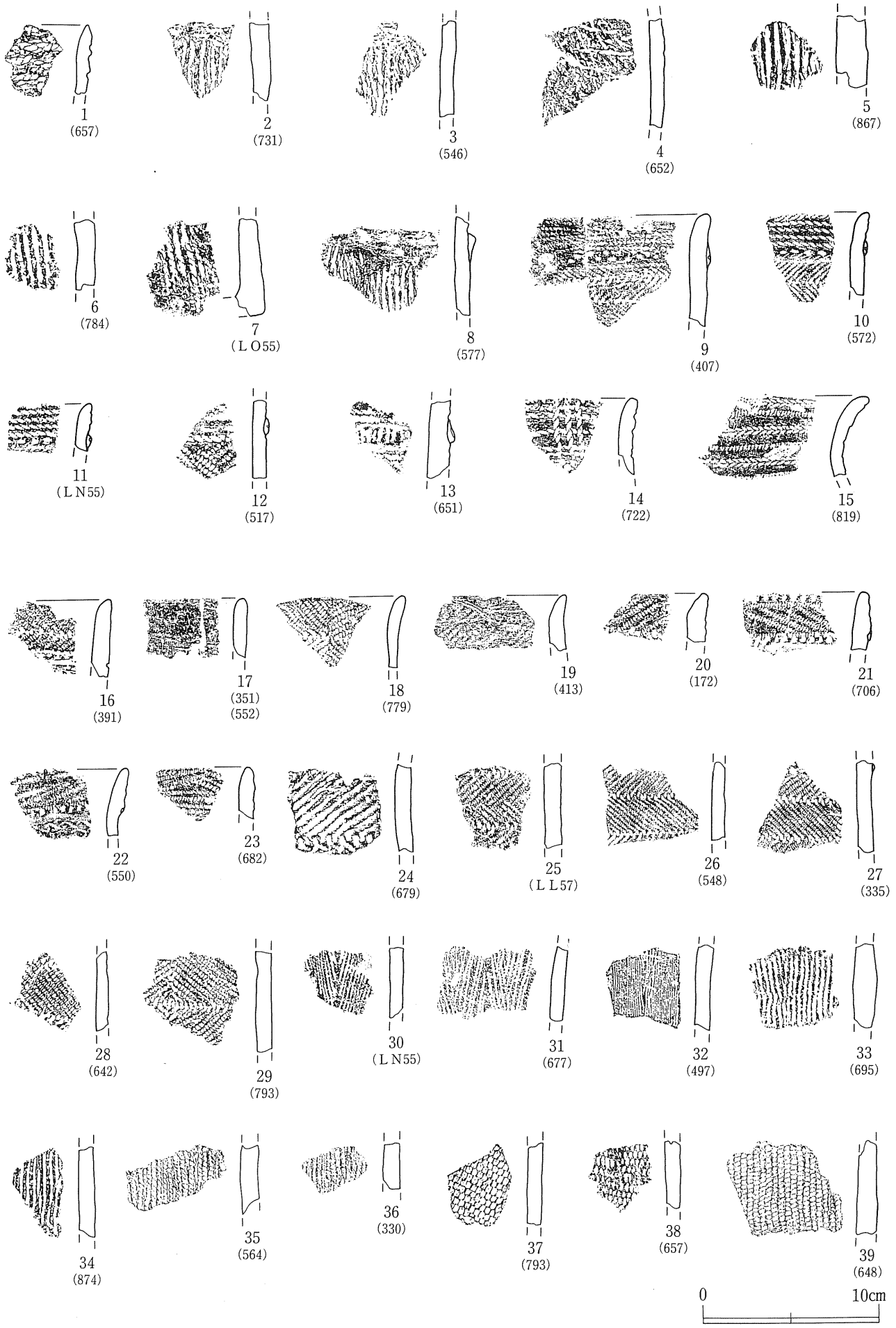
101は口縁部に「八」字状の突起がつけられた土器である。口唇は平坦に作り出され、外反する口縁部が縄文帯によって縁どられている。突起の下には三叉状の刻みがあり、体部には沈線で画された縄文帯が巡る。102は口縁部に付されたＢ突起部分であり、口唇には刻目が施されている。103は壺形土器の体部、104は同じく頸部付近の破片である。105は粗製深鉢形土器で、体部にはＬＲ縄文が施され、口縁部には貫通孔が１箇所穿たれている。

第Ⅴ群土器（第16～18図）

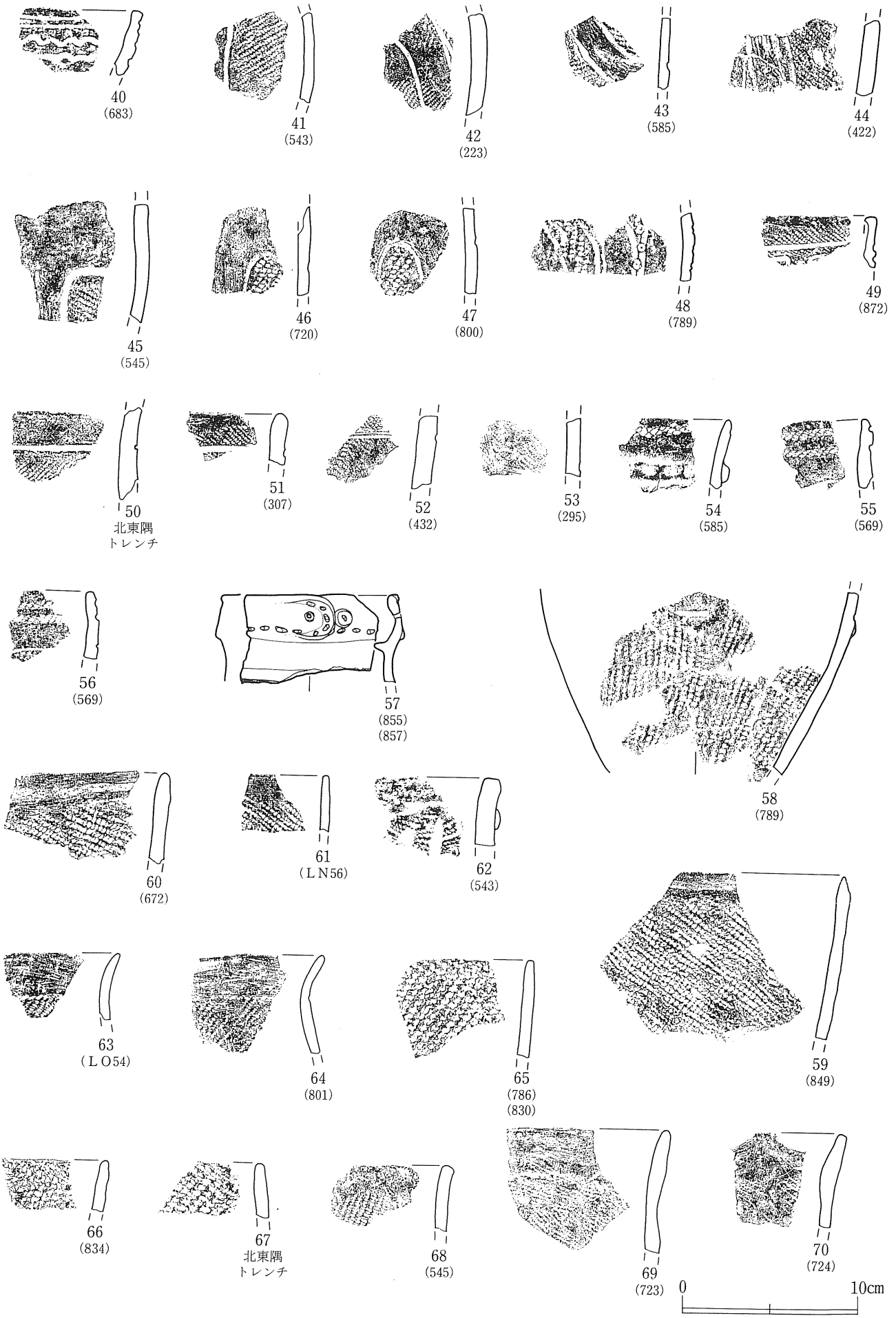
第Ⅰ～Ⅳ群以外の土器群である。

106～113は網目状撚糸文が施されている。106は口縁部に穿孔が施されている。115・117～119・123・124・126・129・130・138・142～146・148はＬＲ縄文が施されている。121・122・125・127・128・131・134～137・139～141はＲＬ縄文が施されている。114・116・147は撚糸文が施されている。132～134は同一個体であり、複節縄文が施されている。119・120・123は口唇が平坦に作り出されている。

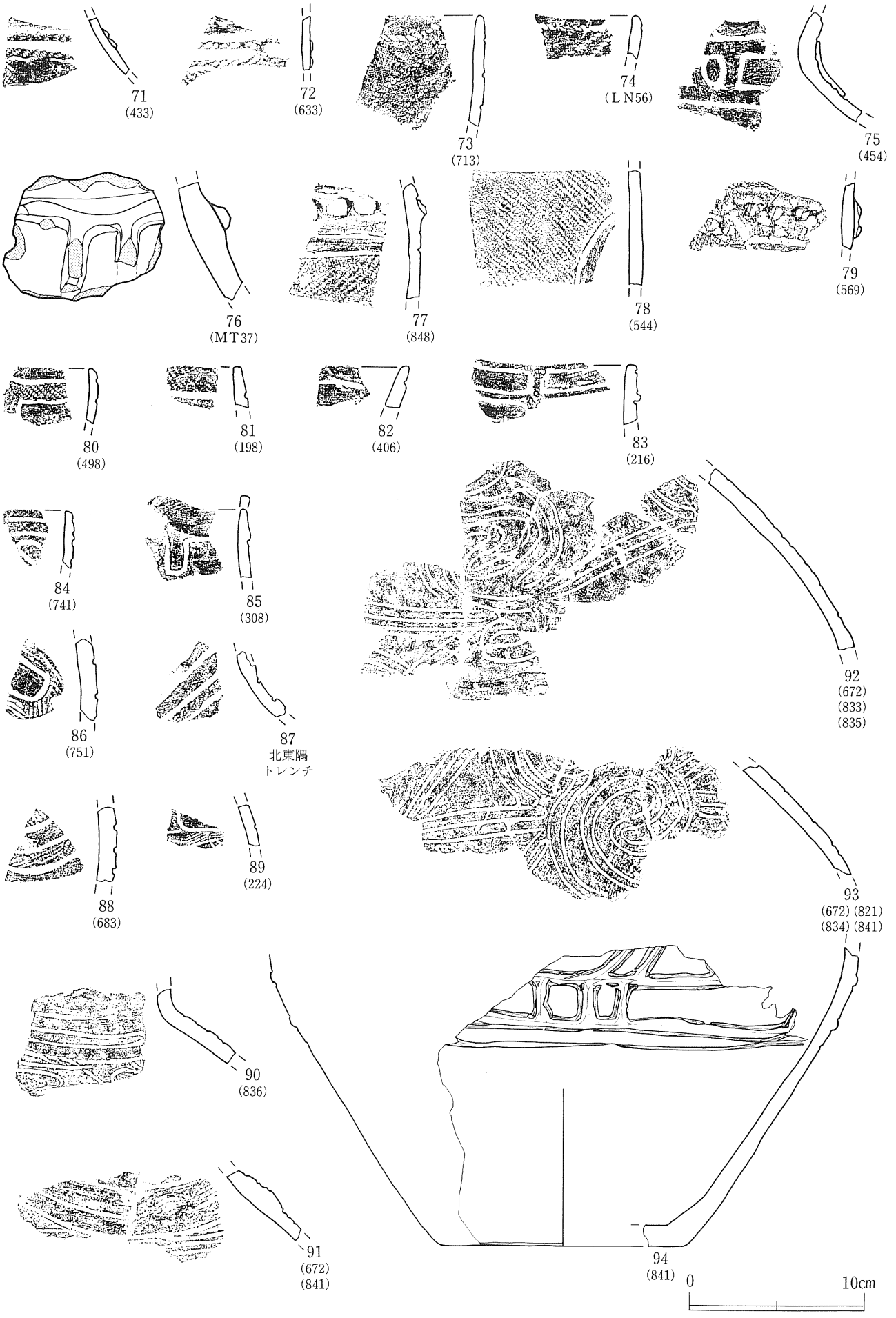
144～149は底部資料である。本遺跡から出土した底部資料は全般にやや上げ底ぎみのものが多い。また、破片から図上復元した底径は大きいもので約11cm、小さいもので約７cmである。底面には、ナデ等の調整痕が見られる。


1
(657)
2
(731)
3
(546)
4
(652)
5
(867)
6
(784)
7
(ＬＯ55)
8
(577)
9
(407)
10
(572)
11
(ＬＮ55)
12
(517)
13
(651)
14
(722)
15
(819)
16
(391)
17
(351)
(552)
18
(779)
19
(413)
20
(172)
21
(706)
22
(550)
23
(682)
24
(679)
25
(ＬＬ57)
26
(548)
27
(335)
28
(642)
29
(793)
30
(ＬＮ55)
31
(677)
32
(497)
33
(695)
34
(874)
35
(564)
36
(330)
37
(793)
38
(657)
39
(648)
0
10cm

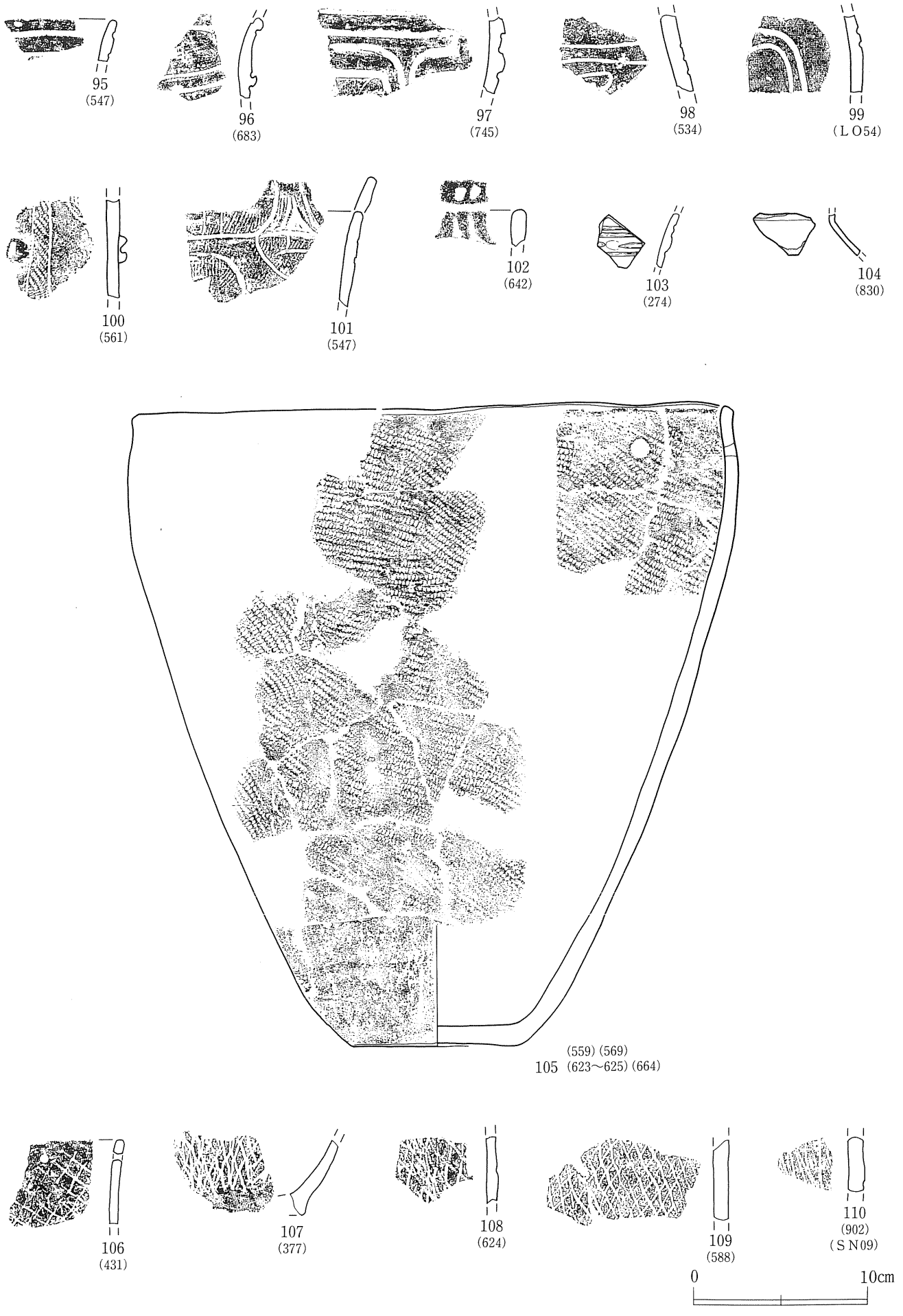
第13図　縄文土器(1)


40
(683)
41
(543)
42
(223)
43
(585)
44
(422)
45
(545)
46
(720)
47
(800)
48
(789)
49
(872)
50
北東隅
トレンチ
51
(307)
52
(432)
53
(295)
54
(585)
55
(569)
56
(569)
57
(855)
(857)
58
(789)
60
(672)
61
(ＬＮ56)
62
(543)
63
(ＬＯ54)
64
(801)
65
(786)
(830)
59
(849)
66
(834)
67
北東隅
トレンチ
68
(545)
69
(723)
70
(724)
0
10cm

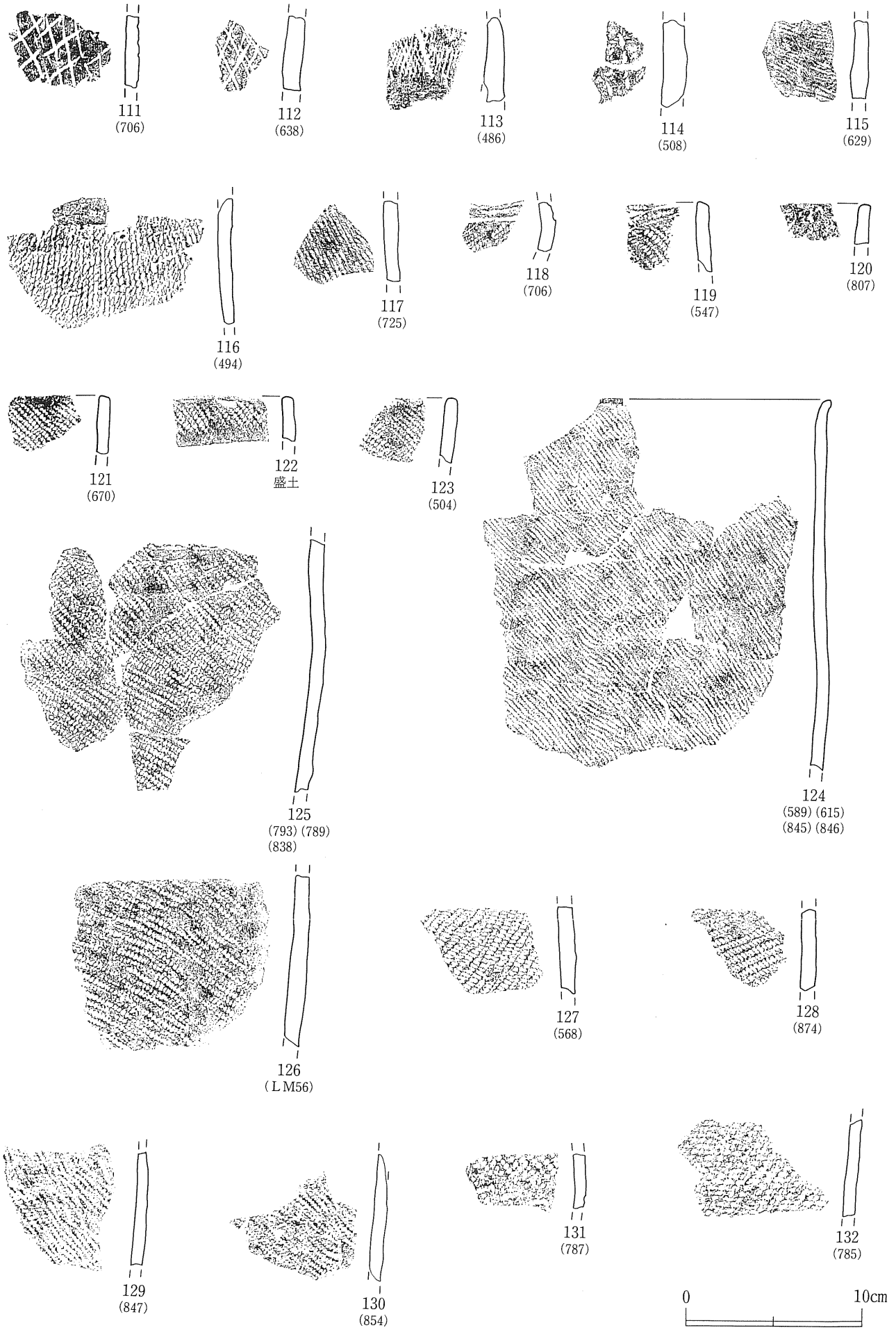
第14図　縄文土器(2)


71
(433)
72
(633)
73
(713)
74
(LN56)
75
(454)
76
(MT37)
77
(848)
78
(544)
79
(569)
80
(498)
81
(198)
82
(406)
83
(216)
84
(741)
85
(308)
86
(751)
87
北東隅
トレンチ
88
(683)
89
(224)
90
(836)
91
(672)
(841)
92
(672)
(833)
(835)
93
(672) (821)
(834) (841)
94
(841)
0
10cm

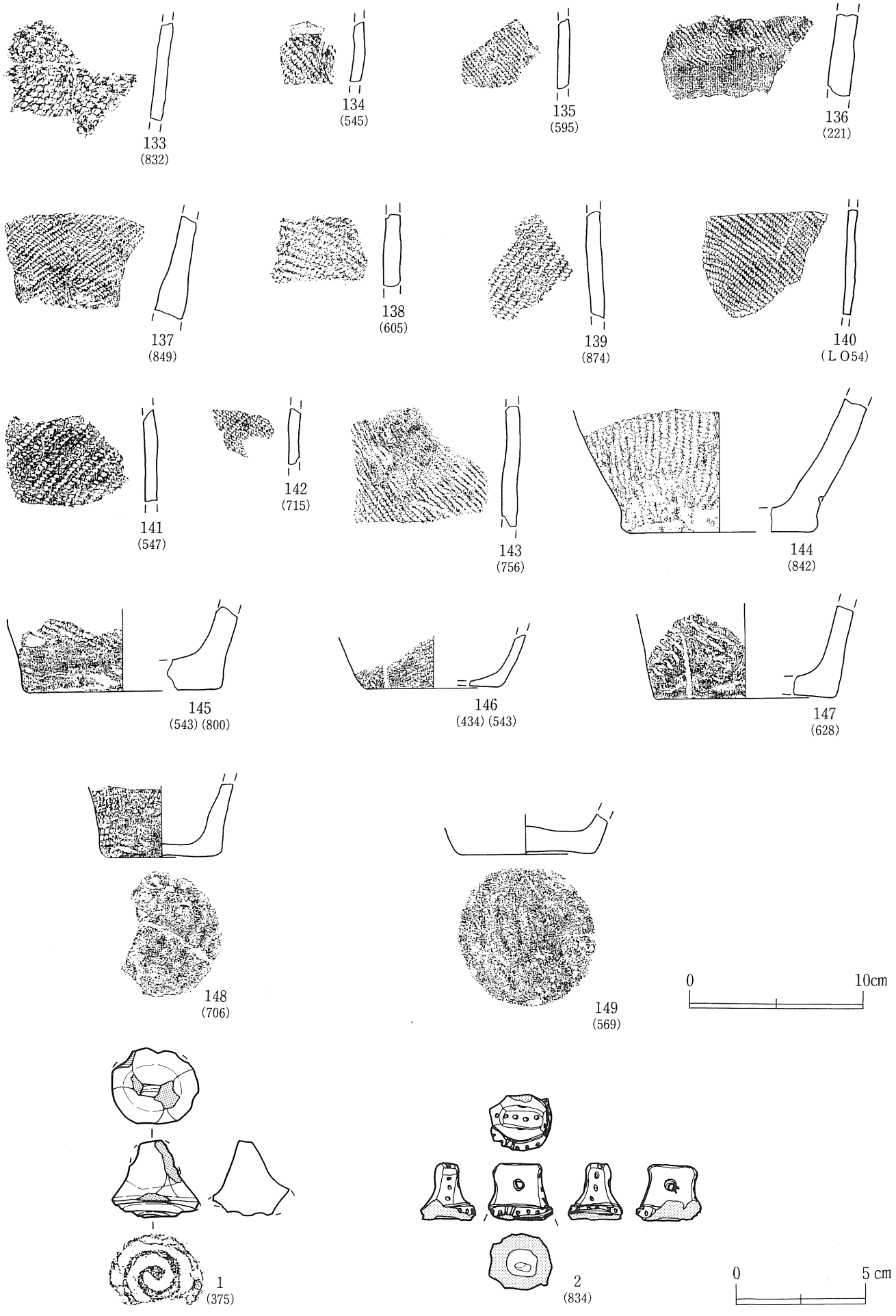
第15図　縄文土器(3)


95
(547)
96
(683)
97
(745)
98
(534)
99
(ＬＯ54)
100
(561)
101
(547)
102
(642)
103
(274)
104
(830)
105
(559) (569)
(623～625) (664)
106
(431)
107
(377)
108
(624)
109
(588)
110
(902)
(ＳＮ09)
0
10cm

第16図　縄文土器(4)


111
(706)
112
(638)
113
(486)
114
(508)
115
(629)
116
(494)
117
(725)
118
(706)
119
(547)
120
(807)
121
(670)
122
盛土
123
(504)
124
(589) (615)
(845) (846)
125
(793) (789)
(838)
126
(LM56)
127
(568)
128
(874)
129
(847)
130
(854)
131
(787)
132
(785)
0
10cm

第17図　縄文土器(5)



第18図　縄文土器(6)・土製品

（２）土製品（第18図）

出土した土製品はスタンプ形土製品１点と鐸形土製品１点である。

１はスタンプ形土製品である。ほぼ完形で、断面形が分銅形を呈し、下面に棒状工具による渦巻文が施されている。２は鐸形土製品の紐部である。穿孔・刺突が認められる。

（３）石器（第19・20図）

出土した石器はコンテナ（54cm×34cm×9.5cm）で約２箱分出土した。このうち、定形的と考えられる石器を選出し、次の器種に分類した。従って、いわゆる不定形石器や二次加工・微小剥離痕をもつ剥片などは選別時に除外してある。出土地点はＡ区北東隅からがほとんどである。器種は、石錐、箆状石器、スクレイパー、石鏃、石匙、三脚状石器、石錘、磨製石斧、凹石がある。

石鏃(1)：１点出土した。両面ともていねいな押圧剥離が施されている。鏃身が二等辺三角形を呈する凸基有茎鏃で、先端部と茎部を欠損している。石質は頁岩である。

石錐(2)：１点出土した。横長の剥片を用い、その一端に錐部を作出し、錐部の断面形はほぼ三角形を呈している。また、錐の先端部は欠損している。石質は頁岩である。

箆状石器(3)：１点出土した。背面は二次加工されているが、主要剥離面は両側縁にのみ剥離が加えられている。最大幅は刃部よりやや上方にある。石質は頁岩である。

スクレイパー(４～７)：４点出土した。４・６・７は縦長剥片を用い、その側縁に刃部を作出している。また、５は両面に先行剥離面を残している。石質は頁岩である。

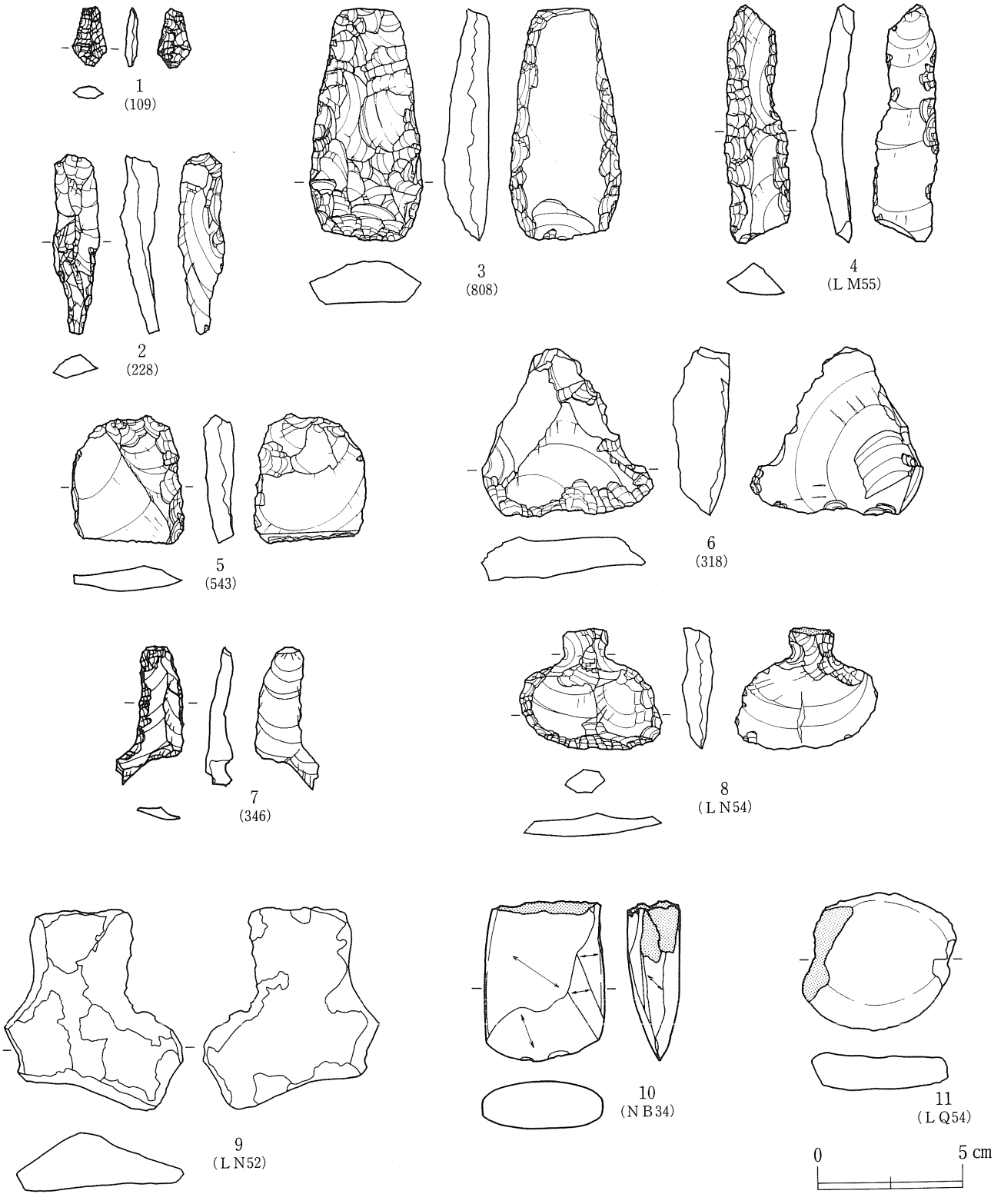
石匙(8)：１点出土した。扇形の剥片を用い、バルブ部分につまみを作出している。刃部はつまみに対応する側辺に作られている。石質は頁岩である。

三脚状石器(9)：１点出土した。三方向に張り出しをもつものである。片面は二次加工されているが、もう一方の面は側縁にのみ剥離が加えられ、大きく先行剥離面を残している。形状は三脚石器と同様であるが、裏面の加工法に相違が認められることから、ここでは便宜上三脚状石器として扱った。

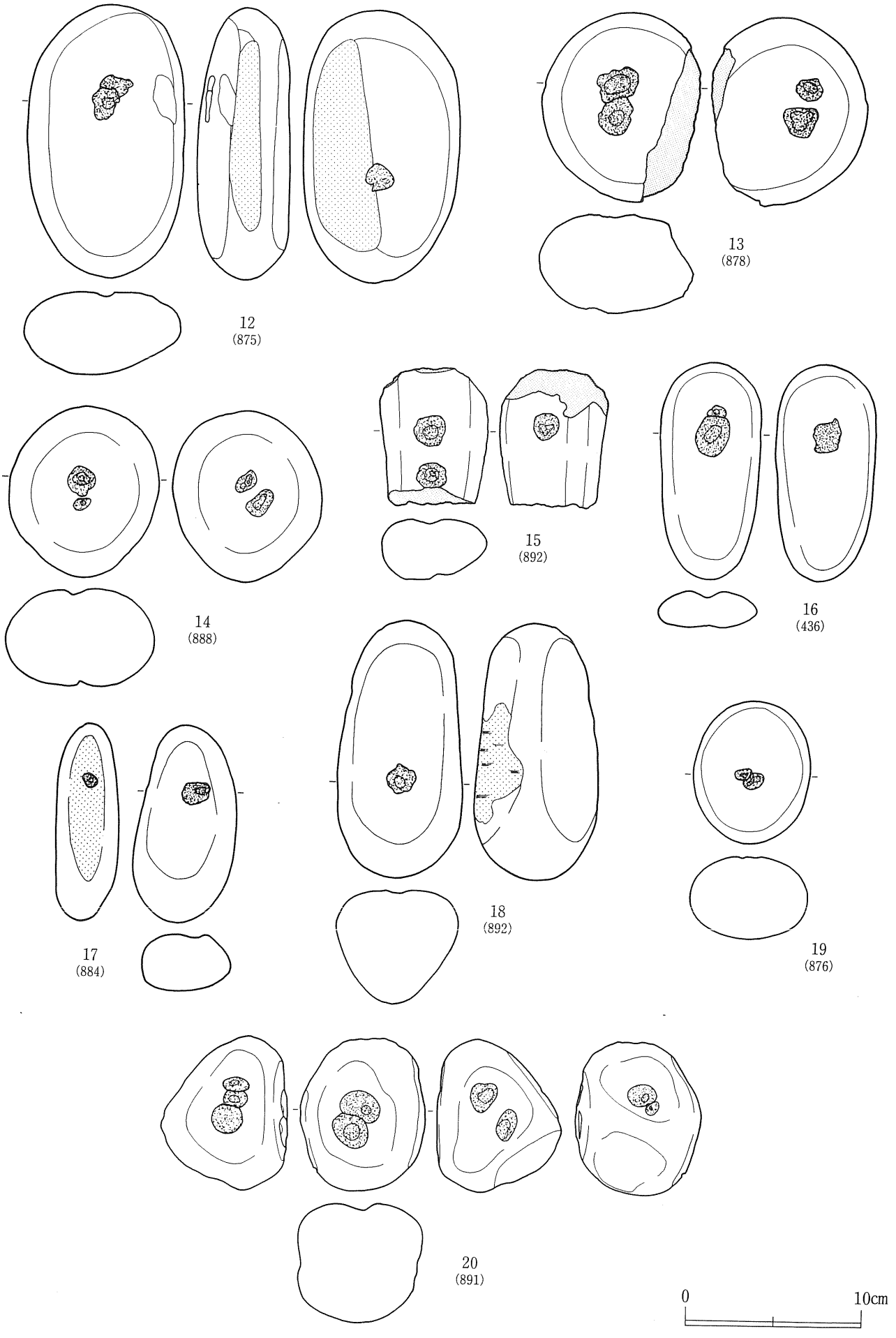
磨製石斧(10)：１点出土した。全面研磨されており、断面が隅丸方形を呈する。石質は緑色凝灰岩である。

石錘(11)：１点出土した。偏平な礫を用いて、その一側縁がえぐられている。片側の側縁部が欠損している。石質は白色凝灰岩である。

凹石(12～20)：９点出土した。平面形が楕円形を呈する礫に、１～複数の凹みをもつものである。12～17は２面に、18・19は片面に、20は全面に凹がある。また、12・17・18は擦面も認められる。石質は全て安山岩である。


1
(109)
2
(228)
3
(808)
4
(L M55)
5
(543)
6
(318)
7
(346)
8
(L N54)
9
(L N52)
10
(N B34)
11
(L Q54)
0
5 cm

第19図　石器(1)


12
(875)
13
(878)
14
(888)
15
(892)
16
(436)
17
(884)
18
(892)
19
(876)
20
(891)
0
10cm

第20図　石器(2)

挿図番号	番号	出土地区	出土地点	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
19	1	LR 52	109	石鏃	(20.5)	12	4	(1)
19	2	LL 56	228	石錐	(63.5)	16.5	13.5	(9)
19	3	LL 56	808	石箆	80	39	16	52
19	4	LM 55	Ⅱ層上面	スクレイパー	82	23	15	16
19	5	LM 57	543	スクレイパー	44.5	38.5	10.5	20
19	6	LL 55	318	スクレイパー	58	60	20	55
19	7	LS 52	346	スクレイパー	48	24	10	5
19	8	LN 54	Ⅰ層	石匙	42	49	10.5	17
19	9	LN 52	Ⅰ層	三脚状石器	70	61	20	61
19	10	NB 34		磨製石斧	(55.5)	42	(19.5)	(71)
19	11	LQ 54	Ⅰ層	石錘	48	54	14	45
20	12	LM 56	875	凹石	155	90	53	1044
20	13	LM 56	878	凹石	(108)	90	52	(683)
20	14	LL 56	888	凹石	98	85	56	926
20	15	LM 56	892	凹石	(78)	61	35	(212)
20	16	LM 57	436	凹石	124	56	22	232
20	17	LL 56	884	凹石	112	60	33	324
20	18	LM 56	892	凹石	146	71	64	794
20	19	LM 56	876	凹石	82	67.5	47	361
20	20	LM 56	891	凹石	87	72	72	521

第２表　石器観察表　　(　)は残存値

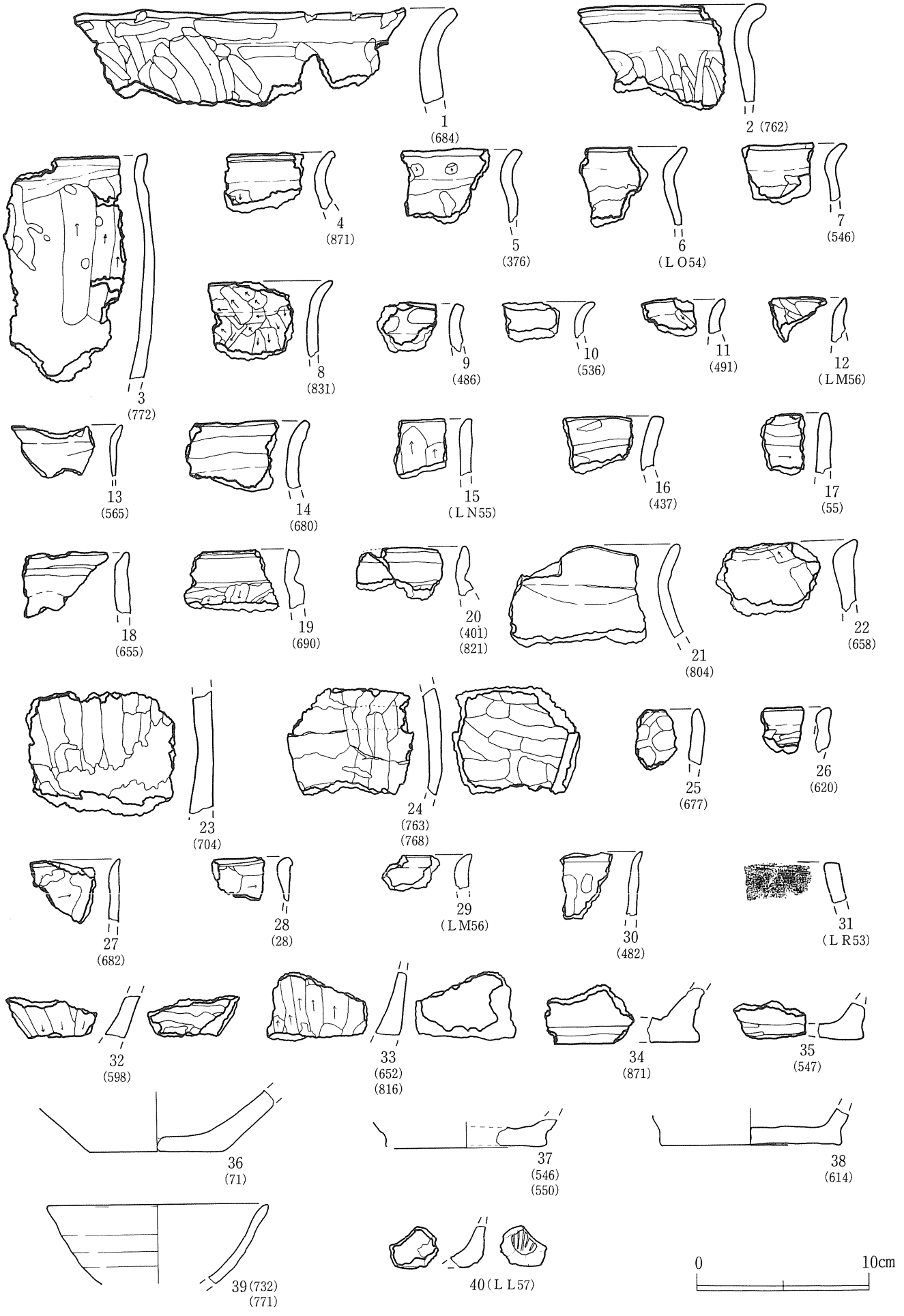
2　平安時代の遺物

（1）土師器（第21図・図版17）

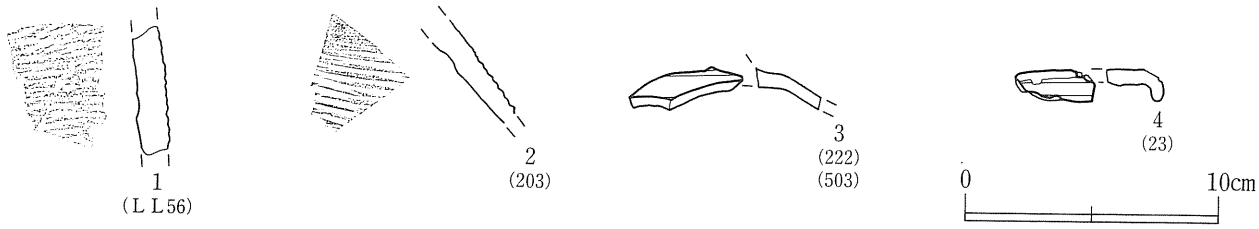
出土した土師器は、坏を除くとほとんどが甕形土器である。須恵器とほぼ同じ箇所から出土した。接合作業の結果でも、口縁部から底部までの器形がわかるものは１点もなかった。坏以外は非ロクロ成形で、口縁部はユビナデ、体部はケズリ・ナデ・ミガキといった調整がみられ、器内面はナデ、あるいは薄くハケ目の残るものが多い。底部には木の葉の痕を残すようなものがある。胎土は全般的に精選されたものであり、比較的大きな砂粒を含むものが多く認められる。焼成は概して良好である。

以下、口縁部と底部を中心に図示していくこととする。なお、口縁部は平口縁になるものがなく、多少なりとも波打っているため、断面形は実測する箇所によって全く違ったものに見える場合も少なくない。

１・４・８・10・11・14はやや膨らみをもつ体部から頸部でややすぼまり、口縁部が外反するものである。口縁部にはヘラナデとみられる調整が施されている。端部は丸く作り出されている。２・５・７は膨らみをもつ体部から頸部でやや強くすぼまり、口縁部がやや強く外反するものである。２は体部上半まで縦方向にヘラナデ調整、口縁部には横方向のユビナデ調整が施されている。３・９・16は口唇が平らに作り出されているものである。３はわずかに膨らみをもつ体部から頸部ですぼまり、口縁部がほぼ直に立ち上がる。体部には縦方向のヘラナデ調整、口縁部には横方向のユビナデ調整が施されている。６・13・21は膨らみをもつ体部から頸部で強くすぼまり、口縁部が強く外反するものである。12・15・18・22・26～30は膨らみのない体部から、口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもので、口縁部と体部との境目が不明瞭である。端部は鋭角的に作り出されている。17・25は小形の手涅土器とみられる。19・20は同一個体である。体部から頸部にかけての部分で外面に段差を有し、口縁部は外反気味に立ち上がる。31は内外面が黒色処理されており、後述する中近世の瓦質土器の可能性があるが、口唇の形態は３などと同じである。23・24は体部の破片である。いず


1
(684)
2 (762)
3
(772)
4
(871)
5
(376)
6
(ＬＯ54)
7
(546)
8
(831)
9
(486)
10
(536)
11
(491)
12
(ＬＭ56)
13
(565)
14
(680)
15
(ＬＮ55)
16
(437)
17
(55)
18
(655)
19
(690)
20
(401)
(821)
21
(804)
22
(658)
23
(704)
24
(763)
(768)
25
(677)
26
(620)
27
(682)
28
(28)
29
(ＬＭ56)
30
(482)
31
(ＬＲ53)
32
(598)
33
(652)
(816)
34
(871)
35
(547)
36
(71)
37
(546)
(550)
38
(614)
39 (732)
(771)
40 (ＬＬ57)
0
10cm

第21図　土師器



第22図　須恵器

れも焼きが非常に良好で、叩くと須恵器に近いような金属音がする。23の外面には煤状炭化物が付着している。24は外面に粘土紐輪積痕が認められるのに対し、内面はていねいにヘラナデ調整が施されている。32～38・40は底部および底部付近の破片である。32・33は縦方向のケズリが施されている。底部からの立ち上がりは、34・35・37・38がいったん内側に括れてからやや外傾気味に、36が括れないでやや大きく外傾して立ち上がる。40は内側に５条の櫛歯状沈線が認められる。39は内面が黒色処理された坏である。

（２）須恵器（第22図・図版17）

出土した須恵器は、４点と非常に少なかった。いずれもＡ区から出土したものである。口縁部から底部までの器形のわかるものは１点もない。１・２は甕の胴部破片である。いずれも外面に平行叩目痕が認められるが、内面には当具痕がほとんどない。１に比較すると２は非常に軽量である。３は内外面に自然釉が認められる壺ないしは蓋の破片である。４は坏の高台部分の破片である。

３　中世・近世の遺物

この時代の遺物として、陶磁器、煙管、銭貨が出土した。図示した遺物の内訳は、中世陶磁器が８点、近世陶磁器が82点、煙管が３点、銭貨が17点である。

以下、中世陶磁器、近世陶磁器、煙管、銭貨の順で説明していくこととする。陶磁器については、その出土量の少なさと完形品がないことから本調査区の全てに言及することは危険である。しかし、遺跡の性格上、図示できるものについては極力記載するようにした。器面に文様が描かれているものについては、写真と実測図をおりまぜて掲載してある。写真と実測図を併用したものは、結果的に写真の歪みのため実測図から写真がはみ出しているものもある。底部については、底径を割り出し復元実測を行った。器種・器形・年代・特徴等については表にして示した。

（１）中世陶磁器（第23図１～４・24図43～46・第３表・図版１）

出土した中世陶磁器の内訳は、13～14世紀代の中国産白磁、13世紀頃とみられる常滑系あるいは越前系陶器、珠洲系陶器をはじめとし、16世紀後半の瀬戸・美濃系陶器等がある。

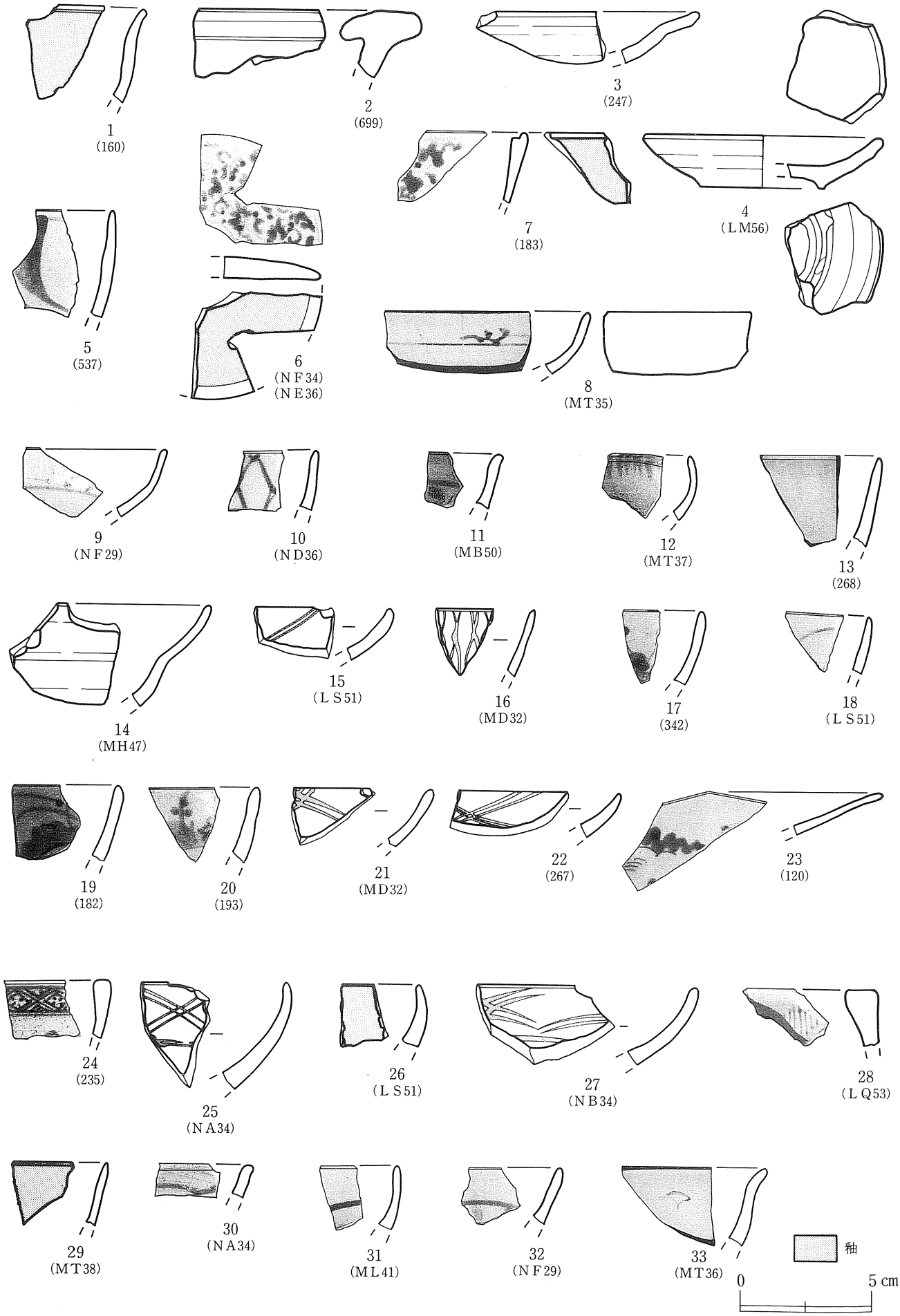
１は中国産白磁碗である。比較的薄手に成形され口縁部が外反しながら立ち上がる。鋭く作り出された口唇は、施釉されず露胎になっている。２は常滑系あるいは越前系大甕のいわゆるＮ字状口縁部と思われれる。３は肥前系陶器皿である。体部上半がやや内湾しながら頸部に至り、口縁部は外傾しながら直に作り出されている。４は瀬戸・美濃系の灰釉丸皿である。高台内には輪トチ痕が付着している。胎土はこの時期のものとしては緻密であり、釉の発色も黄味がかった所と若干緑がかった所とむらがある。43はわずかに内湾する口縁部の破片で、口唇は平に作り出されている。内側に釉溜まりないしは貼付物の剝落した痕跡が残ってい

る。44は口縁部直下で横方向の、体部上半から右下がりの叩目が施されている甕である。叩目の条線は非常に細かく、全体にまんべんなく施されている。部分的に自然釉があって灰褐色に光沢を有する。内面には円形の当具痕が認められる。胎土には白色砂粒を含み、焼成は良好である。45・46は珠洲系陶器の擂鉢である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。45は特に内面の摩滅が激しい。

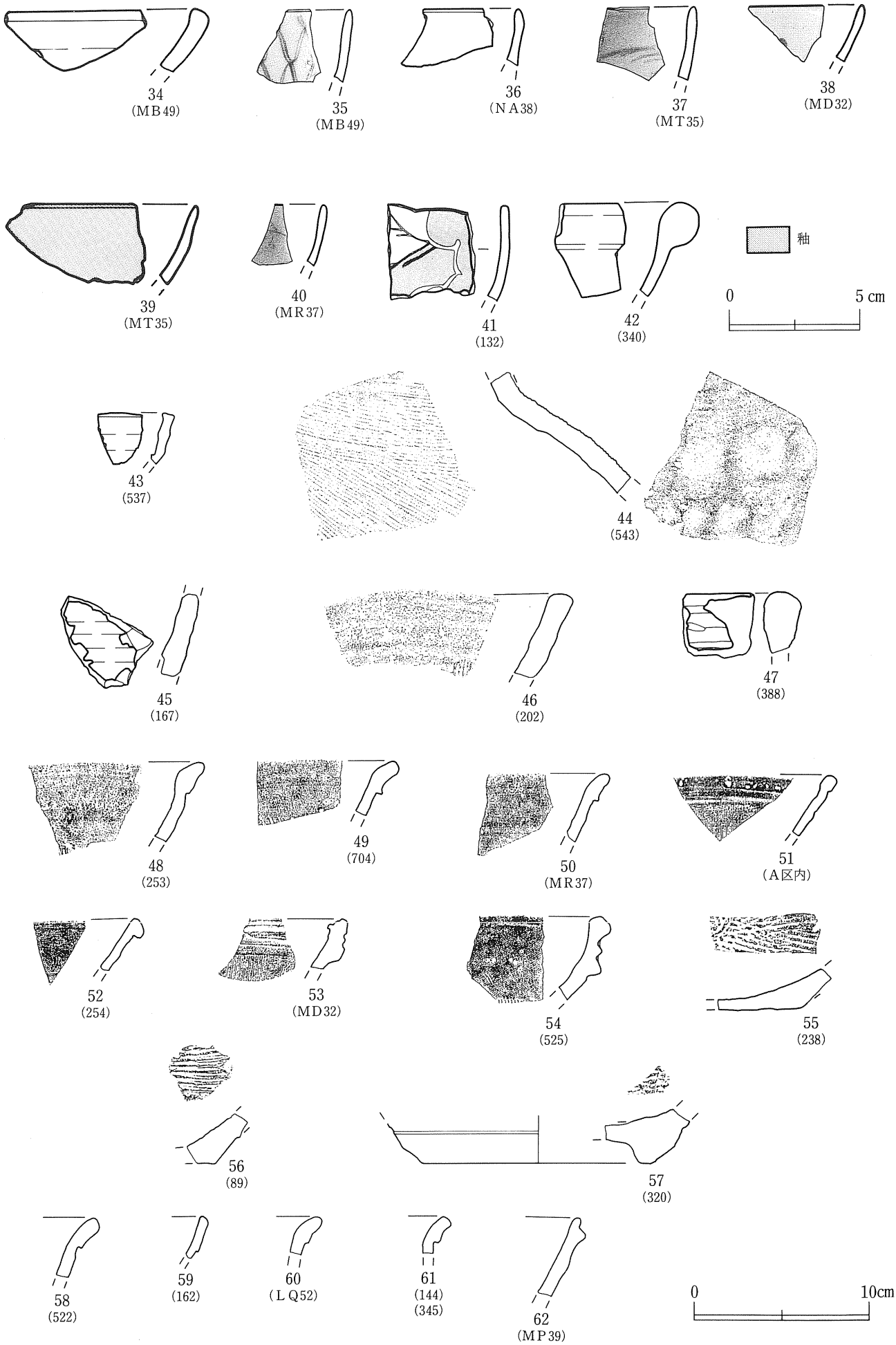
（２）近世陶磁器（第23～28図・第３表・図版１～４・17）

出土した近世陶磁器は、17世紀初頭（江戸時代初期）～19世紀後半（幕末）までのものである。その産地は、ほとんどが肥前系で、瀬戸・美濃系、関西系のものが若干認められる。胎土の色調は、白色系と茶色系のものが多く、唐津焼には灰色、赤褐色系のものがある。釉調は透明、白色系、茶色系、緑色系、黄色系のものがある。ほとんどは内外面に施釉されているが、唐津焼の碗については、その高台付近が露胎になっている。器内外面に描かれた文様はいずれも呉須で描かれたものである。文様の呼称は表に示した。

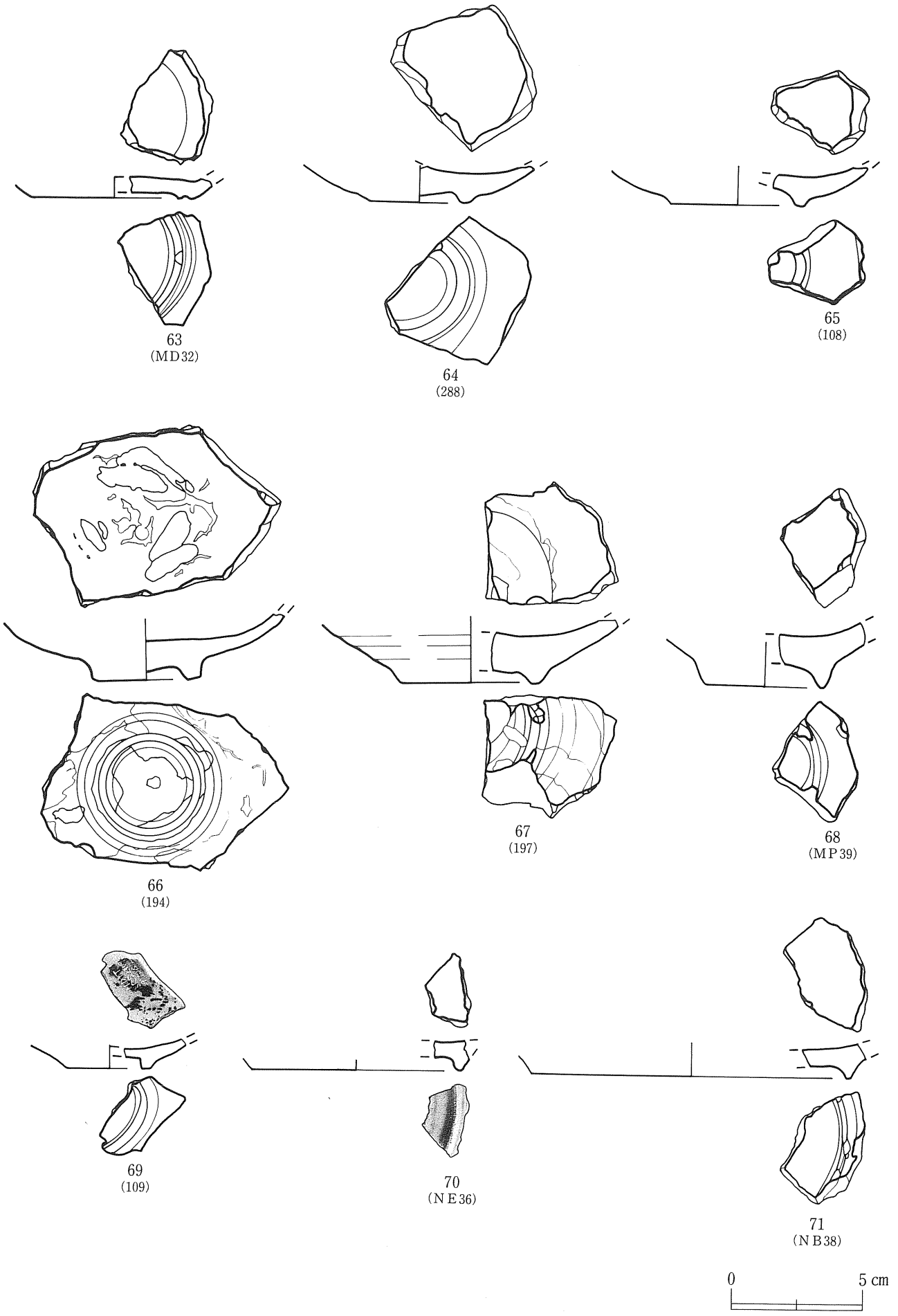
５～41は肥前系磁器の口縁部破片で内外面に施釉されている。６・７は蓋物の蓋と受けであり１セットをなすものである。蓋内面縁部と受けの口唇内側は釉剝ぎにより露胎になっている。外面は唐草文が下絵付された後で施釉されている。蓋の口径は受けのそれよりも小さくなっている。24・28は香炉である。24は口縁部に四方襷文が巡り、釉面に輝が現れている。輝は嵌入かどうかは判然としない。28の器面にあらわれた文様の発色は、他よりも鮮明な青色である。34は三島手陶器大皿である。39は関西系陶器碗で、釉面に意識的に嵌入が入れられている。47は全体の器形は不明であるが、器厚が肥厚であることと成形上の特徴から一応瓦質土器火鉢の口縁部として捉えた。肉厚な口唇部が平坦に作り出されており、内面は横ナデ調整、外面は研磨に近いミガキ調整が施されている。浪岡城跡では、口縁部に雷文等の装飾文が巡る15、16世紀のものが主として出土しているが、本遺跡の瓦質土器は装飾文が認められないことから17世紀後半以降のものと推定される。48～62は擂鉢である。無釉のものと茶褐色系の釉が施されているものとがある。口縁部の作り出しは折り返されるものと段をつけるものがある。63は二重高台を有する瀬戸美濃系丸皿である。見込および高台内は無釉である。高台内には輪トチ痕が付着している。64は内面の釉調が乳白色を呈し、その上に黒色の釉が斑点状に認められる唐津焼と考えられる碗である。高台内には縮緬皺のような細かいささくれがある。66の内面には砂目積痕が残っている。底部は無釉であるが、体部の釉が滴り流れている。69は貼付高台を有する角皿である。見込に描かれた文様は型紙摺によるものである。67・74～80は見込蛇ノ目状釉ハギが施された皿である。73は破損面に漆の付着が認められる。肥前では18世紀以前における破損した陶磁器の接着法として漆と膠を混ぜ合わせて使う「漆継ぎ」という技法が知られる。74は見込に五弁花文コンニャク印判が施されている。83の高台内には「大明年表」銘崩れが認められる。84は高台部が剝落した碗である。おそらく高台が貼りつけられたものと考えられる。85の外面には丸文が施され、丸文内に格子目が描かれている。86は高台内に銘がみられ、外面には楼閣山水文が描かれている。87～91は唐津系陶器である。胎土は灰色～赤褐色を呈する。90は畳付が幅広に作り出された平鉢である。器面は鉄釉が施され、内面には皿等を重ね焼きした痕跡とみられる砂粒が付着している。


1
(160)
2
(699)
3
(247)
4
(LM56)
5
(537)
6
(NF34)
(NE36)
7
(183)
8
(MT35)
9
(NF29)
10
(ND36)
11
(MB50)
12
(MT37)
13
(268)
14
(MH47)
15
(LS51)
16
(MD32)
17
(342)
18
(LS51)
19
(182)
20
(193)
21
(MD32)
22
(267)
23
(120)
24
(235)
25
(NA34)
26
(LS51)
27
(NB34)
28
(LQ53)
29
(MT38)
30
(NA34)
31
(ML41)
32
(NF29)
33
(MT36)
釉
0
5 cm

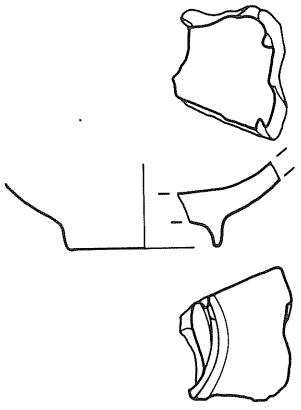
第23図　陶磁器(1)


34
(MB49)
35
(MB49)
36
(NA38)
37
(MT35)
38
(MD32)
39
(MT35)
40
(MR37)
41
(132)
42
(340)
釉
0
5 cm
43
(537)
44
(543)
45
(167)
46
(202)
47
(388)
48
(253)
49
(704)
50
(MR37)
51
(A区内)
52
(254)
53
(MD32)
54
(525)
55
(238)
56
(89)
57
(320)
58
(522)
59
(162)
60
(LQ52)
61
(144)
(345)
62
(MP39)
0
10cm

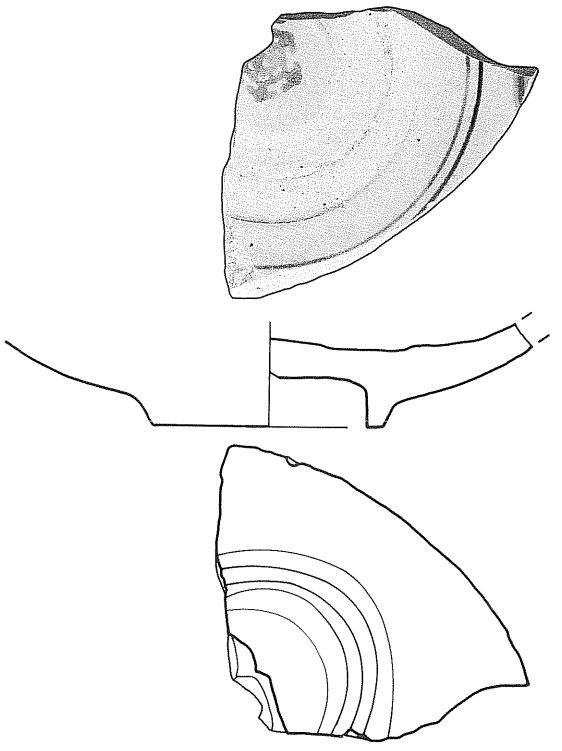
第24図　陶磁器(2)


63
(MD32)
64
(288)
65
(108)
66
(194)
67
(197)
68
(MP39)
69
(109)
70
(NE36)
71
(NB38)
0
5 cm

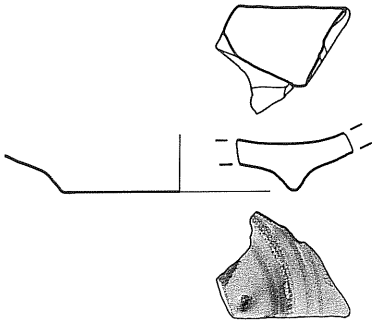
第25図　陶磁器(3)



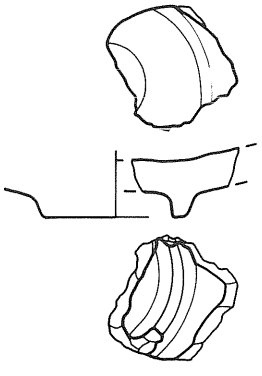
72
(MT35)



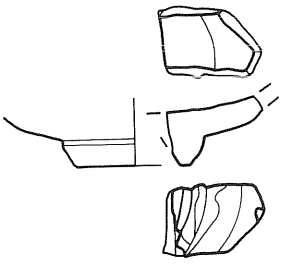
74
(541)



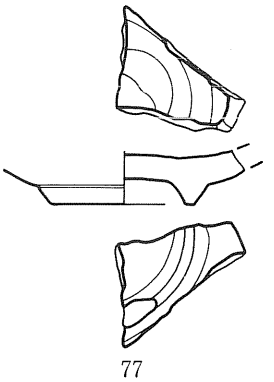
73
(MR37)



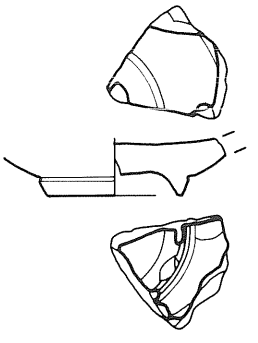
75
(NB34)



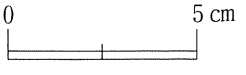
76
(MQ38)



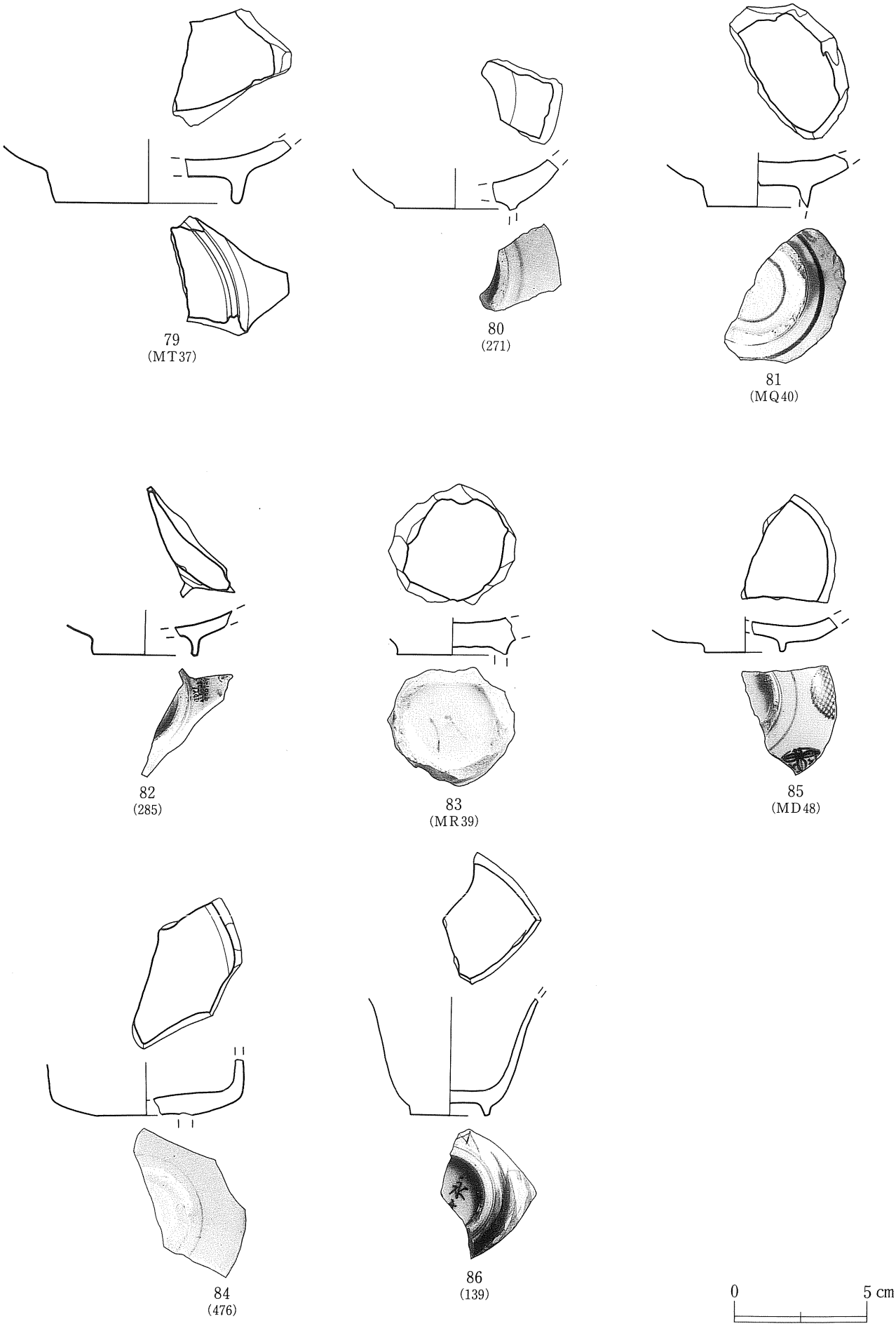
77
(NA36)



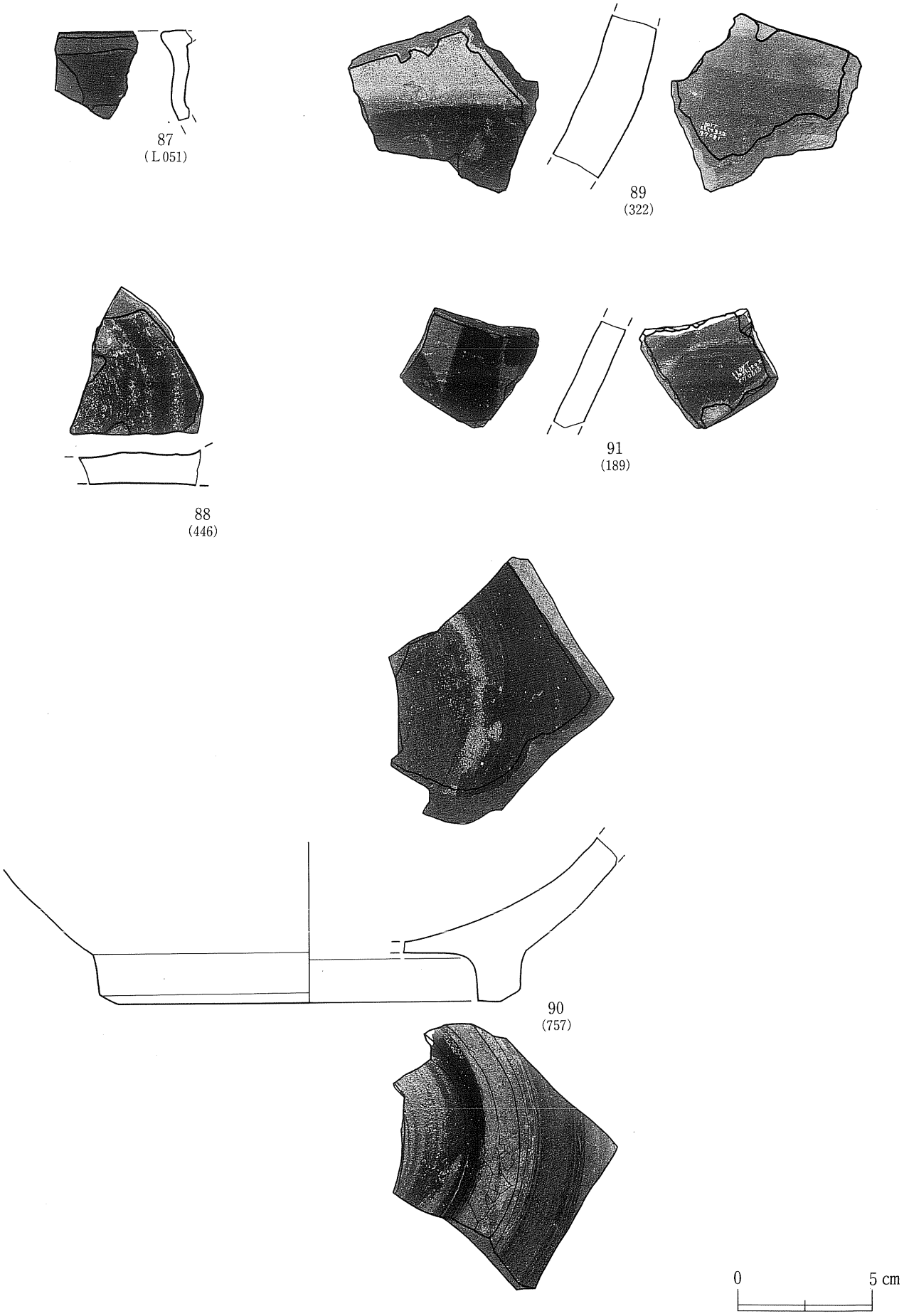
78
(120)



第26図　陶磁器(4)



第27図　陶磁器(5)



第28図　陶磁器(6)

番号	部位	器形	器種	時期	産地等
1	口縁部	碗	白磁	13世紀～14世紀中葉	中国。ロハゲ。(160)
2	口縁部	大甕	陶器	13世紀後半	常滑。(699)
3	口縁部	皿	陶器	16世紀末～17世紀	肥前。(247)
4	口縁部	皿	陶器	16世紀～17世紀	瀬戸美濃。(LM56)
5	口縁部	碗	染め付け	17世紀後半	肥前。(LQ56)
6	口縁部	蓋物	染め付け	1690～18世紀前半	肥前。唐草文。7と同一個体。(NF34,NE36)
7	口縁部	蓋物	染め付け	1690～18世紀前半	肥前。(183)
8	口縁部	皿	染め付け	1690～1730年代	肥前。捻花文。(MT35)
9	口縁部	皿	染め付け	1690～1730年代	肥前。捻花文。(NF29)
10	口縁部	碗	染め付け	1690年～18世紀後半	肥前。網目文。(ND36)
11	口縁部	碗	染め付け	18世紀前半頃	肥前。(MB50)
12	口縁部	仏飯器	染め付け	18世紀前半	肥前。雨降り柳文。(MT37)
13	口縁部	碗	染め付け	18世紀前半	肥前。雨降り柳文。(268)
14	口縁部	鉢	陶器	18世紀前半	肥前。(MH47)
15	口縁部	皿	染め付け	18世紀前半	波佐見。(LQ51)
16	口縁部	碗	青磁染付	18世紀前半～中葉	肥前。内側網目文。(MD32)
17	口縁部	碗	染め付け	18世紀前半～中葉	波佐見。(342)
18	口縁部	碗	染め付け	18世紀前半～中葉	波佐見。(LS51)
19	口縁部	碗	染め付け	18世紀前半～中葉	波佐見。(182)
20	口縁部	碗	染め付け	18世紀前半	肥前。花文（梅樹文)。(193)
21	口縁部	皿	染め付け	18世紀中葉～末	肥前。斜格子文。(MD32)
22	口縁部	皿	染め付け	18世紀中葉～末	肥前。斜格子文。(267)
23	口縁部	角皿	染め付け	18世紀中葉～末	肥前。(120)
24	口縁部	香炉	染め付け	18世紀中葉～末	肥前。四方襷文。(235)
25	口縁部	皿	染め付け	18世紀後半	肥前。斜格子文。(NA34)
26	口縁部	皿	染め付け	18世紀後半	肥前。斜格子文。(LS51)
27	口縁部	皿	染め付け	18世紀後半	肥前。斜格子文。(NB34)
28	口縁部	香炉	染め付け	18世紀末～幕末	肥前系。(162)
29	口縁部	小杯	白磁	18世紀後半～19世紀前半	肥前。(MT38)
30	口縁部	皿	染め付け	18世紀	肥前。(NA34)
31	口縁部	皿	染め付け	18世紀	肥前。(ML41)
32	口縁部	皿	染め付け	18世紀	肥前。(NF29)
33	口縁部	小杯	染め付け	18世紀	肥前。(MT36)
34	口縁部	大皿	三島手陶器	18世紀	肥前。(118)
35	口縁部	碗	染め付け	18世紀	肥前。二重網目文。(MB49)
36	口縁部	碗	白磁か	18世紀	肥前。(NA38)
37	口縁部	碗	染め付け	18世紀	肥前か。(MT35)
38	口縁部	碗	染め付け	18世紀	肥前か。(MD32)
39	口縁部	碗	陶器	18世紀	関西系。(MT35)
40	口縁部	碗	染め付け	18世紀	肥前。(MR37)
41	口縁部	皿	染め付け	19世紀前半	肥前。(132)
42	口縁部	鉢	灰釉陶器	19世紀	関西系。(340)
43	口縁部	仏飯器か	灰釉陶器	不明	猿投か。(537)
44	体部	甕	陶器	13世紀	珠洲系。(543)
45	体部	擂鉢	陶器	13世紀	珠洲系。(167)

46	口縁部	擂鉢	陶器	13世紀	珠洲系。(202)
47	口縁部	火鉢	瓦質土器	17世紀後半以降	不明(388)
48	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(253)
49	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(704)
50	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(MR37)
51	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(A区)
52	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(254)
53	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(MD32)
54	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(525)
55	底部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(238)
56	底部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(81)
57	底部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(320)
58	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(522)
59	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(162)
60	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(LQ52)
61	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(144・345)
62	口縁部	擂鉢	陶器	近世か	肥前。(MR39)
63	底部	皿	灰釉陶器	16世紀後半～17世紀	美濃。高台内輪トチ。(MD32)
64	底部	碗	灰釉陶器	1590～1610年代	肥前。胎土目。(288)
65	底部	皿	灰釉陶器	1590～1610年代	肥前。(108)
66	底部	皿	灰釉陶器	1600～1630年代	肥前。底部内外に砂目痕。(194)
67	底部	皿	灰釉陶器	17世紀前半	肥前か。(197)
68	底部	碗	染め付け	1630～1660年代	肥前。(MP39)
69	底部	角皿	染め付け	1690～18世紀前半	肥前。型紙摺。未切細工成形。(109)
70	底部	皿	染め付け	17世紀末～18世紀前半	肥前。被熱。(NE36)
71	底部	皿	染め付け	17世紀後半～18世紀前半	肥前。(NB38)
72	底部	碗	染め付け	17世紀後半～18世紀前半	肥前。(MT35)
73	底部	皿	染め付け	18世紀前半～中葉	肥前。漆継ぎ。(MR37)
74	底部	皿	染め付け	18世紀第2-3四半期	肥前。見込五弁花文コンニャク印判。(541)
75	底部	皿	染め付け	18世紀中葉～末	肥前。(NB34)
76	底部	皿	白磁か	18世紀	肥前。波佐見系。(MQ38)
77	底部	皿	染め付け	18世紀	肥前。波佐見系。(NA36)
78	底部	皿	白磁か	18世紀	肥前。波佐見系。(120)
79	底部	皿	白磁	18世紀	肥前。(MT37)
80	底部	皿	染め付け	18世紀	肥前。(271)
81	底部	碗	染め付け	18世紀	肥前。(MQ40)
82	底部	碗	染め付け	18世紀	肥前。(285)
83	底部	碗	染め付け	18世紀後半	肥前。高台内「大明年表」銘崩れ。(MR39)
84	底部	碗	染め付け	18世紀後半～1810年代	肥前。(476)
85	底部	碗	染め付け	1780～1810年代	肥前系。丸文。(MD48)
86	底部	小杯	染め付け	19世紀	関西系か。(139)
87	口縁部	筒	陶器	17世紀後半	肥前。(LO51)
88	底部	筒	陶器	17世紀後半	肥前。(446)
89	体部	鉢	陶器	17世紀後半	肥前。(322)
90	底部	鉢	陶器	17世紀後半	肥前。(757)
91	体部	鉢	陶器	17世紀後半	肥前。(189)

第３表　陶磁器一覧表

（３）煙管（第29図１～３・図版17）

出土した煙管は３点である。このうち、雁首から吸口まで残存するものは範囲確認時に採集されたものを含め２本、雁首のみのものが１本である。

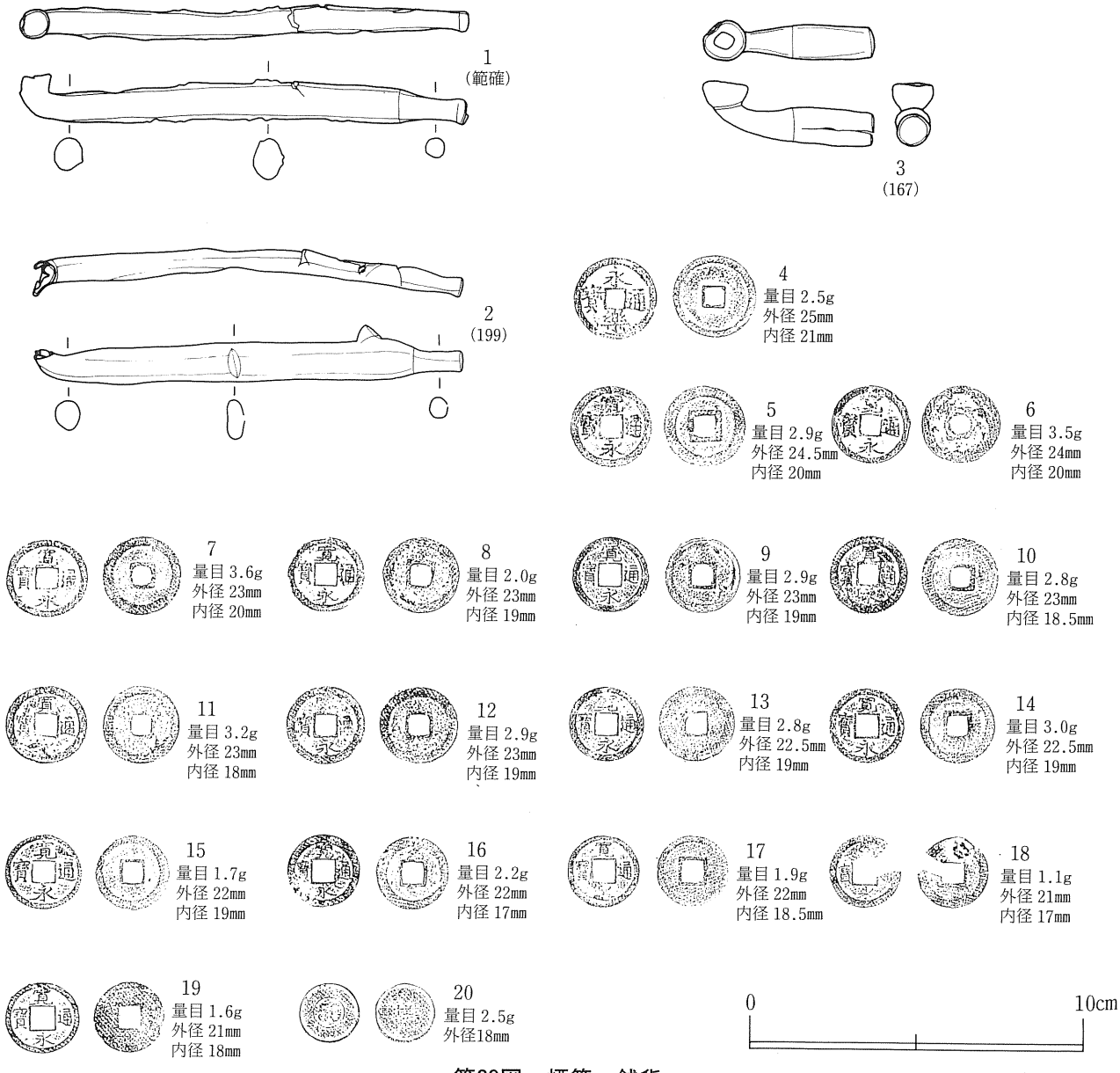
１・２は、雁首から吸口まで一体となっているものである。脂返は小さく短く彎曲し、首部は短い。３は小さく彎曲する脂返しに火皿がつく雁首部分である。ラウとの装着口がやや幅広になっており、首部は短い。

以上列記した煙管を古泉編年[註1]で分類すると、１・２は第Ⅵ段階（19世紀頃）、３は第Ⅴ段階（18世紀後半）であった。

（４）銭貨（第29図４～20・図版17）

出土した銭貨は全部で17点である。それらの量目および外縁の外径・内径は挿図中に記した。

４は「永楽通寶」である。1408年初鋳の明銭である。渡来銭は中世後期になると中国の公鋳銭に混じり粗悪な私鋳銭も渡来、さらに国内でも鋳造されるようになったといわれる。本遺跡のものは渡来銭か模鋳銭か明確でない。５～19は「寛永通寶」である。寛永通寶は、その書体の特徴から大きく新寛永と古寛永に分類される。銭銘は概して明瞭である。背面に波文のある「波銭」・「文」の字を配する文銭は認められなかった。



第29図　煙管・銭貨

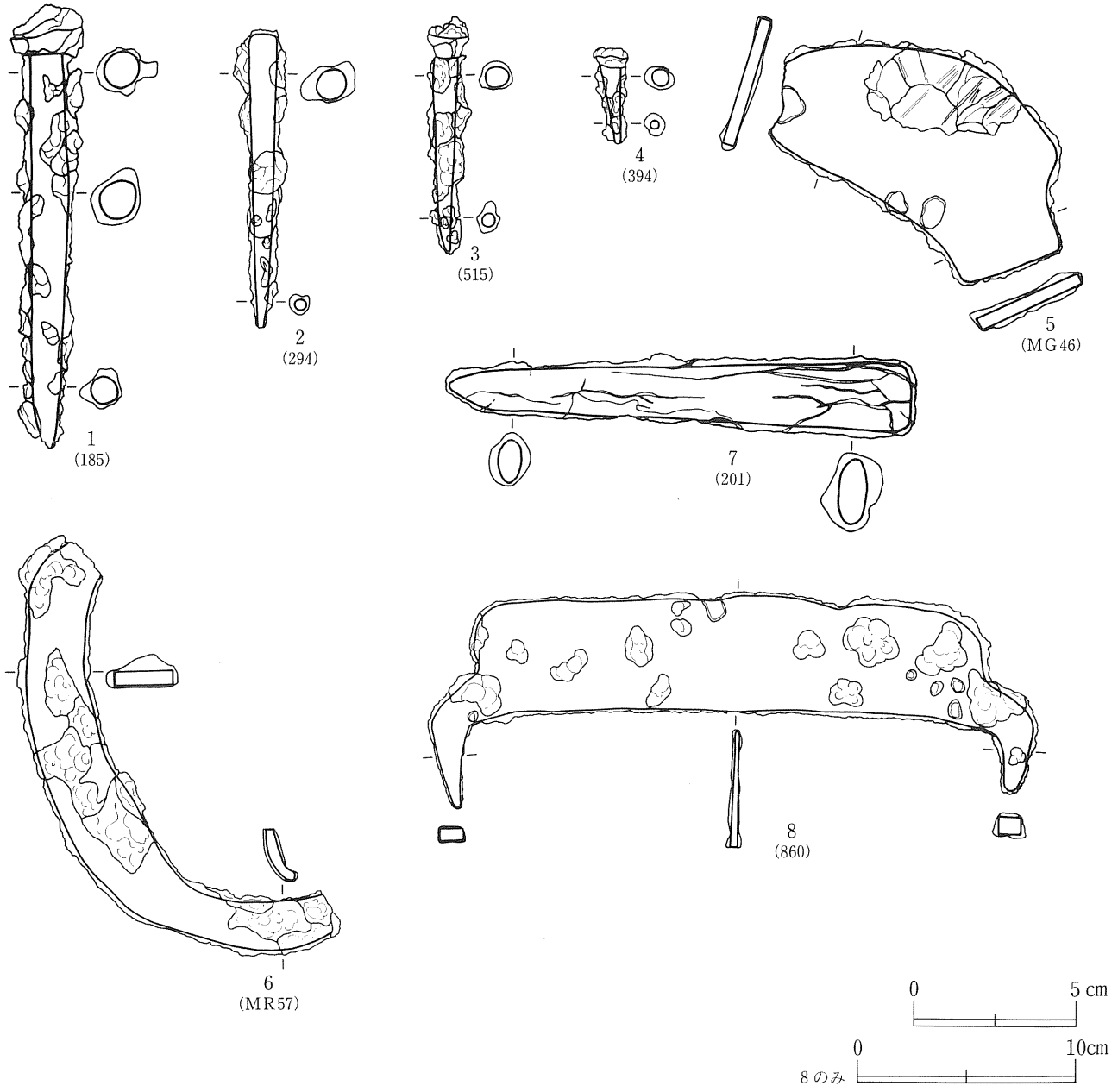
20は昭和初期とみられる五十銭貨である。

４　時期不明の遺物

出土した遺物のうち、形態・特徴等から時期を判別できなかったものがある。このうち以下の７種類の遺物について図示していくこととする。

（１）鉄製品（第30図・図版18）

出土した鉄製品は、釘（１～４）、鎌（５）、蹄鉄（６）、藁の押し切り機の刃部（８）、用途不明（７）等である。いずれも腐蝕しており、正確な断面形状をとらえることは困難であった。



第30図　鉄製品

第31図　硯・漆器・坩堝・煉瓦・砥石・磚

（２）硯（第31図１・図版18）

１点出土した。「墨道」、「海」、「落潮」は欠損している。裏面の「縁」部分の破片である。

（３）漆器（２）

１点出土した。漆器容器内に漆を入れたものであり、容器内側に塗られた朱が付着している。この漆が陶磁器の漆継ぎ（第26図73）. に使われたものかどうかは分からない。

（４）坩堝（３）

１点出土した。外面の一部に焦げた痕が認められる。また、内面には緑色を呈する金属性の物が付着しているが、これは銅の錆の可能性がある。

（５）煉瓦（４～６）

いずれもＡ区から出土した。表面色は、赤橙色を呈し、胎土は非常に細かく、白色砂粒を多く含む。

（６）砥石（７～14）

13以外はＡ区から出土したものである。14は非常に小さく各面に擦面が認められる。石質は、14が凝灰岩質、７が砂岩質、８～13が泥岩質である。

（７）磚（15）

１点出土した。ＳＮ10付近から出土したものであるが、遺構との関連は不明である。スサを混入している粘土質土である。鹿角地方では、下沢田遺跡において住居跡のカマド袖部の芯材として利用された例がある。

番号	出土地区	種類	色　調	備　　考
1	Ａ区	硯	青暗灰色	－－－－－－－
2	Ａ区	漆器	赤色	内側に漆付着
3	Ａ区	坩堝	暗灰色	内側に黒色溶解物付着
4	Ａ区	煉瓦	赤褐色	二次火熱・白色砂粒子混入
5	Ａ区	煉瓦	赤褐色	白色砂粒子混入
6	Ａ区	煉瓦	赤褐色	白色砂粒子混入
7	Ａ区	砥石	褐色	砂岩質
8	Ａ区	砥石	褐灰色	泥岩質
9	Ａ区	砥石	褐色	凝灰岩質
10	Ａ区	砥石	褐色	泥岩質
11	Ａ区	砥石	褐灰色	泥岩質
12	Ａ区	砥石	赤褐色	凝灰岩質
13	Ｄ区	砥石	赤褐色	凝灰岩質
14	Ａ区	砥石	白色	凝灰岩質
15	Ａ区	磚	褐色	粘土質

第４表　時期不明遺物一覧表

註１　古泉　弘『江戸を掘る』柏書房　1983（昭和58）年

第５章　自然科学的分析

第１節　放射性炭素年代測定

１．放射性炭素年代測定結果

記

測定No.	試　料	^{14}C年代値	補正暦年代	
PLD-246	No.1 A区SKP内	Modern (60 ± 80 yrBP)	交点年代値	AD 1,955*年
			1σ年代幅	AD 1,690 to 1,730 AD 1,810 to 1,930 AD 1,950 to 1,955*
PLD-247	No.2 A区SB15　SKP3461	Modern (70 ± 80 yrBP)	交点年代値	AD 1,955*年
			1σ年代幅	AD 1,690 to 1,740 AD 1,810 to 1,930 AD 1,950 to 1,955*
PLD-248	No.3 A区SB13　SKP3182	Modern (1.00095±0.0097235)	交点年代値	Modern
			1σ年代幅	******
PLD-249	No.4 A区LR53　Ⅱ層中	Modern (70 ± 70 yrBP)	交点年代値	AD 1,955*年
			1σ年代幅	AD 1,690 to 1,730 AD 1,810 to 1,930 AD 1,950 to 1,955*
PLD-250	No.5 A区LR52SN	700 ± 100 yrBP (AD 1,250年)	交点年代値	AD 1,290年
			1σ年代幅	AD 1,250 to 1,400
PLD-251	No.6 A区内	Modern (30 ± 70 yrBP)	交点年代値	AD 1,955*年
			1σ年代幅	AD 1,890 to 1,910 AD 1,950 to 1,955*
PLD-252	No.7 A区L054　Ⅰ層	Modern (20 ± 80 yrBP)	交点年代値	AD 1,955*年
			1σ年代幅	AD 1,900 to 1,955*
PLD-253	No.8 A区LP53　Ⅰ層	Modern (160 ± 80 yrBP)	交点年代値	AD 1,680　1,750　1,810 AD 1,930　1,950年
			1σ年代幅	AD 1,660 to 1,955*
PLD-254	No.9 A区LQ51SN	Modern (1.00961±0.0107139)	交点年代値	Modern
			1σ年代幅	******
PLD-255	No.10 E区ピット内	Modern (1.00359±0.0096839)	交点年代値	Modern
			1σ年代幅	******
PLD-256	No.11 E区シラス下より	1,180 ± 80 yrBP (AD 770年)	交点年代値	AD 880年
			1σ年代幅	AD 780 to 970

２．放射性炭素年代測定について

PLD-250、254の試料については、酸処理を施して不純物を除去し、酸素気流中で燃焼させて二酸化炭素としたものをアンモニア水に通し、塩化カルシウムの水溶液を加えて炭酸カルシウムを生成する。炭酸カルシウムに過塩素酸を加えて発生させた二酸化炭素を450℃の反応管内でリチウムに吸収させた後、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。それ以外の試料については、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後リチウムと混合して反応管内に入れ、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管（400cc）を用いて、β^-線を計数して年代値を算出した。

なお、年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。試料のβ^{-}線計数率と自然計数率との差が2σ以下の時は、3σに相当する年代を下限の年代値として表示し、試料のβ^{-}線計数率と現在の標準炭素(Modern standard carbon)の計数率との差が2σ以下の時は、Modernと表示し、$^{14}C_{(Sample)}/^{14}C_{(Modern)}$の値を付記し、$^{14}C_{(Sample)}/^{14}C_{(Modern)}<1$であれば、yrBPの値を付記する。

暦年代の補正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代値（yrBP）に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の^{14}C濃度の変動および半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±30年）を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}C年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出にCALIB3.0(Stuiver and Reimer,1993:IBM-PC用:Reference(Stuiver and Pearson,1993))を使用した。なお、交点年代値は^{14}C年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、１σ年代幅は^{14}C年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で１σ年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約一万年前からAD 1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を***またはModernと表示し、AD 1,955*はModernを意味する。

引用文献

Stuiver,M. and Reimer, P.J. (1993) Extended ^{14}C database and revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program.

第２節　石鳥谷館跡出土材の樹種同定

１．はじめに

秋田県鹿角市八幡平字石鳥谷87外に所在する中世の石鳥谷館跡から出土した木材６試料(試料番号１・２・３・４・６・10）の樹種同定結果を報告する。試料番号10（Ｅ区ピット内）は炭化していない材１点であったが、ほかはすべてＡ区から出土した炭化材である。炭化材は各ビニール袋に複数の破片が取り上げられており、複数の分類群を含んでいた。各試料は樹種同定と共に放射性炭素年代測定も計るため、先ず樹種同定を定性的に行い残りの破片を放射性炭素年代測定用の試料とした。なお樹種同定を行った放射性炭素年代測定値の結果は、すべてModernであった。

２．同定の方法

未炭化材の組織標本は、片刃の剃刀を用いて、横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の３方向の切片を作成しガムクロラールで封入し永久標本とした。樹種同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。

炭化材は、３方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面は炭化材を手で割り新鮮な面を出し、接線断面と放射断面は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この３断面の試料を直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡で観察・写真撮影をした。

作成した木材組織プレパラートと観察した炭化材片は（株）パレオ・ラボで保管している。

３．結果

樹種同定の結果を表に示した。

検出された分類群は、マツ属（アカマツ・複維管束亜属）とヒノキ科の針葉樹、サワグルミ・コナラ節・クリ・モクレン属・ネムノキ・カエデ属・トチノキ・ハリギリ・ハイノキ属・トネリコ属の落葉広葉樹、そしてススキ属に近似する草本性イネ科の稈であった。

ハイノキ属と草本性イネ科の稈以外はすべて高木となり、材利用面でもよく使用される分類群が多かった。

マツ属は試料２以外のすべての試料から検出されているが、それ以外の樹種は各遺構ごとに出土樹種が異なっていた。試料２と３は掘立柱建物跡のピットから検出された炭化材片である。建物の柱や建築材の一部であったと推測すると、出土したマツ属・コナラ節・クリはそのような用途によく使われる材であり、建物に関連した材の可能性がありそうである。

マツ属については、炭化していない試料10は放射仮道管の内壁の肥厚の特徴からアカマツと特定できたが、炭化材ではこの特徴が崩れて捉えにくい場合が多く種の同定まではできない。従って肥厚がわずかでも確認できた試料は複維管束亜属とし、肥厚が不明な試料はマツ属までの同定に留めた。以下に同定の根拠となった組織を記載する。

試料No.	遺構	樹種
1	A区SKP内	マツ属複維管束亜属
		クリ
		コナラ属コナラ節
		モクレン属
		カエデ属
		ハリギリ
		ハイノキ属
		草本性イネ科
2	A区SB15SKP3461	サワグルミ
		コナラ節
		クリ

試料No.	遺構	樹種
3	A区SB13SKP3182	マツ属
4	A区LR53Ⅱ層中	マツ属複維管束亜属
		ヒノキ科
		サワグルミ
		トチノキ
		トネリコ属
6	A区内炭化物	マツ属
		ネムノキ
10	E区ピット内	アカマツ (プレパラート番号 P-67)

第５表　石鳥谷館跡出土木材の樹種同定結果

樹種記載

アカマツ　Pinus densiflora Sieb.et Zucc. マツ科　図版19　1a.-1c.(試料10 E区ピット内)

水平・垂直両樹脂道をともに持つ針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射仮道管の上下端に放射仮道管があり、水平壁には鋭角な肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、１分野に１～２個。アカマツは常緑高木の針葉樹で、北海道～屋久島の温帯～暖帯に分布する。材は耐水性に優れている。

マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　図版19　2a.-2c.(試料6 A区内炭化物)

早材から晩材への移行は試料によりゆるやかなものからやや急なものなど様々である。晩材の量も破片やひとつの破片中でも年輪により変化していたが、晩材量は比較的多い。放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には鋸状の肥厚があることからマツ属の複維管束亜属のアカマツまたはクロマツであることが判る。内壁の肥厚の形状により、アカマツは鋭利な鋸歯状をなすことで、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状をなすことで区別できるが炭化材では内腔に張り出した部分が崩れており、種の判別は難しい。

ヒノキ科　Cupressaceae　図版19　3a.-3c.(試料４　A区LR53Ⅱ層中)

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は多い。仮道管にらせん肥厚はない。分野壁孔は小型のヒノキ型またはトウヒ型で１分野に２～４個。以上の形質からヒノキ科の材であることが判るが、観察部分はあて材部の組織のようでもありこれ以上は分類群を絞ることができなかった。

サワグルミ　Pterocarya rhoifolia Sieb. et Zucc. クルミ科　図版19　4a.-4c.(試料2 A区SB15SKP3461)

単独あるいは２～３個が放射方向に複合した中型の管孔が除々に径を減じながら散在し、接線状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状で孔口は大きく開き、穿孔は単一。放射組織はほぼ同性、１～２細胞幅で細く、道管との壁孔の孔口は大きくて交互状である。北海道以南の温帯の山中の河川や湿った所に生育する落葉高木である。材は軽く加工容易であるが、腐朽しやすく割れやすい欠点がある。

コナラ属コナラ亜属コナラ節　Quercus. subgen. Quercus sect. Prinus　ブナ科　図版19　5a.-5c.(試料1 A区SKP内)

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと複合状のものとがある。コナラ節は北海道以南の暖帯から温帯に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は加工はややしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点があるが、人里近くに普通の樹種でよく利用される。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版19　6a.-6c.(試料2 A区SB15SKP3461)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じ、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

モクレン属　Magnolia モクレン科　図版19　7a.-7c.(試料1 A区SKP内)

小型の管孔が単独または２～数個が複合し散在する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は主に単一であるが階段穿孔も見られ、内腔には水平や弧状のチロースがある。放射組織は異性、１～２細胞幅、上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく階段状または対列状に整然と配列している。モクレン属は暖帯から温帯に分布する落葉性の高木または小高木である。北海道以南の山地に生育するホオノキ・コブシ、本州と九州に生育するタムシバ、関東北部以西に生育するオオヤマレンゲ、中部地方西南部に生育するシデコブシがある。材質は、やや軽軟で割裂性は大であり割れや狂いが少なく加工しやすい材である。

ネムノキ　Albizzia julibrissin Durazzini　マメ科　図版19　8a.-8c.(試料6 A区内炭化物)

年輪の始めに中型の管孔が単独で分布し、晩材部では帯状の柔組織の中に小型の管孔が単独または２～３個複合して散在する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、１～４細胞幅のややいびつな紡錘形で、道管との壁孔は交互状。ネムノキは本州以南の河岸や陽光地に生育する落葉高木である。材はやや軽軟で脆く耐久性も低い。

カエデ属　Acer　カエデ科　図版19　9a.-9c.(試料1 A区SKP内)

小型の管孔が単独または２～３個が放射方向に複合し、帯状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、１～３細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹であり、約

26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

トチノキ　Aesculus turbinata Blume　トチノキ科　図版19　10a.-10c.(試料4 A区LR53Ⅱ層)

小型～中型の管孔が単独または２～数個が複合して散在し年輪に向けて徐々に径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性、道管の壁孔はやや大きな円形で交互状に密在する。トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。材は軽軟緻密で加工し易く、木理は不規則で耐久性は低く狂いがでやすい欠点がある。

ハリギリ　Kalopanax pictus (Thunb.)Nakai　ウコギ科　図版19　11a.-11c.(試料1 A区SKP内)

年輪の始めに大型の管孔が１層配列しその間には小型の管孔も混在し、その後急に径を減じ小型の管孔が多数複合して接線状・斜状・波状に配列する環孔材。道管の壁孔はゆるい交互状で孔口は大きく、穿孔は単一である。放射組織は異性、３～４細胞幅の紡錘形が多く、上下端に方形細胞がある。ハリギリは北海道以南の暖帯上部から温帯の山中に普通の落葉高木である。材は重さ堅さ加工のしやすさなど中程度で、耐久性はあまり良くない。

ハイノキ属　Symplocos　ハイノキ科　図版19　12a.-12c.(試料1 A区SKP内)

非常に小型でまるびを帯びた管孔がおもに単独で均一に密在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が多数の階段穿孔である。放射組織は異性、１～３細胞幅、非常に大きな直立細胞からなる単列のものと、２～３細胞幅部分は平伏細胞からなりその上下端は方形・直立細胞が単列でのびるものがあり、多列部と単列部の幅はあまり差がなく、道管との壁孔は交互状から階段状である。ハイノキ属は落葉または常緑性の低木または高木で約11種あり、関東以西に分布するものが多い。現在の分布から推測すると北海道から九州の暖帯から温帯の山地や谷間に生育するサワフタギの可能性が高いが、材組織から特定はできない。

トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科　図版20　13a.-13c.(試料4 A区LR53Ⅱ層)

中型～大型の管孔が１～２層配列し、その後単独または２個複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材。周囲状・翼状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、１～２細胞幅である。トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木でヤチダモ、トネリコ、アオダモなど約９種ある。材は重硬で弾力性があり折れ難くい。

草本性イネ科　イネ科　図版20　14a.(試料1 A区SKP内)

直径4mmの草本性の稈である。稈はハチの巣状の柔組織で埋まっており、その中に厚壁細胞に囲まれた維管束が散在している。稈の外周部は厚壁細胞層がありその中に小さな維管束が１～２層ある。稈の外周部の形態はススキ属と一致するが、試料は非常に細い稈であり、イネ科を始め他の単子葉類の稈の組織形態が十分には知られていないため、硬い稈を持つタケ・ササ類とは区別する意味とススキ属の可能性を考慮して草本性イネ科として報告しておく。

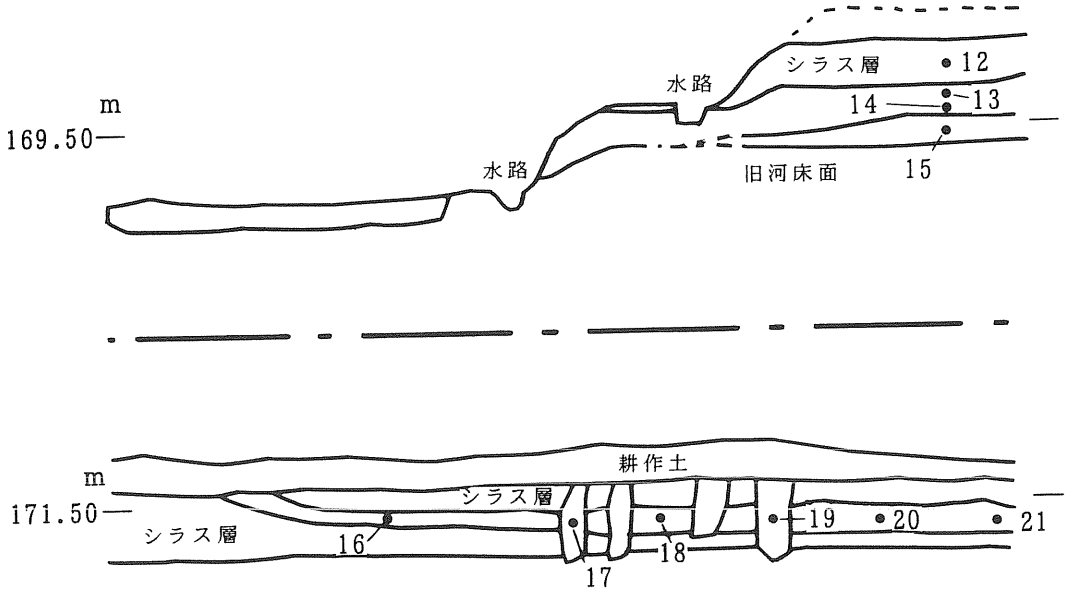
第３節　石鳥谷館跡のプラント・オパール

プラント・オパールとは、根から吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積し形成された植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無および稲作地の広がりについての検討も行われている（藤原　1984)。こうした研究成果から近年、このプラン

ト・オパール分析を用いて稲作の検証が各地・各遺跡で行われている。中世の石鳥谷館跡において行われた発掘調査では、遺構としての確認はされていないが、水田耕作土らしき黒色土壌が検出されている。以下にはこの黒色土壌について行ったプラント・オパール分析結果を示し、石鳥谷館跡における水田稲作について検討した。

１．試料

第32図に試料採取層準および位置を示した。このうち試料12～15は旧河床面を覆う各土層から採取され、これら各試料について簡単に記す。試料12は黒褐色のレキ混じり砂質粘土である。試料13・14は黒褐色のレキ混じり砂質シルトで、14には植物遺体も少し認められる。試料15は暗灰褐色のやや粘土質のレキ混じり砂質シルトである。また、肉眼的には認められなかったがこれら４試料には炭片が分析残渣に認められた。試料16～21について、16・18・20・21は同一層から採取され、17・19はピット状の穴を埋積している土壌である。これらのうち、試料16・17は白色の軽石を含む黒褐色砂質シルトで、赤褐色酸化鉄が枝状に集積している。試料18は軽石が少し混じる黒灰褐色砂質シルトで、赤褐色酸化鉄の集積が少し認められる。試料19もほぼ18と同様で、軽石混じりの黒灰褐色砂質シルトで、赤褐色酸化鉄が集積している。試料20は軽石が混じるやや粘土質の黒褐色砂質シルトで、赤褐色酸化鉄の集積が少し認められる。試料21も軽石が混じるやや粘土質の黒褐色砂質シルトで、赤褐色酸化鉄が集積している。



第32図　石鳥谷館跡の試料採取地点付近の土層断面と試料採取層準および採取位置

２．分析方法

プラント・オパール分析は上記した10試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μｍ）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により細かな粒子（10μｍ以下）を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

３．分析結果

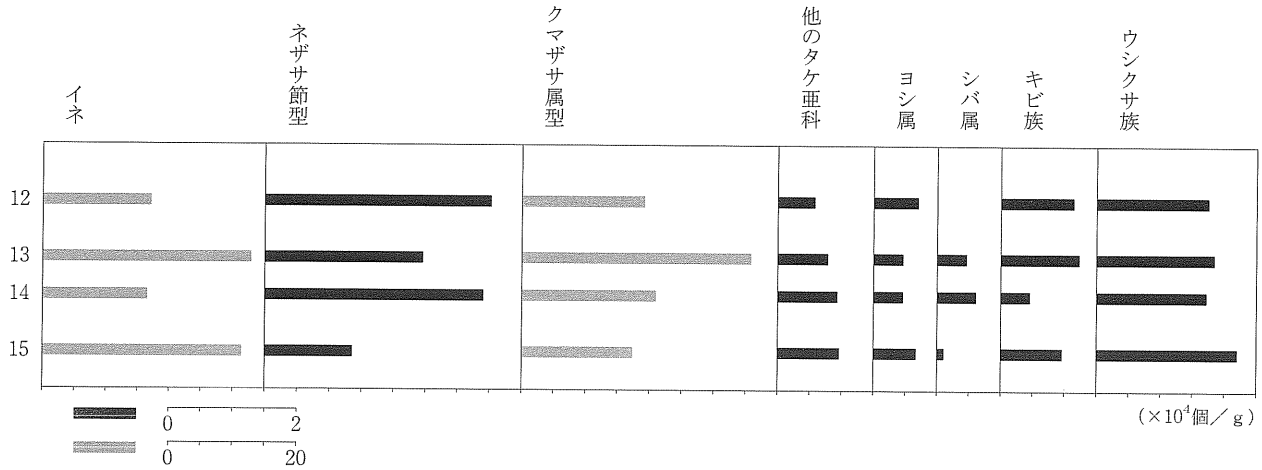
同定・計数された各分類群のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プ

ラント・オパール個数を求め（第６表）、それらの分布を第33図（試料12～15）、第34図（試料16～21）に示した。以下に分析結果を示すが、各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

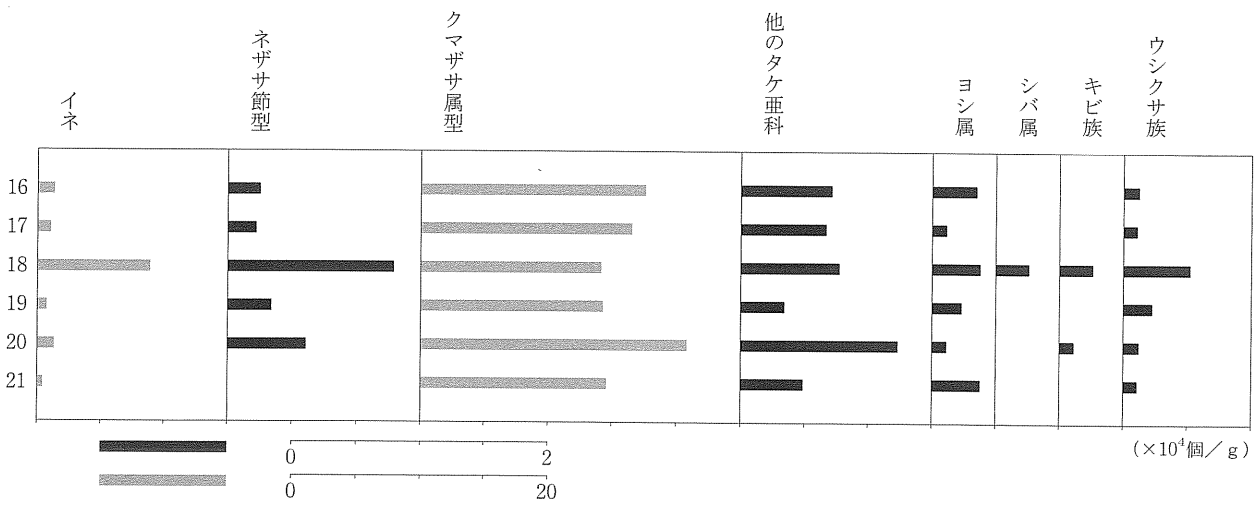
検鏡の結果、全試料からイネのプラント・オパールが検出され、特に断面試料の12～15では少ない試料14でも約160,000個と非常に多く検出されている。試料16～21では18でやや多く検出されている他は10,000個前後で、試料21では2,500個と最も少なくなっている。また、図表には示していないが試料12～15にはイネの穎の部分の破片も検出されている。イネ以外ではクマザサ属型が多く、最も少ない試料19でも140,000個を越えている。その他、ネザサ節型、ウシクサ族、ヨシ属がほぼ全試料から検出され、イネ同様断面試料で多い傾向が認められる。また、シバ属やキビ族にも同様の傾向がよみとれる。

試料番号	イネ（個／ｇ）	ネザサ節型（個／ｇ）	クマザサ属型（個／ｇ）	他のタケ亜科（個／ｇ）	ヨシ属（個／ｇ）	シバ属（個／ｇ）	キビ族（個／ｇ）	ウシクサ族（個／ｇ）	不明（個／ｇ）
１２	166,400	34,700	192,400	5,800	7,200	0	11,600	17,400	42,000
１３	326,200	24,700	358,700	7,700	4.600	4.600	12,400	18,600	37,100
１４	163,900	34,000	210,200	9,300	4,600	6,200	4,600	17,000	13,900
１５	313,200	13,800	176,600	9,700	6,900	1,400	9,700	22,100	26,200
１６	12,000	2,400	174,900	7,200	3,600	0	0	1,200	7,200
１７	10,000	2,200	165,300	6,700	1,100	0	0	1,100	4,400
１８	89,900	13,000	142,100	7,800	3,900	2,600	2,600	5,200	11,700
１９	5,800	3,500	142,600	3,500	2,300	0	0	2,300	12,900
２０	12,400	6,200	206,000	12,400	1,200	0	1,200	1,200	13,600
２１	2,500	0	147,100	5,000	3,800	0	0	1,300	2,500

第６表　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数



第33図　断面試料(12～15)のプラント・オパール分布図



第34図　平面試料(16～21)のプラント・オパール分布図

４．稲作について

分析結果のように、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オパールが試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984）。この調査例から稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。石鳥谷館跡においては全試料よりイネのプラント・オパールが検出され、上記のことから試料21を除く９試料において稲作が行われていた可能性は高いと検出個数からは判断される。このうち断面試料12～15においてイネは非常に多く、他の分類群も他の試料に比べ多い傾向が認められる。分析残渣には炭片が認められていることから、これら分類群を含む植物が焼かれ、その灰が試料採取地点付近に混入していた結果、他の試料に比べ突出して多くなったのではないかと思われる。また、混入する要因の一つとして稲作などの肥料として灰が用いられたことが考えられよう。

試料16～21について、試料18は上記と同様のことが推測される他は特徴的な検出傾向は認められない。そのうち、試料21においてはイネの検出数は少なく、検出数からは稲作が行われていた可能性は低いと判断される。しかしながら、少ないながらもイネは検出されており、他の同一層からは多数検出されていることなどから、たまたま試料21採取地点におけるイネの密度が低かったためではないかと思われる。また、ピット状の埋積土については周りの稲作地？から土壌とともに混入したものと推測される。

以上のようにプラント・オパール分析からは稲作が行われていた可能性は高いとイネの検出個数からは判断される。また、断面試料からは多量にイネが検出され、その他の分類群とともに遺体が焼かれ、その灰が堆積物中に混入していることが予想される。なお、キビ族が比較的多く検出されているが、その形態観察から属や種レベルに分類することは難しく、キビ・アワ・ヒエといった栽培種によるものか、エノコログサやタイヌビエなどの雑草類によるものか現時点では判断できず、得られたキビ族については不明である。

５．遺跡周辺のイネ科植物

先に記したように、クマザサ属型が非常に多く検出されており、チマキザサやチシマザサといったクマザサ属型のササ類が遺跡周辺に多く生育していたと推測される。このクマザサ属型のササ類は主に森林の下草的存在で生育していたことが予想される。プラント・オパール分析と一緒に行われた樹種同定結果をみると、クリやコナラ節、モクレン属、カエデ属、オニグルミなどの落葉広葉樹類が検出されている。クマザサ属型のササ類はこの落葉広葉樹林の林下に多く生育し、群落を形成していたものと推測される。

ネザサ節型のササ類（アズマネザサ、ゴキダケなど）については日のあたる開けたところでの生育が予想される。本地域では館跡の存在から中世において人間活動は盛んであり、それにともない森林破壊など開けたところが増えたことが推測され、そうしたところにネザサ節型のササ類は生育していたのであろう。また、ウシクサ族（ススキ、チガヤなど）も同様なところに分布していたであろう。

ヨシ属（ヨシ、ツルヨシなど）については先に予想された稲作地や第32図に示されているような水路周辺に生育していたと考えられ、シバ属（ノシバなど）は比較的乾いたところにみられたであろう。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析方－。考古学と自然科学9、ｐ.15-29。

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－。　考古学ジャーナル227、ｐ.2-7。

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（２）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－。　考古学と自然科学11、ｐ.9-20。

第6章　まとめ

石鳥谷館は、第3章で既述のとおり、自然地形を巧みに利用した多郭連続式中世城館である。調査区はこの東縁部の平坦地であり、石鳥谷館の縄張りとしては最低位置にあたる。

調査の結果、柱穴様ピット約3,000基、掘立柱建物跡5＋α棟、焼土遺構5基、溝跡2条が検出され、縄文時代、平安時代、中世、近世の遺物が出土した。

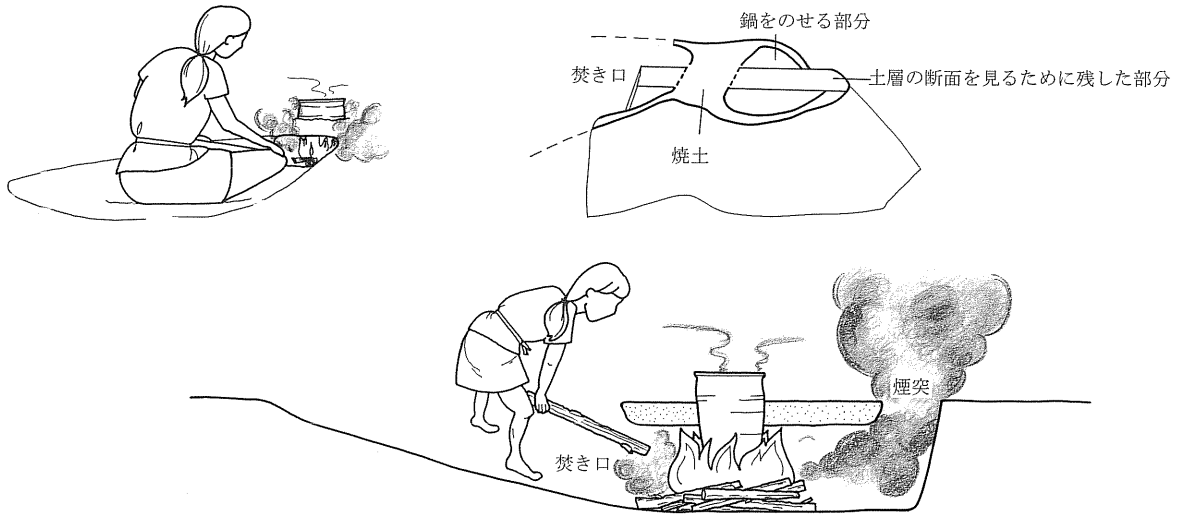
中世城館期に該当するものとして、遺物では中国産白磁、瀬戸美濃系灰釉皿、唐津系皿の遺物がある。また、遺構では焼土遺構のうち4基が鹿角地方の中世城館跡等で検出されることの多いかまど遺構であり、中世期から何らかの居住の場として使用されていたと予想される。

中国産白磁は口縁部だけ施釉されず露胎になっているロハゲ碗の口縁部であり、13世紀から14世紀頃のものと推定される。同時代の遺物が出土した遺跡として、鹿角市では高市向館跡、大館市では矢立廃寺、山王岱遺跡、二ツ井町では竜毛沢館跡が挙げられる。また、16世紀末頃のいわゆる戦国期の遺物では瀬戸美濃系、肥前系陶磁器が出土した。瀬戸美濃系のものはいわゆる大窯で作られたものと考えられる灰釉丸皿、肥前系のものは高台部が無釉で高台内に縮緬皺が見られる唐津焼の皿である。南北朝期の遺構・遺物は確認できなかったが、おそらく調査区周辺に埋まっているものと推測される。

かまど遺構は、遺構内の炭化物の年代が13世紀中頃という結果が出ており、中世期のものであることが判明している。類例としては鹿角市当麻館跡、妻の神Ⅲ遺跡、乳牛平遺跡や青森県境関館跡等がある。本遺構が生活の痕跡であることは疑いないが、城館の機能を果たしたものかどうかについては判然としない。

中世城館としての石鳥谷館の最終期は、永禄8（1565）年ないし9（1566）年に秋田安東氏が鹿角侵攻した際に、石鳥谷館が緒戦場となったという記録が『鹿角由来集』に記されている。しかし、その後同館の名は文献上にあらわれることはなく、鹿角地方の中世城館が長牛、花輪、毛馬内の3館を残して大半が破却されたと伝えられる天正19（1591）年まで館として機能していたかどうかはっきりしていない。

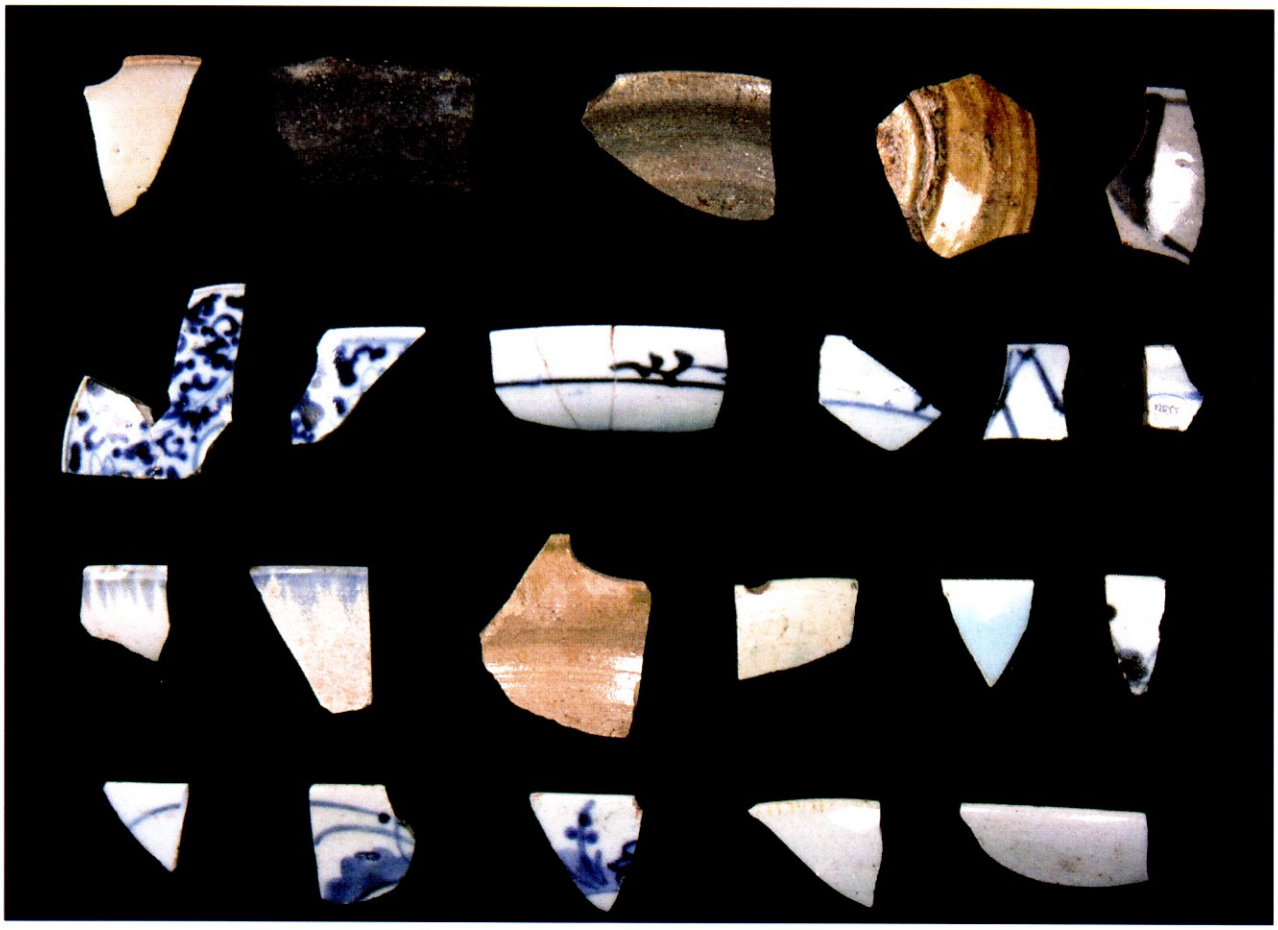
今回の調査では限られた範囲、時間での検討しか出来ず、館の性格等核心部分について触れることができなかった。今後、郭面付近あるいは郭面自体の調査によって、今回見つかった多数の柱穴様ピット等の用途・性格が判明することを期待するものである。



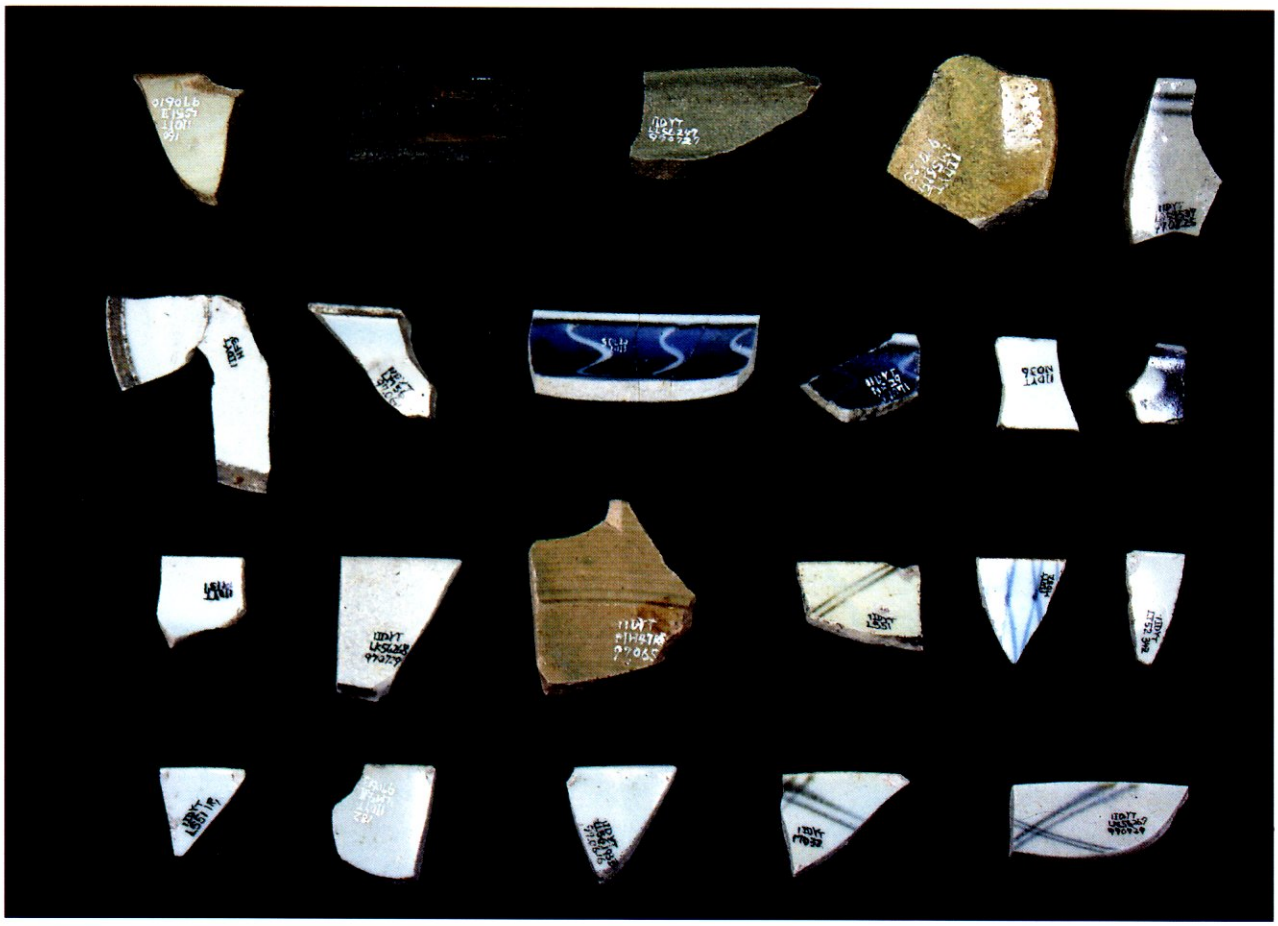
かまど遺構想定図

引用・参考文献

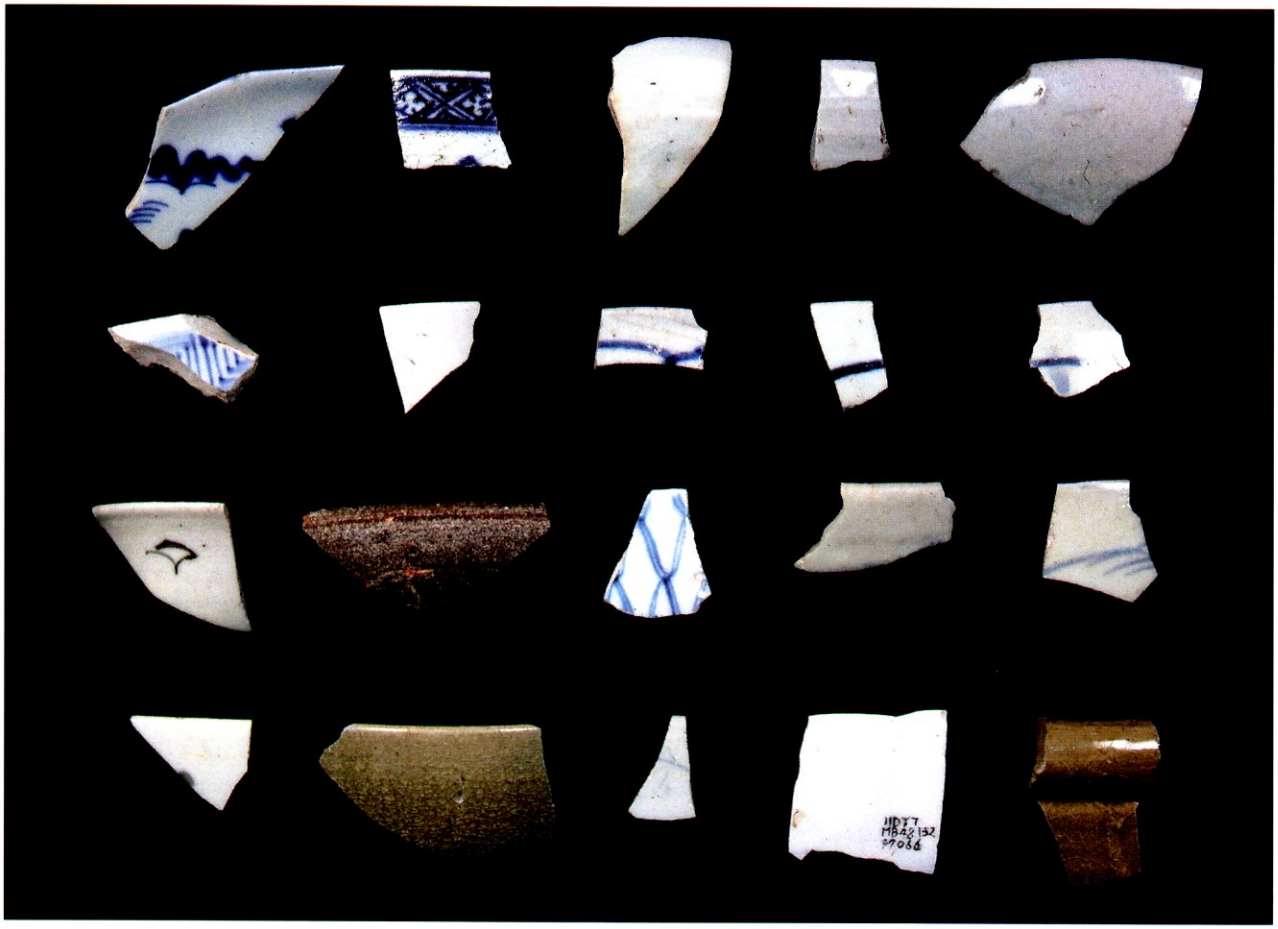
加藤唐九郎編『原色陶器大辞典』淡交社　1970（昭和47）年
井上喜久男『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社　1992（平成4）年
河原正彦「陶磁（近世編）」『日本の美術２』第237号　至文堂　1986（昭和61）年
青森県教育委員会『境関館跡－中小河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』青森県埋蔵文化財調査報告書第102集
1987（昭和62）年
浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ｘ－内館調査の成果とまとめ№１－』昭和61・62年度浪岡城跡発掘調査報告書
1988（昭和63）年
鹿角市教育委員会『鹿角の館（2)』鹿角市文化財調査資料23　1983（昭和58）年
鹿角市教育委員会『当麻館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料37　1989（平成元）年
鹿角市教育委員会『高市向館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料22　1982（昭和57）年
大館市教育委員会『矢立廃寺発掘調査報告書』　1987（昭和62年）
秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ－妻の神Ⅲ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第108集
1984（昭和59）年
秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ－妻の神Ⅰ遺跡・乳牛平遺跡－』秋田県文化財調査報告書第107集
1984（昭和59）年
秋田県教育委員会『西山地区農面農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－高瀬館跡－』秋田県文化財調査報告書第
153集　1987（昭和62）年
秋田県教育委員会『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－山王岱遺跡－』秋田県文化財調査報告書第221集
1992（平成4）年
秋田県教育委員会『竜毛沢館跡発掘調査報告書－一般国道７号二ツ井バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県
文化財調査報告書第188集　1989（平成元）年



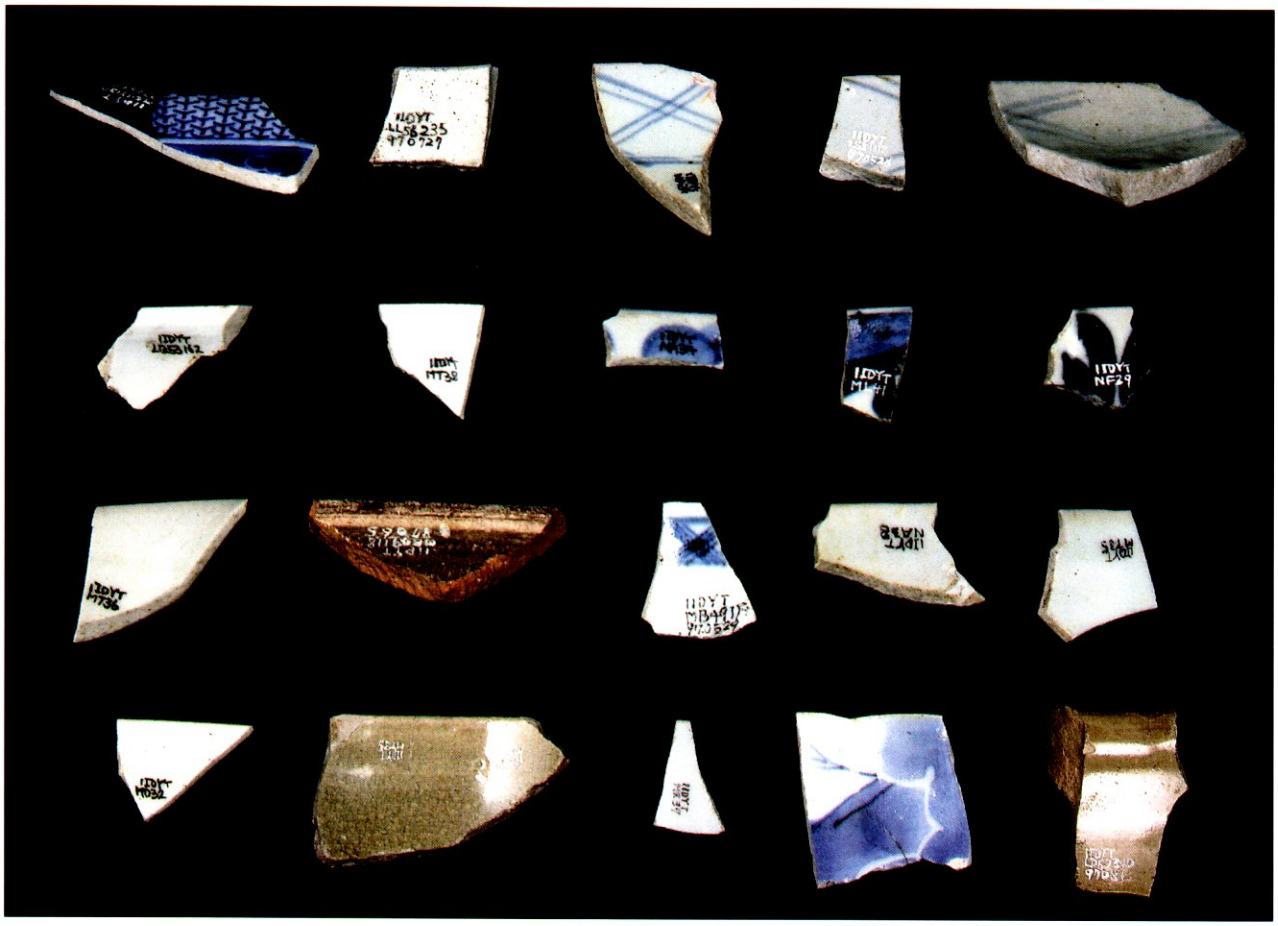
陶磁器(1)　外面



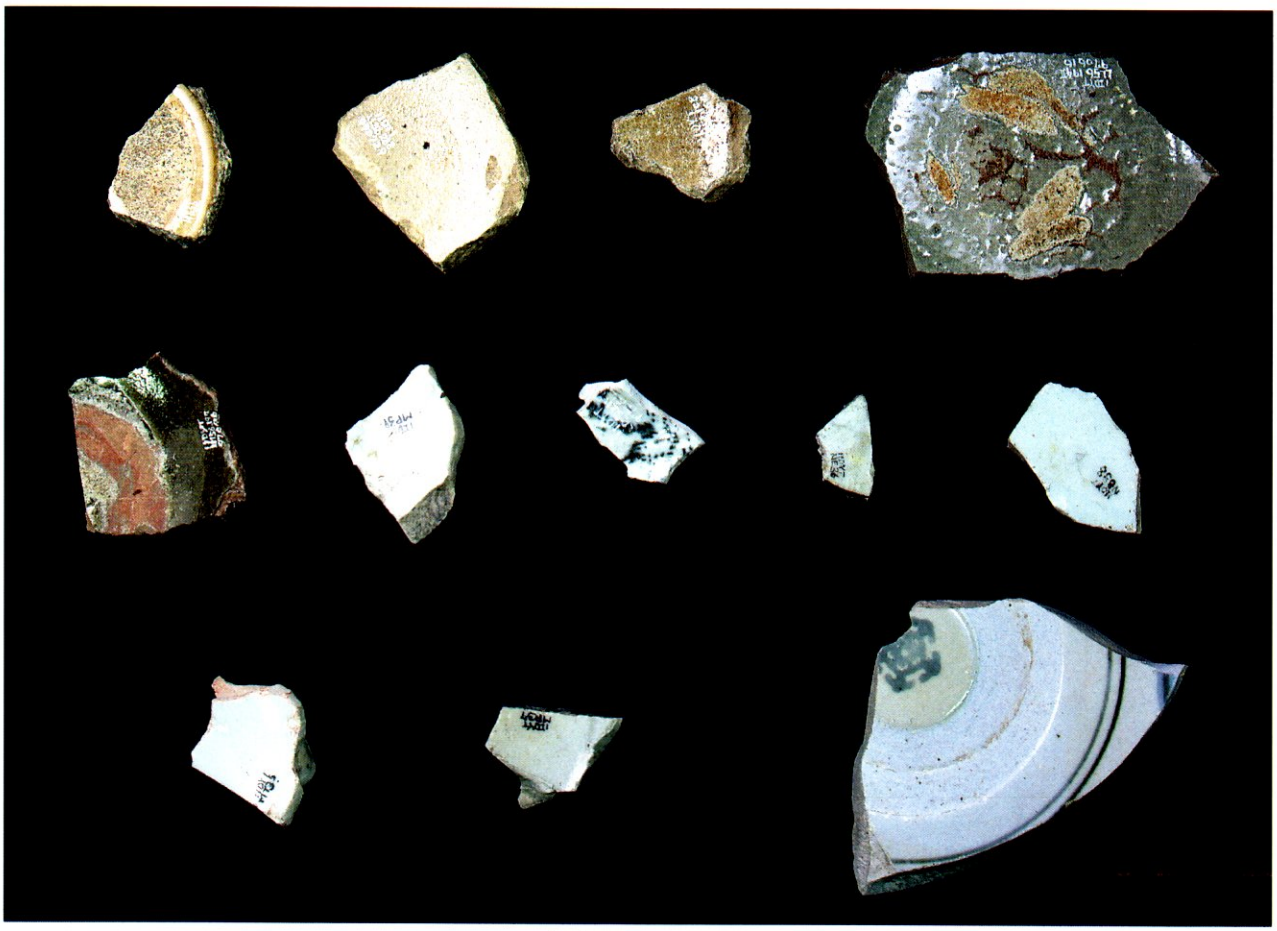
同　　上　内面



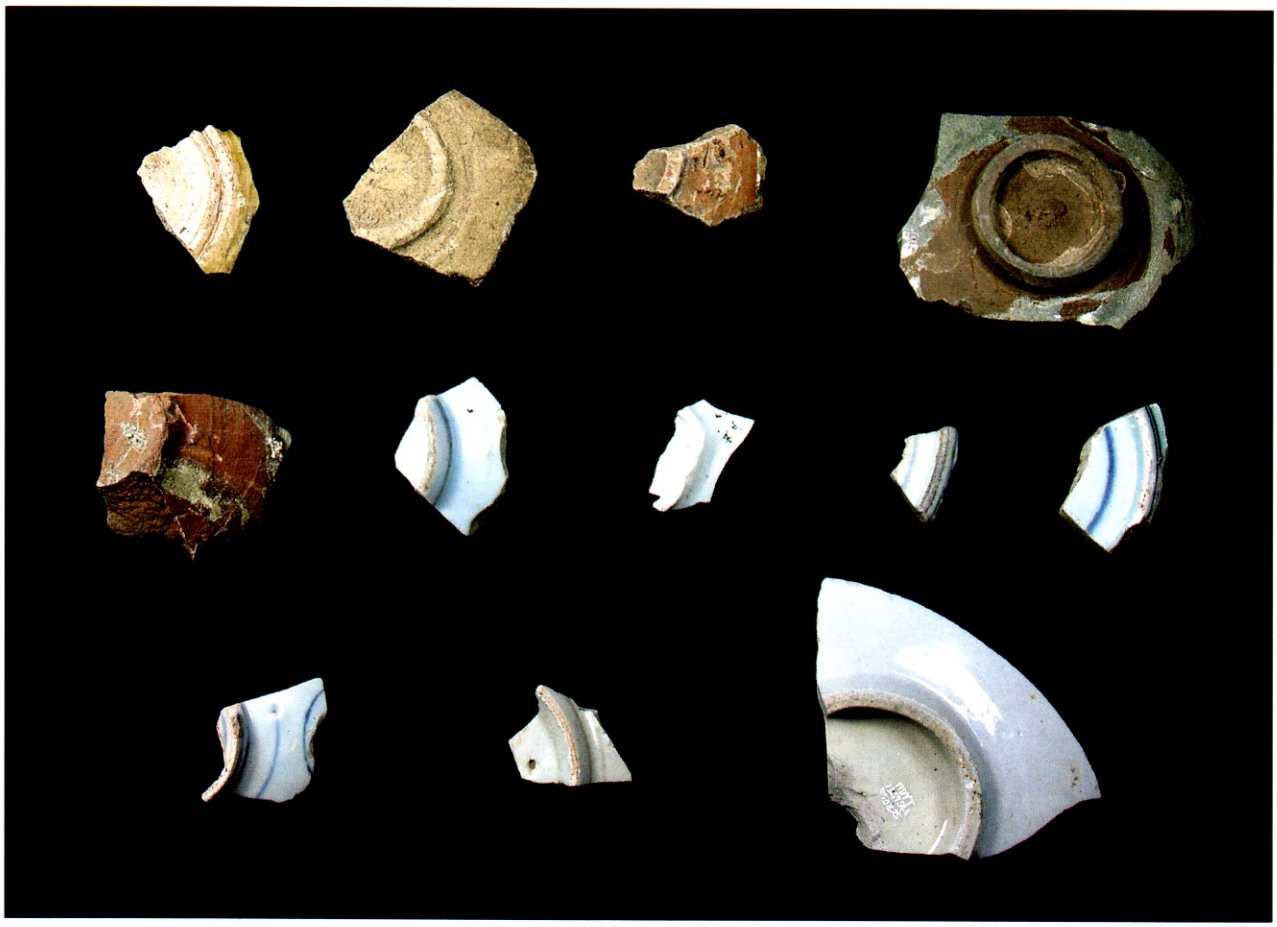
陶磁器(2)　外面



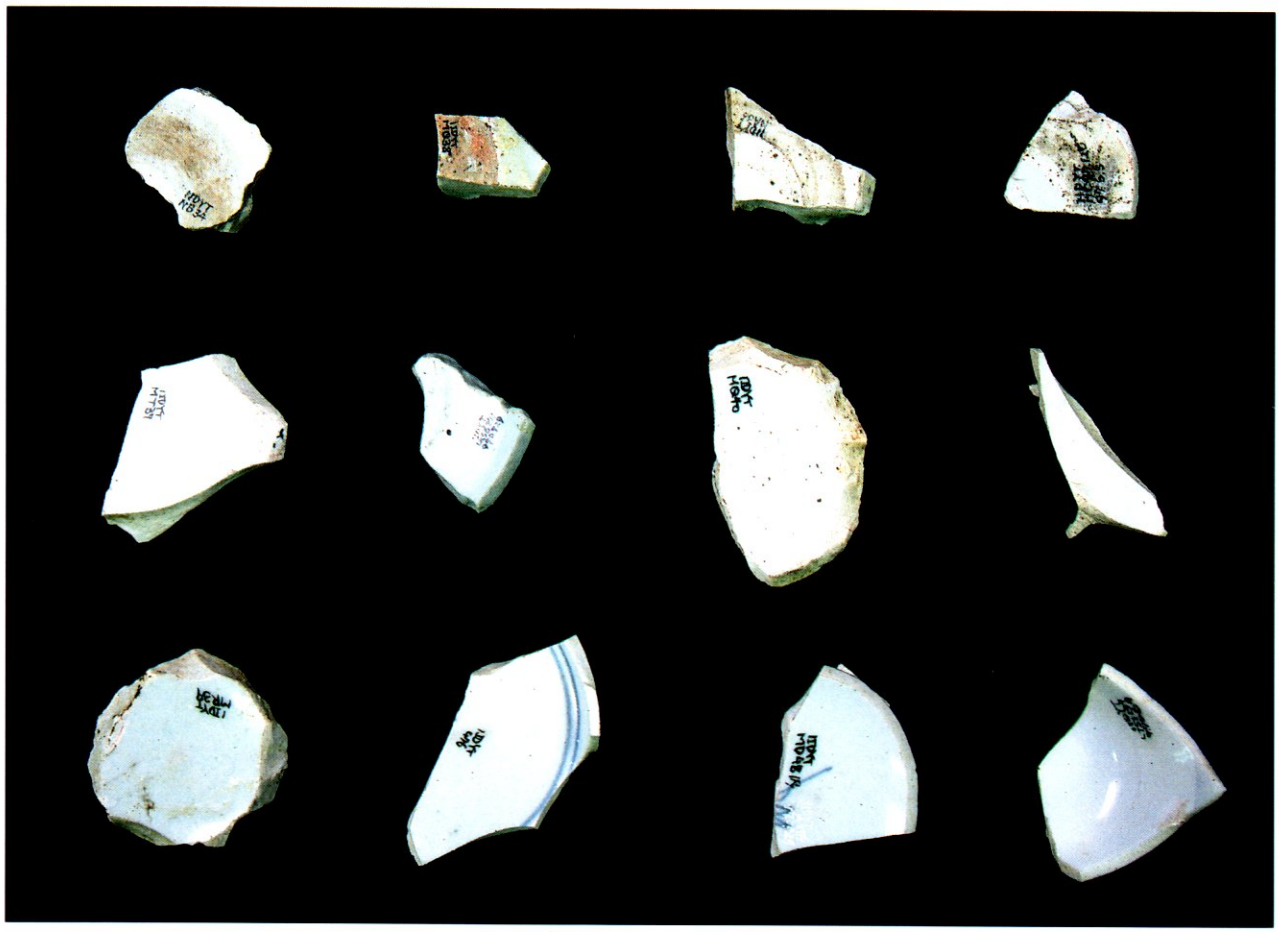
同　　上　内面



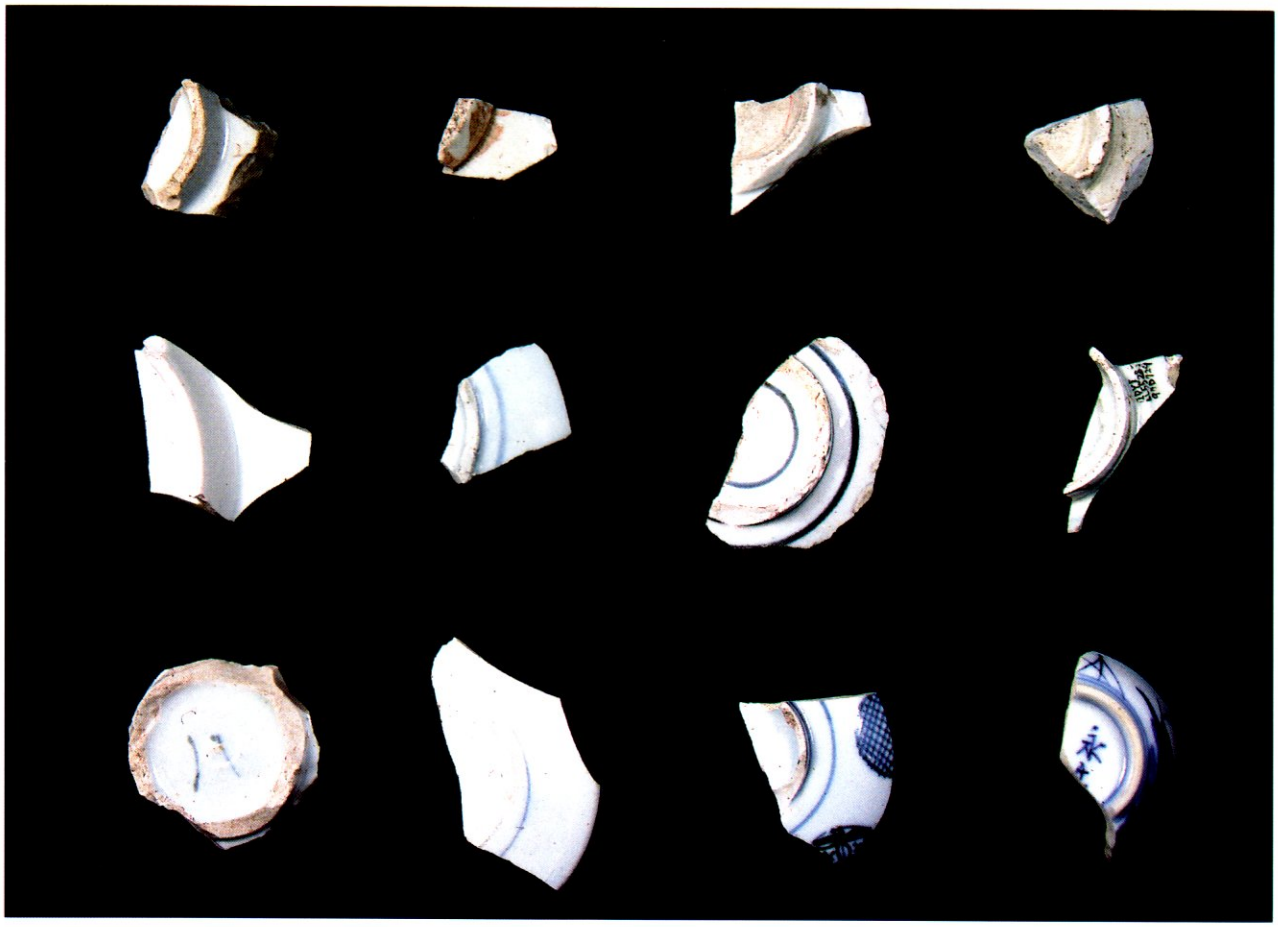
陶磁器(3)　内面



同　　上　外面



陶磁器(4)　内面



同　　上　外面

遺跡遠景(1)　航空写真

同　　上(2)　航空写真

図版6

遺跡近景　南から

A区近景　南から

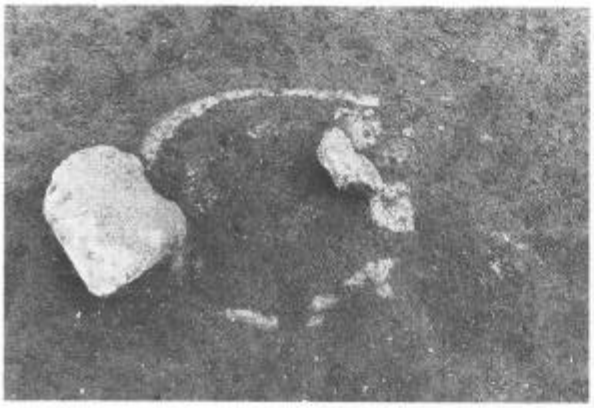
C・D・E区近景
北東から
（下はE区南端から
堀切集落を望む）

調査区北西側空堀
東から

調査区西側平坦面
（手前がＡ区）
南から

Ａ区柱穴検出状況
北東から

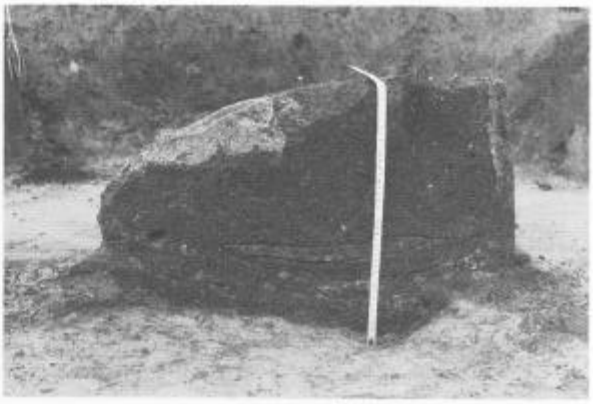
図版8



ＳＮ06確認状況　西から

ＳＮ07確認状況　西から

ＳＮ08断面　東から



ＳＮ08断面　南東から

ＳＮ09断面　南西から

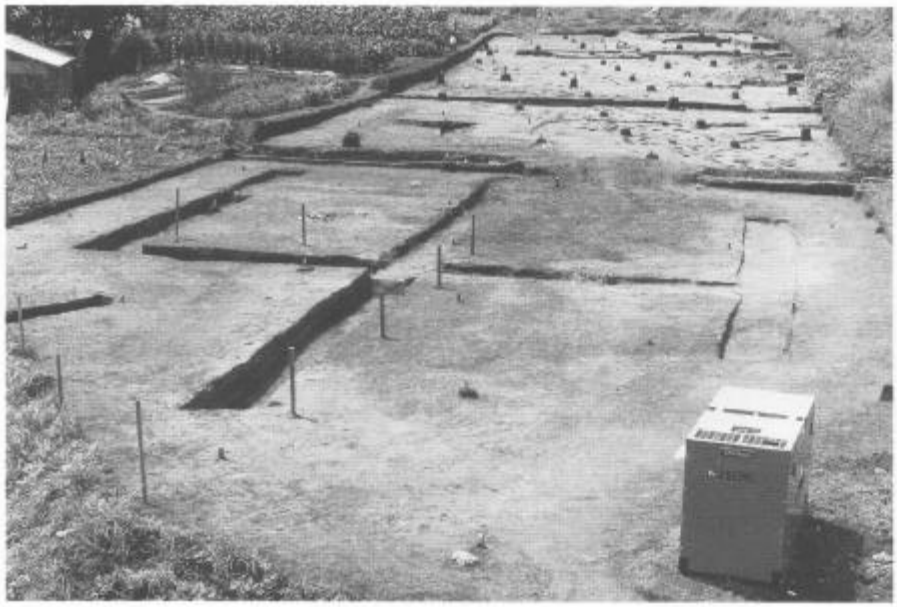
ＳＮ09遺物出土状況　南から

ＳＮ10確認状況　南から

ＳＮ10調査状況　東から

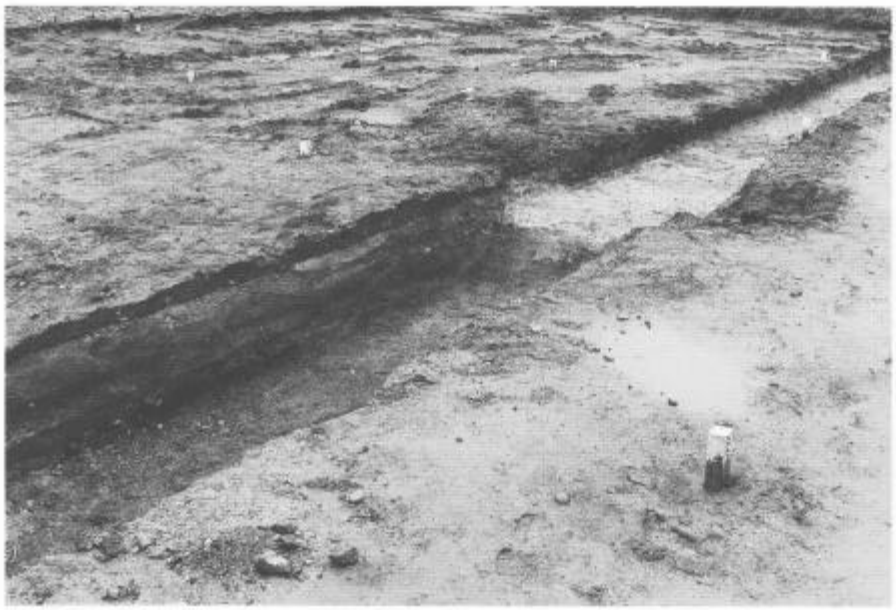
A区北東隅土層堆積状況
南から

同上縄文土器出土状況
南から

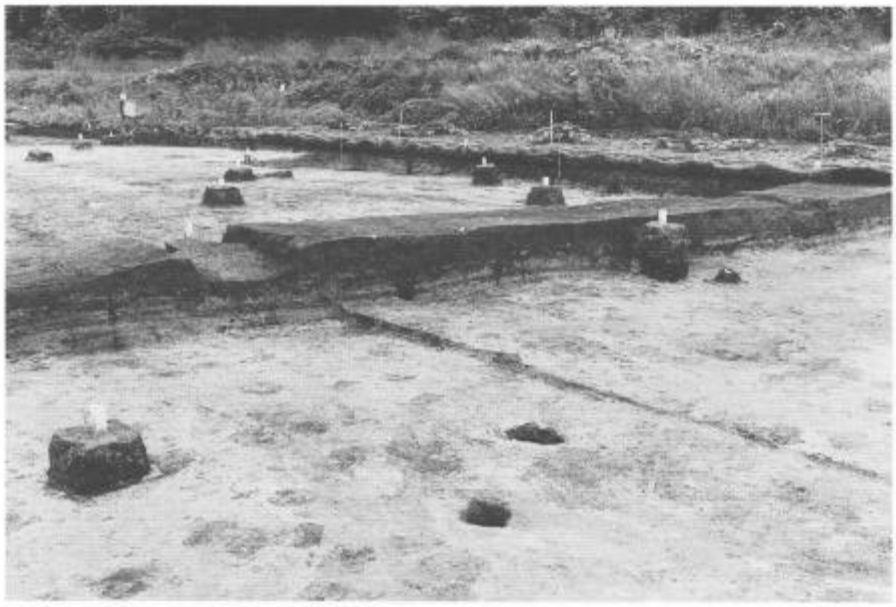


C区調査状況　北東から

図版10

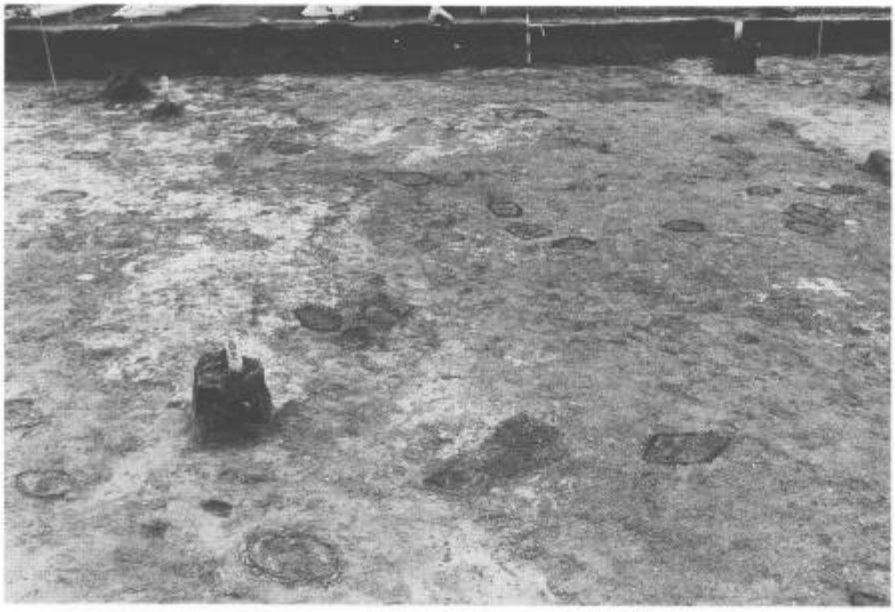


C区土層堆積状況
北から



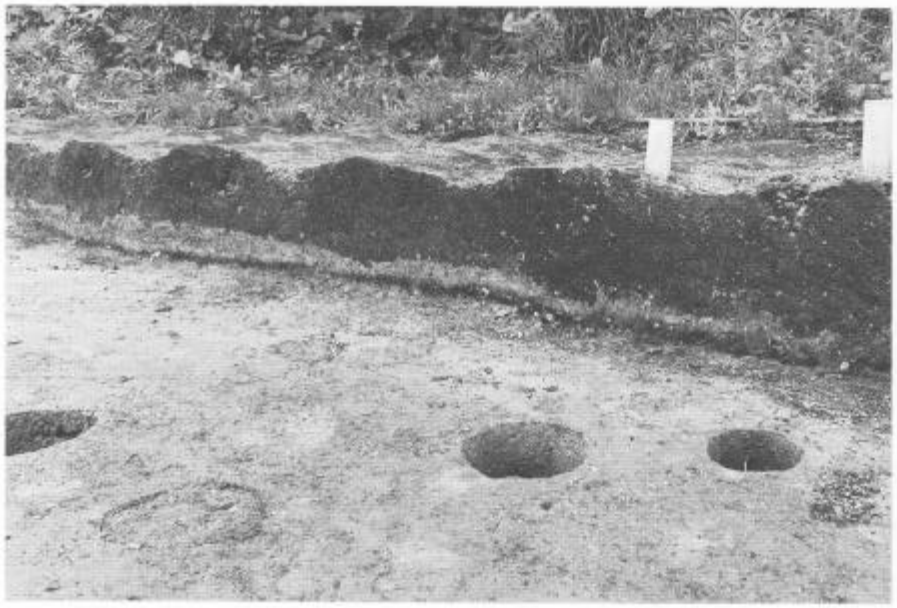
D区土層堆積状況(1)
東から

E区遺構検出作業状況
南から



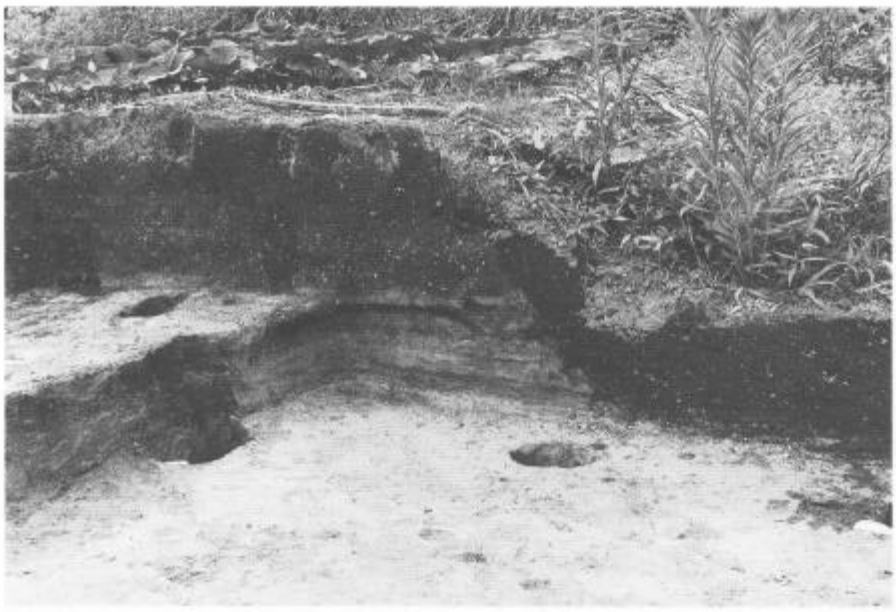
E区柱穴検出状況
南東から

D区土層堆積状況(2)
南東から



同　上(3)　北東から

図版12

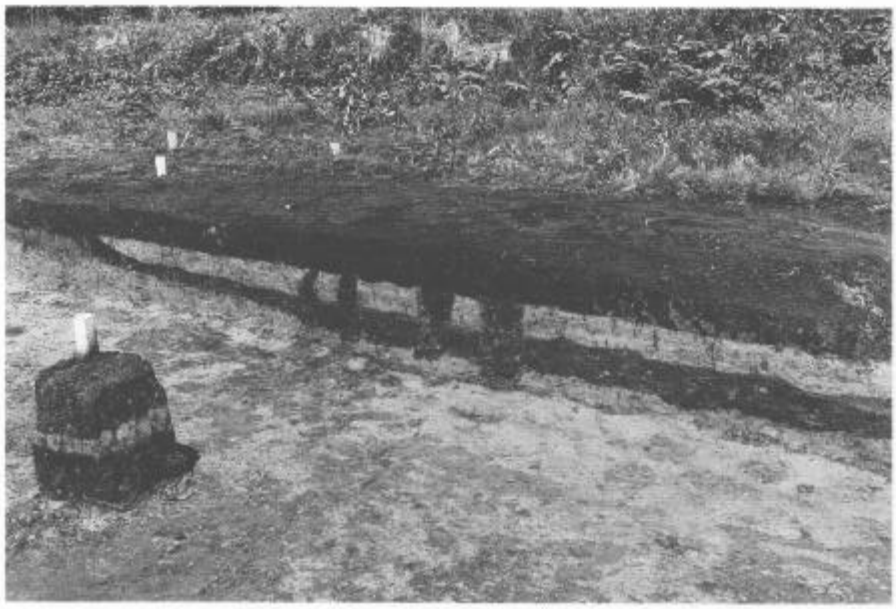


D区(4)・E区(1)
土層堆積状況
北東から

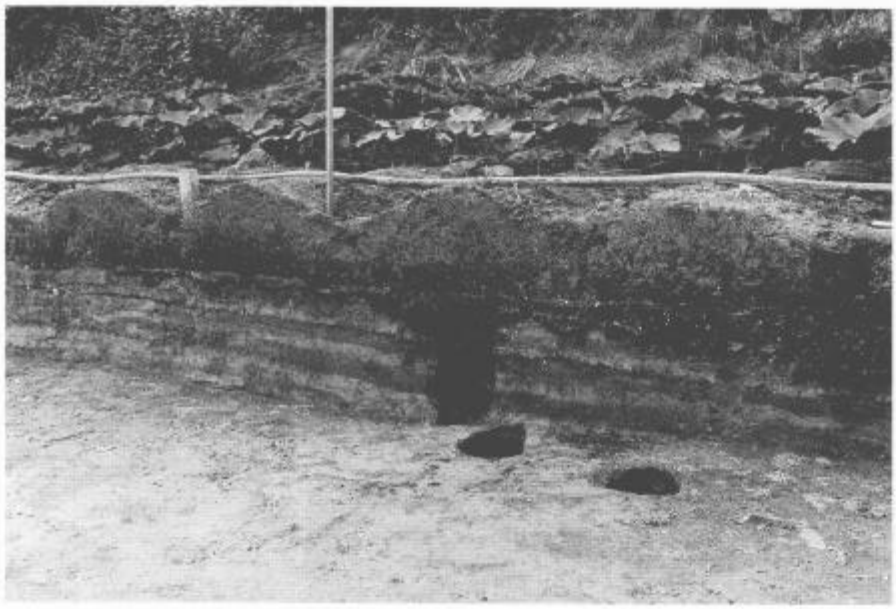
D・E区柱穴完掘状況
北東から

D区礫層露出地域
北西から

E区柱穴検出作業状況
南西から

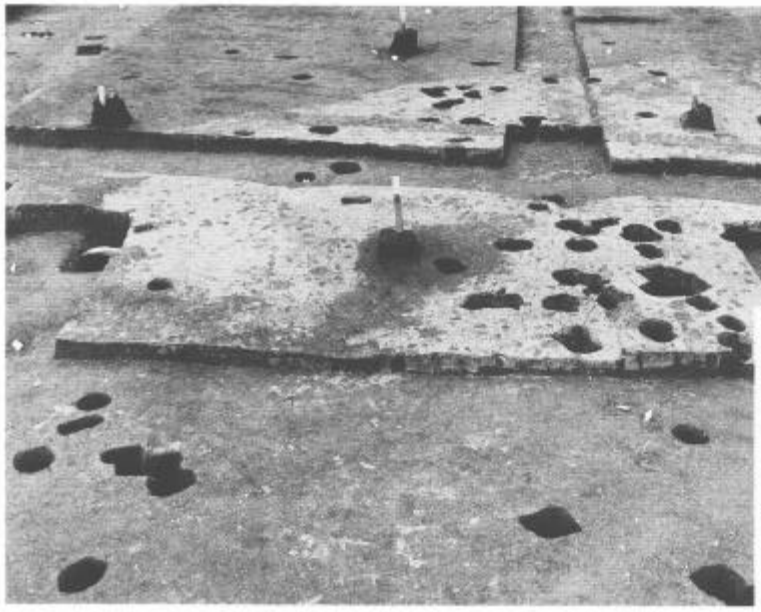


E区土層堆積状況(2)
東から



同　上(3)　東から

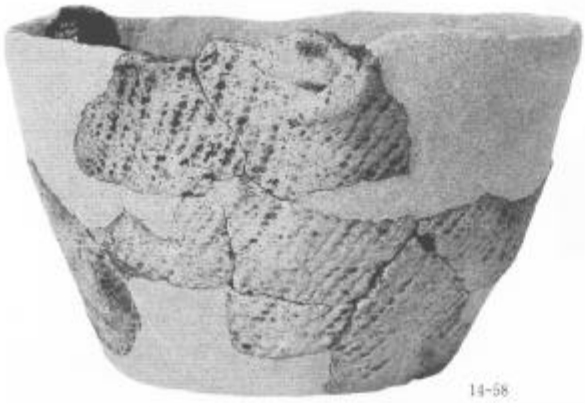
図版14



E区シラス堆積部分
北東から
（人の輪内がシラス範囲）

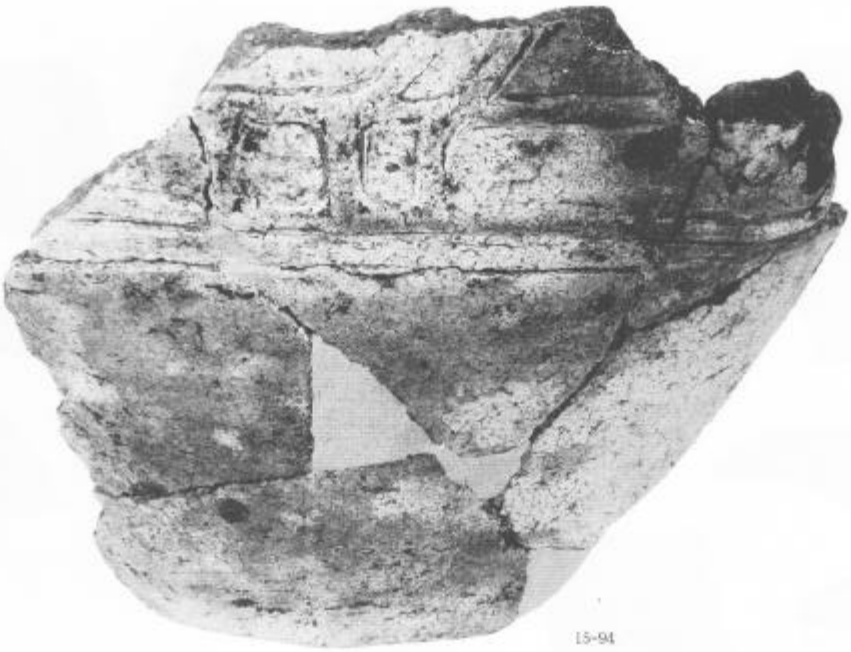
流木検出状況　北東から

B区調査状況　北西から
（上の写真は土層堆積状況）



14-58

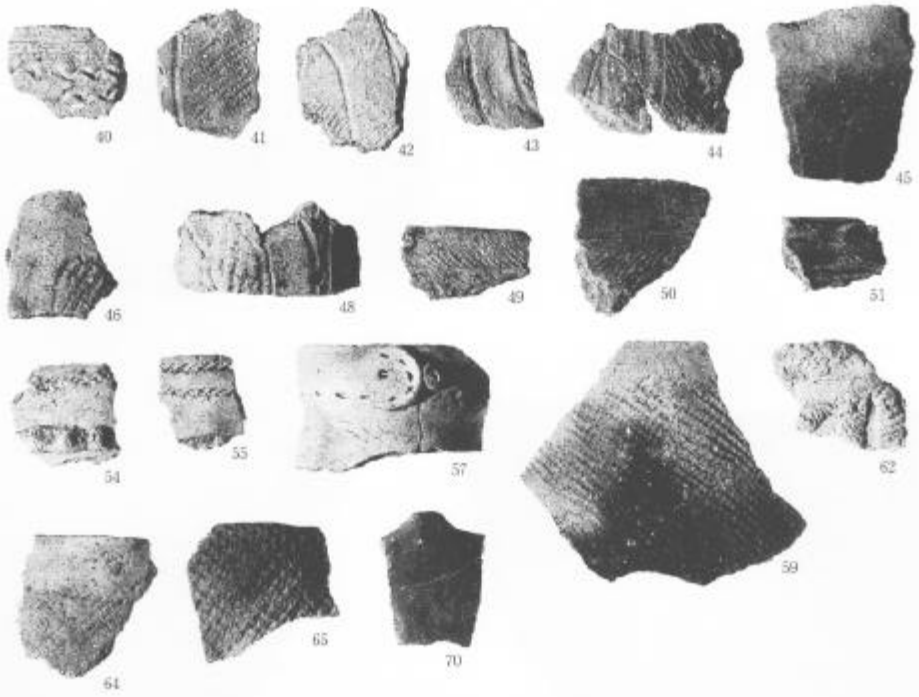
16-105



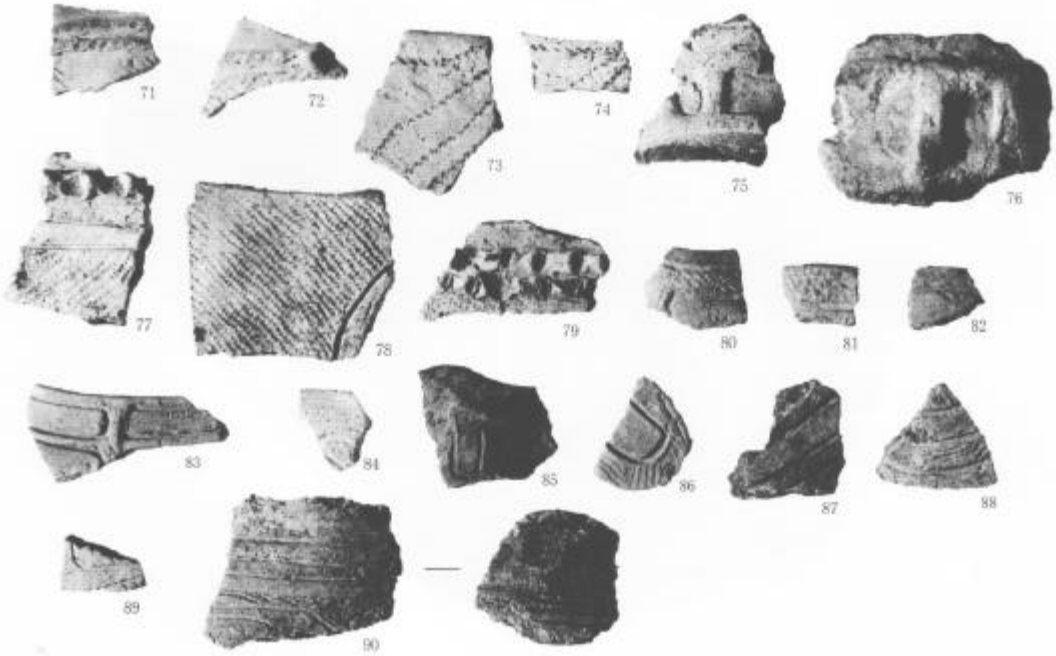
15-94

縄文土器

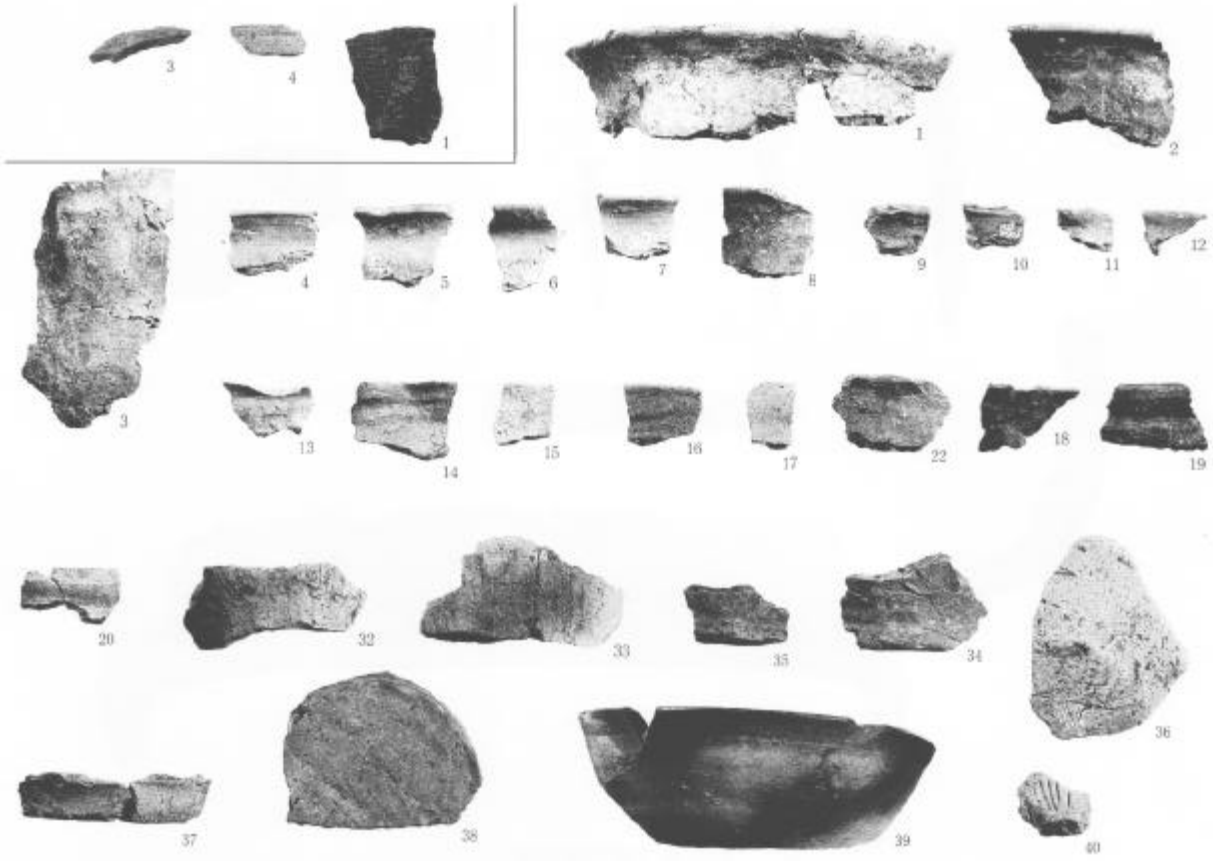
［縮尺不同］



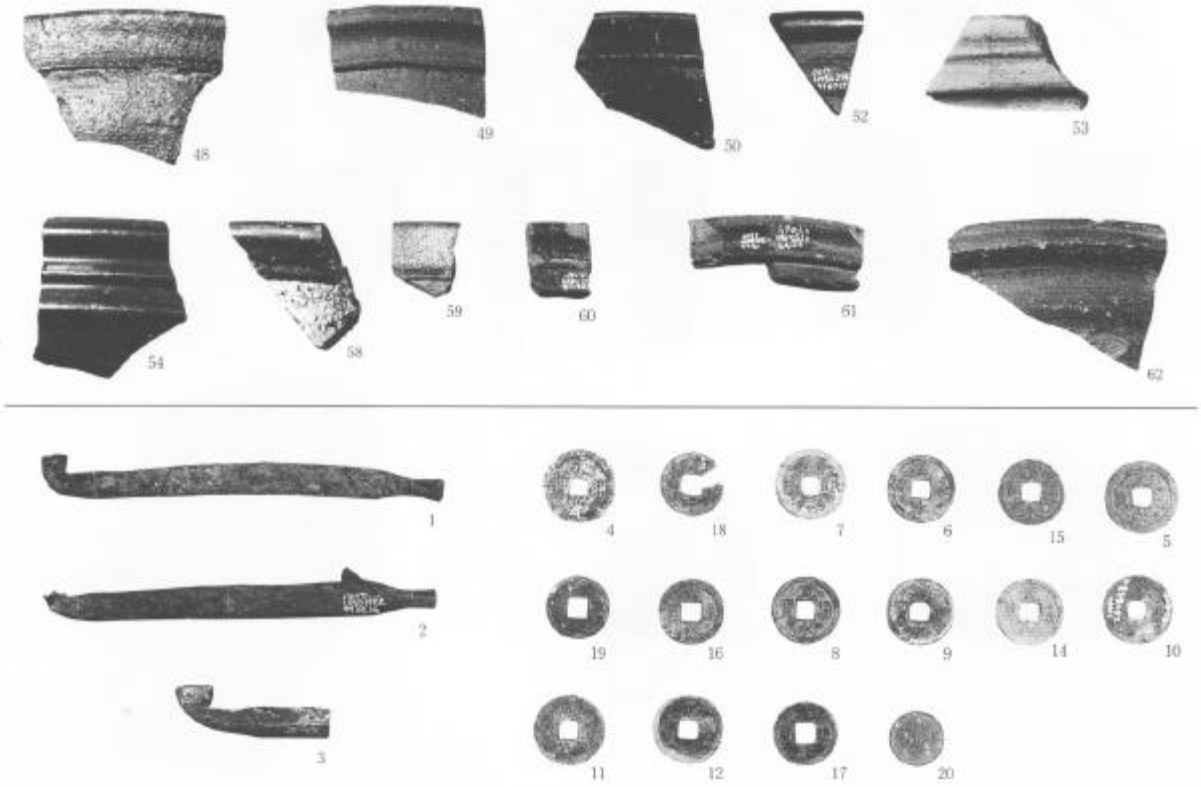
縄文土器（第14図対応）



縄文土器（第15図対応）

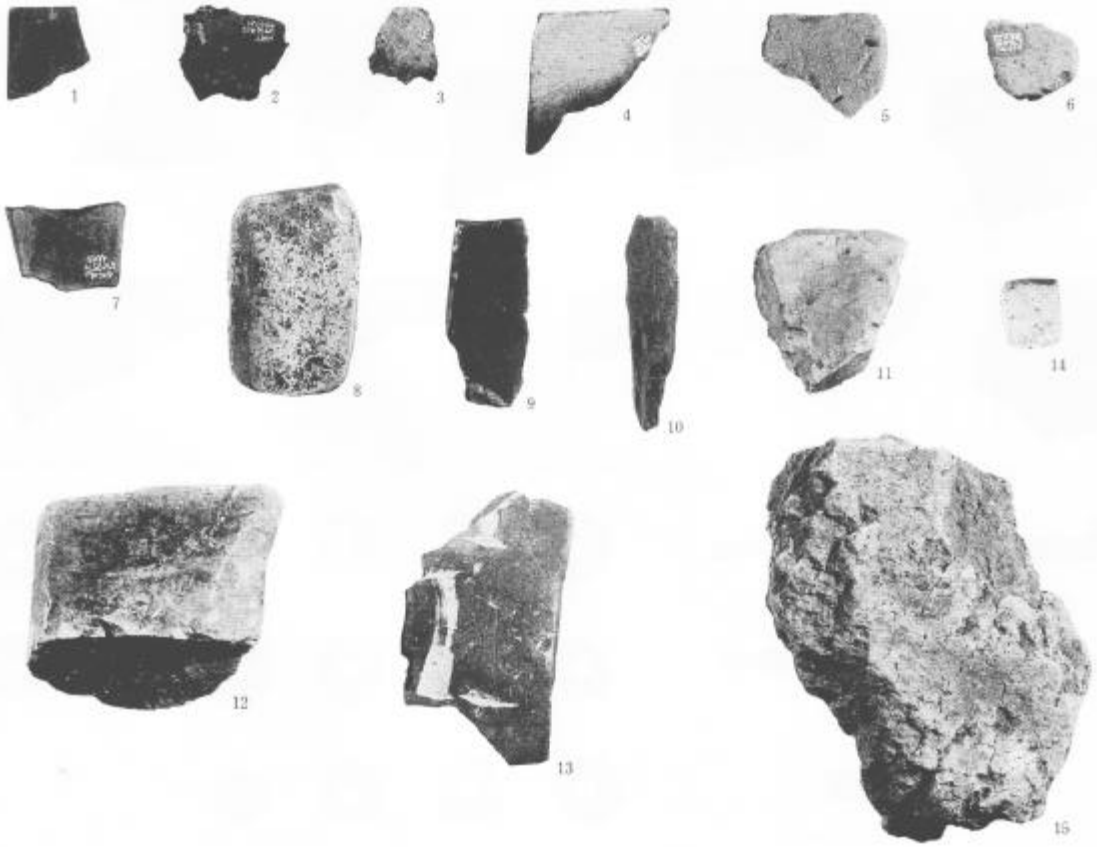


須恵器・土師器（第21・22図対応）　〔縮尺不同〕



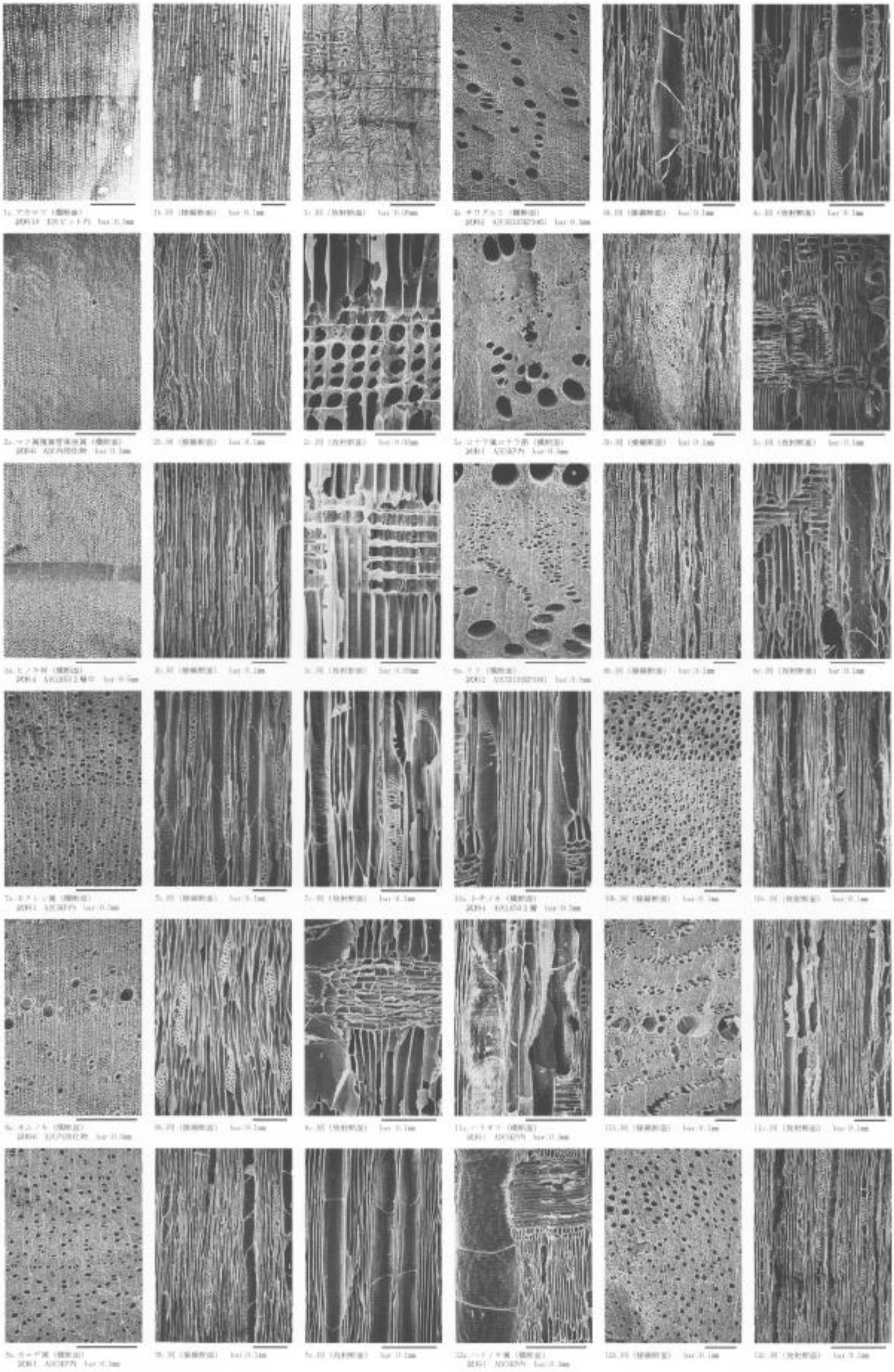
中世・近世の遺物（第24・29図対応）　〔縮尺不同〕

鉄製品（第30図対応）



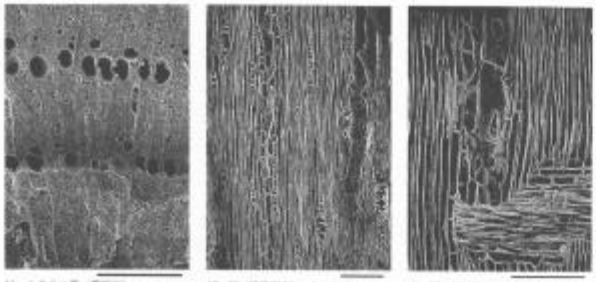
時期不明の遺物（第31図対応）

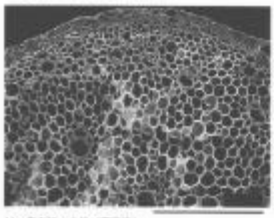
〔縮尺不同〕



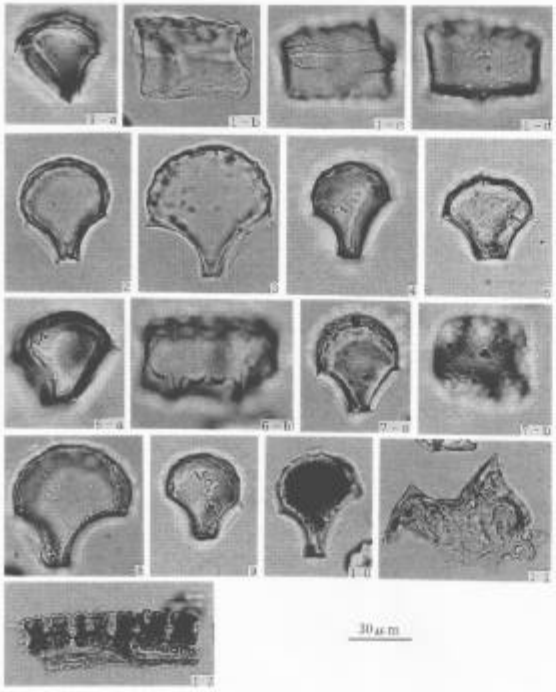
木材(1)

図版20

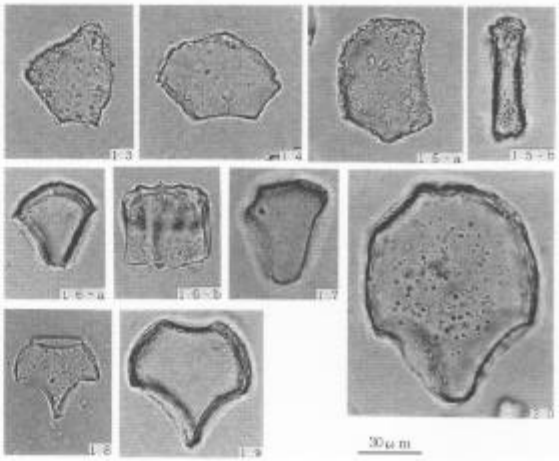




木材(2)



1～10：イネ（1-a，2～5，6-a，7-a，8から10：断面，
1-b，6-b：側面，1-c：表面，1-d，7-b：裏面）
1：試料12，2：試料13，3：試料14，4：試料15，5：試料16
6：試料17，7：試料18，8：試料19，9：試料20，10：試料21
11：イネ属部位酸体破片　試料13
12：イネ属型単細胞珪酸体　試料15



13～15：クマザサ属型（13，14，15-a：断面，15-b側面）
13：試料17，14：試料20，15：試料3
16：ネザサ節型（16-a：断面，16-b：側面）　試料12
17：ウシクサ族（断面）　試料14
18，19：シバ属（断面）　18：試料13，19：試料14
20：ヨシ属（断面）　試料14

プラント・オパール

報告書抄録

ふりがな	いしどりやたてあと
書名	石鳥谷館跡
副書名	県道比内大葛鹿角線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第２７９集
編著者名	磯村　亨・髙橋　保
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　　ＴＥＬ0187-69-3331
発行年月日	西暦1998年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いしどりやたてあと 石鳥谷館跡	あきたけんかづのし 秋田県鹿角市 はちまんたいあざいしどりや 八幡平字石鳥谷 ばんち 87番地外	52209	9-353	40° 8′ 46″	140° 46′ 52″	19970519 ～ 19970925	3,550	県道比内大葛鹿角線建設事業に係る事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石鳥谷館跡	散布地	縄文時代 古代 近世	掘立柱建物跡　5 溝跡　2 焼土遺構　5 柱穴様ピット　2,947	縄文土器・石器 土師器・須恵器 陶磁器・銭貨・煙管 鉄製品・煉瓦・砥石	焼土遺構のうち４基はかまど状遺構
	館跡	中世			